

令和7年度

第66回 沖縄県小・中学校長研究大会

那覇大会要録



期 日：令和7年11月6日(木)・7日(金)

会 場：全体会場 琉球新報社 ホール

分科会場：八汐荘・南部合同庁舎・沖縄タイムスビル
給食会館・ほしぞら公民館・沖縄県立武道館

主催 沖縄県小・中学校長会



あ い さ つ

沖縄県小・中学校長会

会長 田 島 正 敏

第66回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会の開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

本大会に、県内の小学校、中学校の全校長362名が一堂に会し、直接顔を合わせ、言葉を交わし、仲間の温かさを感じながら開催できることを心から嬉しく思います。本大会の成功に向け、多大なご尽力をいただいた那覇地区校長会の皆様に、心より感謝申し上げます。

私たち沖縄県小・中学校長会の目的は、「小・中学校教育の振興を図るため、学校経営の諸問題の解決を図る」ことです。この目的達成のため、私たちは日頃から様々な課題と向き合っています。その活動の柱となるのが、教育課題を話し合う「地区教育懇談会」と、実践から得た成果や課題を共有する「本研究大会」です。今回の大会では、急速に変化する社会に対応し、子どもたちが未来を切り拓く力を育む教育について、熱い議論を交わしたいと思います。

現代社会は、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代と言われています。少子化、グローバル化、そして技術革新など、課題は山積しています。新たな感染症の感染拡大や国際情勢の不安定化は、まさに予測困難な時代を象徴する出来事でした。このような時代だからこそ、私たちは、子どもたちが自らの力で未来を創り、持続可能な社会の担い手となるための教育を追求しなければなりません。

本大会は、小学校では「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を、中学校では「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を研究主題に掲げています。この主題には、社会の変化に対応するだけでなく、予測できない未来を自ら創造していくという、私たちの強い意志が込められています。この研究主題のもと、小学校10分科会、中学校6分科会で日々の実践や課題を共有し、解決策を探求する、有意義な議論が交わされることを期待しています。お互いの成功事例や悩みを積極的に語り合い、知見を深めていきましょう。

大会1日目は、半嶺満県教育長より、教育に対する熱い思いを直接お聞きます。日々の学校経営に活かせる多くの示唆をいただけることでしょう。

そして、2日目は、沖縄県の遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表の具志堅隆松氏にご講演いただきます。今年は戦後80年という節目の年であり、「平和」について深く考える貴重な機会です。子どもたちが将来にわたって平和に暮らせる社会を築くために、私たち教育者が何をすべきか、改めて心に刻みたいと思います。この2日間で得られた多くの学びを、それぞれの学校経営に活かし、子どもたちのより良い未来を創造する一助としていきましょう。

最後に、本大会の開催にあたり、ご指導ご助言を賜りました沖縄県教育委員会、沖縄県教育委員会連合会、那覇市および那覇市教育委員会をはじめとする関係諸機関、さらには全国連合小学校長会、九州地区小学校長協議会、全日本中学校長会、全九州中学校長会に、心から敬意と感謝の意を表します。そして、本大会の成功にご尽力いただいたすべての皆様に、重ねてお礼を申し上げ、挨拶とさせていただきます。



挨拶

沖縄県教育委員会

教育長 半 嶺 満

第66回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会の開催にあたり、御挨拶を申し上げます。

沖縄県小・中学校長会の皆様方には、日頃から創意あふれる学校経営に鋭意努力され、本県教育の充実・発展に御尽力をいただいておりますことに対し、心より感謝申し上げます。

さて、現在、教育をめぐる社会の現状は急激に変化しており、本格的な人口減少・少子高齢化の進行、DXやAI技術の進展と「Society5.0時代」の到来、ウェルビーイングなど、あらゆる課題や展望への対応が期待されております。また全国的に教員不足がさげられる中、子どもたちに対するより良い教育を行うためにも、質の高い教員の確保は喫緊の課題であり、「休日の部活動の地域移行」「支援スタッフの配置充実」など学校における働き方改革・勤務環境整備等のさらなる向上が求められております。

そこで、本県では、今年度の重点的取組事項として、(1)働き方改革とメンタルヘルス対策の推進、(2)教育DXの推進、(3)キャリア教育の推進、(4)学力の向上、(5)不登校児童生徒の支援、(6)国際理解と外国語教育の推進、(7)特別支援教育に関する専門性の向上、以上7つの柱に加え、今年度は戦後80年目の節目として「平和教育」の更なる充実を進めております。特に第4番目に掲げた「学力の向上」においては、学びの質を高める授業改善に向け、『自立した学習者』育成プロジェクト」を策定し、各学校の「子どもの姿に基づいた授業改善」の実現を力強く後押ししてまいります。

このような折り、貴会において小学校は「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、中学校は「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」を大会主題に、これからの教育課題について研究されたことは大変意義深く、各分科会の提案は、時宜を得たものであります。これからも、子どもたちの期待と保護者、地域の方々の信頼に応えられるよう、校長のリーダーシップを発揮し、より充実した教育活動の発展を切に願っております。

「不易を知らざれば 基立ちがたく 流行を知らざれば 風新たならず」の「不易流行」を念頭に置き、これまでの教育実践とICTを組み合わせ、**「個別最適な学び」と「協働的な学び」**を、一体的に充実させていく必要があります。沖縄県教育委員会としましても、その取組の充実を図るべく、市町村教育委員会と共に学校を支援してまいります。

結びに、本大会の充実に御尽力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げますとともに、本大会の成功と、沖縄県小・中学校長会の益々の御発展を祈念申し上げ、挨拶といたします。

令和7年11月6日



祝 辞

沖縄県市町村教育委員会連合会

会長 山城達彦

第66回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会が開催されますことを心よりお慶び申し上げます。

沖縄県小・中学校長会のみなさまにおかれましては、日頃より本県の学校教育の充実発展のため、高い志と教育理念のもと、ご尽力されていることに對し、心より敬意を表します。

昨今の急激に変化する時代において、子どもたちを支える保護者や教職員のウェルビーイングを大切にしながら、山積する学校課題の解決、進化するICT環境・外国語教育・多様性への対応、地域社会との様々な連携等、教育現場における学校長の職責は、ますます重要性を帯びております。学校長は、子どもたちや保護者、教職員から厚い信頼を得、高いマネジメント能力とリーダーシップを発揮することが求められています。魅力ある学校経営は、子どもたちの笑顔に繋がっていきます。

今大会においての主題である「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す 小学校教育の推進～多様な価値を持つ他者と主体的・協働的に学び合い、豊かな未来社会を創造する子どもを育む学校経営～」 「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」のテーマに基づき、研究協議が深まり、より充実した教育活動への展開へと道筋が開かれる契機となりますことを期待いたします。

沖縄県市町村教育委員会連合会といたしましても、子どもたちが心身共に健全で、豊かな人間性と創造性を育み、持続可能な社会の創り手となるよう、本県の教育環境づくりに向けて努めて参りますので、皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

結びに、今回の研究大会が、本県学校教育の一層の充実発展に、大いなる示唆を与えていただくことを期待するとともに、皆様のご健勝と、ますますのご活躍を祈念いたしまして、祝辞といたします。



歓迎の御挨拶

那覇市長

知 念 寛

はいさい ぐすーよー ちゅーうがなびら。(皆さまこんにちは)

第66回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会の開催にあたり、ご挨拶を申し上げます。

本大会が本市で開催されますことを大変嬉しく思うとともに、全県から本市へお越しいただいた皆さまに、那覇市民を代表して心から歓迎申し上げます。

また、本日ご参加の沖縄県小中学校長会の皆様におかれましては、日頃より子ども達が安全安心に学校生活を送れるよう学校運営にご尽力を賜り、心より敬意を表しますとともに、深く感謝申し上げます。

さて、社会情勢は目まぐるしく変化しており、私たちを取り巻く環境も大きく変わろうとしています。グローバル化や生成AIといった技術の進歩や少子高齢化問題等、社会の変化が激しい中、これまでに増して、「人を育てること」つまり、教育は、何事にも変えることのできない大切な営みであり、そして、それを支える私達大人や地域社会の役割は非常に重要だと考えております。

うちなーぐちで「童（わらべー）、習（なら）しむん」というように、子どもの将来は親や周囲の大人の関わり方によって決まるという、教育環境を整えることの大切さが黄金言葉として伝えられております。子ども達の教育の質を高め、学びの向上につなげていくためには、教職員の職場環境を整えることがますます重要になってまいります。本市ではこれまで、教育現場の環境改善に向け、教職員の心のケアを始め、業務負担軽減に向けてのDX推進などを図ってまいりました。引き続き「教員負担軽減タスクフォース」を中心に対策の強化に取り組んでまいります。

去る9月には、本市で開催されたU-18野球ワールドカップには、世界12か国の選手達が大会に参加され、市内小中学校の将来を担う子ども達が選手との交流を通して異文化に触れ、世界を身近に感じながら、国際理解につながる良い機会を得られたものと感じております。

近年、予測困難な時代を迎えるといわれておりますが、子ども達が困難に負けず、笑顔で強く生き抜く勇氣と逞しさを持ち、自分らしくのびのびと育ち、希望ある未来を描ける社会が実現できるよう、今後も教育環境の整備に全力を尽くしてまいります。

「誰一人取り残さない学校づくり」を目指し、ご参加される皆様が様々な教育課題を共有し、各地区の貴重な研究実践に基づく活発な議論を通して、相互に意見を交わし、相互理解を深め、よりよい教育の在り方を模索しながら、解決策を導き出すことに繋がることを期待しております。

結びに、本大会の開催にご尽力いただいた関係者の皆さまに感謝申し上げますとともに、沖縄県小・中学校長会のますますのご発展ならびに皆さまのご健勝とご活躍を祈念申し上げ、歓迎の挨拶といたします。

いっぺー にふえーで一びる。(ありがとうございました)

令和7年11月6日

教育長講話

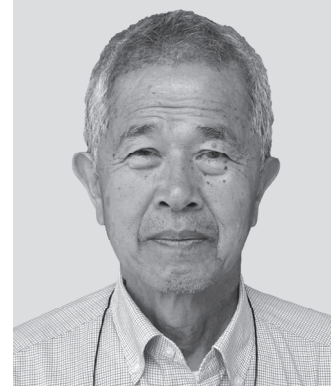
本県の教育課題と対策（仮題）

- M E M O -

[illegible]

記 念 講 演

演 題：「遺骨収集の現場から見える沖縄戦」
日 時： 令和7年11月7日（金） 10：10～11：40
場 所： 琉球新報社
講 師：^{ぐ し けん}具志堅 ^{たか まつ}隆 松 氏
（沖縄戦の遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表）



【プロフィール】

1954年那覇市生まれ

沖縄戦の遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表

1982年から遺骨収集を続け、これまでに約500柱の遺骨を掘り出し、遺族の元に届ける。

2011年吉川英治文化賞受賞

目 次

会長 あいさつ、教育長 挨拶、県市町村教育委員会連合会会長 祝辞、那覇市長 歓迎の御挨拶

第66回沖縄県小・中学校長研究大会 那覇大会開催要項

1	目 的	1
2	大会主題・趣旨	1
3	主 催	2
4	共 催	2
5	後 援	2
6	期 日	2
7	会 場	2
8	大会日程	3
9	運営方針	3
10	大会主題及び分科会研究主題設定の視点	3
11	研究の方向性	3
12	日程詳細	4
13	分科会研究主題・協議題一覧	6
14	分科会研究分担	7
15	分科会研究分担・会場及び各地区参加者割り当て	8
16	分科会の研究主題・協議題	9
17	分科会研究分担、役員及び研究の進め方等について	17
18	校長会研究大会（全国・九州・沖縄）開催地・担当地区割当計画	19
19	業務分担一覧	20
	原稿執筆要領等、会場案内図・座席配置図	21
20	大会運営組織図	27
21	大会役員	28
22	分科会担当者一覧	30
23	各分科会グループ別名簿	34
24	「シンポジウム」「記念講演」テーマ一覧	42

分科会提案要項

小学校分科会

第1分科会	先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進	47
第2分科会	学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに人事評価を教職員の 資質・能力の向上と業務改善に生かす学校経営の推進	51
第3分科会	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント	55
第4分科会	豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント	59
第5分科会	学校の教育力を向上させる研究・研修の推進	63
第6分科会	これからの学校を担うリーダーの育成	67
第7分科会	命を守る安全・防災教育の推進並びに様々な危機への対応	71
第8分科会	社会形成能力を育む教育の推進	75
第9分科会	自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進並びに家庭・地域等との連携	79
第10分科会	新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、校長の理念と指導性	83

中学校分科会

第1分科会	カリキュラム・マネジメントの推進……………	87
第2分科会	主体的・対話的で深い学びの実現……………	91
第3分科会	よりよく生きようとする道徳教育と、健康で豊かな生活を実現するための教育の充実……………	95
第4分科会	一人一人のキャリア教育・進路指導と自己指導能力を育成する生徒指導の充実……………	99
第5分科会	「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成 ……	103
第6分科会	学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現……………	107

大会宣言

あとがき

振り返り

大会開催要項

第66回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会

1 目 的

校長の職務並びに教育活動について研究を深め、資質の向上を図るとともに、教育課程の取組を通して沖縄の現状を直視し、小・中学校教育の本質に立って、より充実した教育活動の展開を図る。

2 大会主題・趣旨

【小学校】

(1) 大会主題

「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」

～多様な価値をもつ他者と主体的・協働的に学び合い、豊かな未来社会を創造する子どもを育む学校経営～

(2) 趣 旨

沖縄県小学校長会は、全国連合小学校長会、九州地区小学校長協議会と歩調を合わせ、研究主題を設定し、実践的な研究を積み重ねてきた。

学習指導要領の前文では、これからの学校には、「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」とあり、そのためには、学校と社会が理念を共有し、連携・協働する「社会に開かれた教育課程」の実現が重要であることが示された。

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが成人して社会で活躍する頃には我が国は、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、絶え間ない技術革新等による社会構造等の環境が大きくまた急速に変化し、予測困難な時代となっている。

このような急激な社会の変化の中では、一人一人が自らの能力や可能性を信じ、学習したことを生活や社会の中で課題解決に生かすことのできる力が求められる。また、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越えていく生きる力の育成も課題である。

こうした状況を踏まえ、これからの教育は、学校と社会とが認識を共有化し、変化が激しく未来の予測が困難な時代に向かって、自らの力で未来を切り拓き、ともに生きる豊かな社会を創り出すことのできる人間を育成する教育を実現しなくてはならない。このような時代の要請や社会の変化に対応するため、価値観の違いや変化を前向きに受け止め、自らの力で未来を切り拓く日本人の育成を主意に設定された令和2年度からの全国連合小学校長会の研究主題のもと、本大会の副主題を「多様な価値をもつ他者と主体的・協働的に学び合い、豊かな社会を創造する子どもを育む学校経営」とし、新たな視点で研究を深めていくこととした。

「多様な価値をもつ他者と主体的・協働的に学ぶ」とは、自己肯定感を高め、未来に向かう自信と意欲に満ち、様々な価値を尊重する態度を表し、急速に変化する社会に対応し、予測困難な社会に粘り強く立ち向かおうとする姿と捉える。また、「豊かな未来社会」とは、「夢や希望が輝く社会」「自己肯定感が高まる社会」と捉える。

以上を踏まえ、学校教育の果たすべき役割・使命の大きさを真摯に受け止め、分科会での研究協議を深める中で、優れた実践を共有し、未来社会を創造する子どもを育成する経営者として、新たな時代に求められる理念と指導性を究明していきたい。

【中学校】

(1) 大会主題

「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」

(2) 趣 旨

現代は将来の予測が困難な時代であり、その特徴である「変動性 (Volatility) ・不確実性

（Uncertainty）複雑性（Complexity）・曖昧性（Ambiguity）」の頭文字をとって「VUCA」の時代とも言われている。

これまで少子化・人口減や高齢化、グローバル化の進展と国際的な地位の低下、地球規模の課題、子供の貧困、格差の固定化と再生産、地域間格差、社会のつながりの希薄化などは、社会の課題として継続的に掲げられてきた。こうした中、新たな感染症の感染拡大の影響及び国際情勢の不安定化は、正に予測困難な時代を象徴する事態であった。このような危機に対応する強靱さ（レジリエンス）を備えた社会をいかに構築していくかという観点は、これからの重要な課題である。

これからの社会を見据えたとき、現時点で予測される社会の課題や変化に対応して人財を育成する視点と、予測できない未来に向けて自らが社会を創り出していくという視点の双方が必要となる。

令和3年度から全面実施となった学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の理念の下、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指して、確かな学力の育成や道徳教育の重視、豊かな心や健やかな体の育成を改訂の基本的な考え方としている。また、中央教育審議会の『令和の日本型学校教育』の構築を目指して「～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」では、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきている中、子供たちの資質・能力を確実に育成するためには、学習指導要領を着実に実施していくことが重要であるとしている。

さらに、教師の勤務時間管理の徹底や学校及び教師が担う業務の明確化・適正化、教職員定数の改善充実、専門スタッフや外部人材の配置拡充などの学校における働き方改革を強力に推進することや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に資するよう、これまでの実践とICTとを最適に組み合わせることで、学校教育における様々な課題を解決し、教育の質の向上に繋げられるようにすることも期待されている。

沖縄県中学校長会は、全日本中学校長会の研究主題を踏まえ、学校における働き方改革を含めた新たな教育課題に対し果敢に挑戦し、校長相互の資質向上と目的を明確にした学校経営の更なる充実と学校からの教育改革を進めていく。そこで、令和7年度第76回全日本中学校長会研究協議会香川大会大会主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」大会主題の下、研究を深め、沖縄県中学校教育の一層の充実・発展に寄与するものとする。

3	主 催	沖縄県小・中学校長会
4	共 催	沖縄県教育委員会
5	後 援	那覇市教育委員会 沖縄県市町村教育委員会連合会 沖縄県PTA連合会 那覇地区PTA連合会
6	期 日	令和7年11月5日（水）・6日（木）・7日（金）
7	会 場	全体会：琉球新報社 ホール

■分科会会場

【小学校】小学校分科会会場

第1分科会：沖縄県立武道館1F 会議室	第2分科会：沖縄県立武道館2F 研修室
第3分科会：ほしぞら公民館3F ホール	第4分科会：八汐荘1F 屋良ホール②
第5分科会：八汐荘4F 会議室A	第6分科会：八汐荘4F 会議室B
第7分科会：給食会館2F 大会議室	第8分科会：沖縄タイムスビル5F 貸会議室大1・2
第9分科会：ほしぞら公民館3F 第1学習室	第10分科会：八汐荘1F 屋良ホール①

【中学校】中学校分科会会場

第1分科会：南部合同庁舎4F 第1会議室	第2分科会：南部合同庁舎4F 第2会議室
第3分科会：南部合同庁舎5F 第1会議室	第4分科会：南部合同庁舎5F 第2会議室
第5分科会：南部合同庁舎5F 第3会議室	第6分科会：南部合同庁舎5F 第4会議室

■教育懇談会会場

沖縄県教職員共済会館（八汐荘） 1F 屋良ホール

8 大会日程

時刻 期日	9		10		11		12		13		14		15		16		17		18		19					
	30		30		30		30		30		30		30		30		30		30		30					
11月5日(水)													役員・ 地区会長会													
11月6日(木)	9:20		9:50		10:15		10:25		11:15		13:20		13:40		16:45								17:30		19:00	
	諸 準備	受 付	開 会 式	準 備	講 話	教 育 長	準 居 移		備 食 動	打 分 合 科 会	分科会(185分)					移動			教育懇談会 90分							
11月7日(金)	9:00		9:20		9:50		11:20		11:50																	
	受 付	全 体 会	準 備	記念講演				準 備	開 会 式	事 務 連 絡																

9 運営方針

- (1) 研究の成果が本県教育の発展、学校運営上の課題解決の重要な手がかりとなるようにする。
- (2) 研究は地区会員全員の共同研究のもとに広がりや深まりのあるものとする。
- (3) 大会運営の効率化を図るため、各部が適切な分担をして推進する。
- (4) 前年度までの反省を生かし、新しい課題を追究する。
- (5) 県小・中学校長会の主体性を堅持しつつ、他機関との連携を密にする。
- (6) 記念講演会の企画・立案は担当地区が担い、実施に当たっては、県総務部との連携を密にする。
- (7) 各分科会の研究協議内容は、大会集録にまとめる。なお、大会集録は冊子にせず、電子媒体で校長会事務局で保管する。

10 大会主題及び分科会研究主題設定の視点

- (1) 沖縄県教育の現状と課題、県民の期待と要望を把握し、その解決を目指す。
- (2) 県小・中学校長会の運営方針に基づいて設定する。
- (3) 研究大会は、小学校の分科会は、全連小（13分科会）・九小協の分科会（9分科会）研究主題に関連させて設定する。なお、本県の喫緊の教育課題（学力問題）に対応するため、本県研究大会においては、第10分科会（学力向上推進）を設定する。
研究主題や協議題は、全連小研究大会や九小協研究大会に準ずる。
・中学校の分科会は、全日中（8分科会）・全九中（6分科会）の分科会研究主題に関連させて6分科会とする。研究主題や協議題は、全日中・全九中の研究主題・協議題に準じる。
- (4) 教育内容の質的転換が期待される教育課程について研究を深める。

11 研究の方向性

- (1) 主題に迫る上での学校経営上の課題は何かを明確に
 - 校長としての認識
 - 校長としての課題把握
- (2) 課題を解決するために
 - 校長としての視点（戦略的リーダーシップ）
 - ・ストラテジー（戦略。長期的な課題の解決、長期的な目標の達成）として、課題をどう捉え、どう考えたか。
 - ・同時にタクティクス（戦術。個々の実践での戦術。短期的な課題の解決、短期的目標の達成）の視点から、何をなすべきであると考えたのか。
 - 課題解決の過程での課題と対応
 - ・課題解決の過程で新たに発生した課題とその対応。ここでも、校長として、どう考え、何をなすべきかの視点から記述することが大切である。
- (3) これらの取組の結果・成果及び課題は何か
 - 児童・生徒の変容 ○教師の変容 ○保護者の変容 ○学校と地域との関係の変容
 - その他
 - ・主題を踏まえ、上記の視点等から事実を通して成果及び課題を述べる。
- (4) 研究協議のまとめ
 - 校長としての課題の捉え方、認識はどうであったか。
 - 校長としての「戦略と戦術」はどうであったか。
 - ・上記2点を客観的な視点から考察する。

12 日程詳細

11月5日（水）			11月6日（木）		
時間	行事	内 容	時間	行事	内 容
9:00		県役員・地区会長研（9:00～9:20） ・参加者 県役員・地区会長 開催地区役員（大会実行委員長、副実行委員長、総務・運営・研究部長、式典担当、総合司会者、来賓係等） ◇打合せ事項 司会：県総務部長 ①会長あいさつ ②地区会長あいさつ ③開催地区より説明（総務部長・運営部長・研究部長） ④確認事項等 ⑤おわりのことば（司会）	9:00	諸準備	各部。各係準備／県役員・地区会長研
9:30			9:20	受付	琉球新報社 ホール
10:00			9:50	開会式25分	1. 開式のことば 2. 国歌斉唱 3. あいさつ・大会長 4. 祝辞（沖縄県教育長 沖縄県教育委員会連合会） 5. 歓迎の挨拶 那覇市長 6. 来賓紹介・祝電披露 7. 閉式のことば
10:30			10:15		準 備（10分）
11:00			10:25	教育長講話（50分）	県教育長講話（50分） 「本県の教育課題と対策」（仮題）
11:30			11:15	移動・昼食等（125分）	移動・昼食（昼食は、各自で摂る） 所要時間 125分
12:00					
12:30					
13:00					
13:30			13:20	打合	分科会打合せ（20分）
14:00		参加者：県事務局 那覇地区実行委員会 1. 大会本部控室 2. 来賓控室 3. 会場設営 4. 分会場設営 5. 駐車場 6. 資料等の確認 7. その他	13:40	分科会（185分）	分科会（全国・九州共通課題） 【185分】 ◆各分科会場 【分科会の進行例】 ①開会通知・係紹介（3） ②司会者あいさつ（2） ③提案発表（30） ④質疑応答（20） ⑤各地区発表（5分×5地区）（15） ※地区別提案資料を基に各地区の取組を紹介のみとする。 ◇◇ 休憩（20） ◇◇ ⑥研究協議（80） ⑦指導助言（20） ⑧閉会通知・諸連絡（5）
14:30			16:00	移動	会場移動（45分）
15:00			16:45	教育懇談会	教育懇談会 会場：沖縄県教職員共済会館（八汐荘）1F 屋良ホール 1. 開会のことば 2. 会長あいさつ（那覇市教育長） 3. 歓迎のあいさつ（県教育長） 4. 祝辞（県教育長） 5. 来賓紹介 6. 乾杯（那覇教育事務所長） 7. 懇談 8. 閉会のことば
15:30	前日準備		17:00		
16:00			17:30		
16:30			18:00		
17:00			18:30		
17:30			19:00		
18:00					
18:30					
19:00					

11月7日（金）		
時間	行事	内 容
9:00	受付 全体会	琉球新報社
9:20		1 大会宣言文報告（5） 2 研究部長総括（15）
9:40		準 備（10）
9:50	記念講演 （90分）	■演題 「遺骨収集の現場から見える沖縄戦」
10:10		■講師 具志堅隆松 氏（ガマフヤー 代表）
10:30		
11:00		
11:20		準 備（10）
11:30	閉会式	1 開式のことば 2 次期開催代表挨拶 3 閉式のことば
11:40		
11:50		
12:00	<div>※事務連絡（5）</div> <div>実りある研究大会でした。那覇地区小・中学校長会の皆様ありがとうございました。</div> <div>【次期開催について通知】</div> <div>■第67回沖縄県小・中学校長研究大会 島尻大会</div> <div>令和8年11月12日（木） 13日（金）</div> <div>主会場：未定</div>	
12:10		
12:30		
13:00		
13:30		
14:00		
14:30		
15:00		
15:30		
16:00		
16:30		
17:00		
17:30		
18:00		
18:30		
19:00		

[illegible]

13 分科会研究主題・協議題一覧

(1) 小学校

分科会領域	研究主題	協議題
第1分科会 「経営ビジョン」	先見性のあるビジョンに基づく 創意ある学校経営の推進	①未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定 ②学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進
第2分科会 「組織・運営」 「評価・改善」	学校経営ビジョンの具現化を図る 組織づくりと運営並びに人事評価 を教職員の資質・能力の向上と業 務改善に生かす学校経営の推進	①学校経営ビジョンの具現化に向けた活力ある組織づくりと 学校運営の推進 ②教職員の資質・能力の向上に向けた人事評価の工夫
第3分科会 「知性・創造性」	知性・創造性を育むカリキュラ ム・マネジメント	①「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組 ②しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育活動を実現する カリキュラム・マネジメント
第4分科会 「豊かな人間性」 「健やかな体」	豊かな人間性と健やかな体を育 むカリキュラム・マネジメント	①新たな社会を見据えた人権教育と豊かな心を育てる道徳教 育の推進 ②心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現す るための資質・能力の育成を目指す教育活動の推進
第5分科会 「研究・研修」	学校の教育力を向上させる研 究・研修の推進	①教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実 ②キャリアステージに応じた資質・能力や学校経営への参画 意識の向上を図る研修の推進
第6分科会 「リーダー育成」	これからの学校を担うリーダー の育成	①学校教育への確かな展望をもち、行動できるミドルリー ダーの育成 ②時代の変化をとらえる能力と豊かな人間性を身に付けた管 理職人材の育成
第7分科会 「学校安全」 「危機対応」	命を守る安全・防災教育の推進 並びに様々な危機への対応	①危機回避能力を育む安全教育・防災教育の充実と地域や関 係機関との連携を図った安全教育・防災教育の推進 ②いじめや不登校等に適切に対応できる体制の整備と高い危 機管理能力をもつ組織・体制づくり
第8分科会 「社会形成能力」	社会形成能力を育む教育の推進	①社会の発展に貢献しようとする資質・能力・態度を育む教 育活動の推進 ②自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進
第9分科会 「自立と共生」 「連携・接続」	自立と共生を図り実践的な態度 を育む教育の推進並びに家庭・ 地域等との連携	①子どもの自立を図る特別支援教育の推進 ②家庭・地域と連携し充実した教育活動を展開できる学校づ くりの推進
第10分科会 「学力向上推進」	新しい時代をつくるために必要 とされる資質・能力を育む、校 長の理念と指導性	①「自立した学習者」育成プロジェクトを推進する具体的方 策の在り方 ②家庭・地域社会と連携した学力向上の在り方

(2) 中学校

分科会領域	研究主題	協議題
第1分科会 「教育課程」	カリキュラム・マネジメントの 推進	①学習指導要領に基づく教育課程の実施状況を把握し、学習 効果の最大化を図るための工夫 ②新しい時代に求められる資質・能力を育成していくための 教科等横断的な教育課程の編成・実施・評価・改善
第2分科会 「確かな学力」	主体的・対話的で深い学びの実現	①教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて「主体的・ 対話的で深い学び」を実現する授業改善の工夫 ②全ての学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題を 発見し解決する能力の向上
第3分科会 「豊かな心」 「健やかな身体」	よりよく生きようとする道徳教 育と、健康で豊かな生活を実現 するための教育の充実	①道徳的諸価値についての理解と、道徳的な判断力、問題を 発見し解決する能力の向上 ②生涯にわたる豊かな生活を実現していく資質・能力の育成 と体力の向上
第4分科会 「自らの生き方」	一人一人のキャリア教育・進路 指導と自己指導能力を育成する 生徒指導の充実	①社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力 を育成する系統的なキャリア教育の充実 ②好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を 図るための自己指導力を育成する学校教育の在り方
第5分科会 「人材育成」	「令和の日本型学校教育」を担 う教師の育成	①生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教師の育成と「新たな 教師の学びの姿」を実現する研修の在り方 ②教科等の専門性と指導力及びICT活動指導力を含めた新たな課 題に対応できる力量を高める人財育成と研修の在り方
第6分科会 「学校経営」	学校と地域の連携・協働による 「チーム学校」と「働き方改革」 の実現	①教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学 校経営の在り方 ②チーム学校としての学校と地域の連携・協働体制の在り方

14 分科会研究分担

(1) 小学校

分科会	領 域	令和6年度 (中 頭) ■九小協沖縄大会 ※中単独開催	令和7年度 (那 覇)	令和8年度 (島 尻)	令和9年度 (国 頭) ■全九中沖縄大会 ※小単独開催	令和10年度 (中 頭)	令和11年度 (那 覇)	令和12年度 (島 尻)	令和13年度 (国 頭)
	九小協開催県	沖 縄	福 岡 (全国大会)	熊 本	鹿児島	佐 賀	宮 崎	長 崎	沖 縄
第1分科会	「経営ビジョン」	九小協沖縄大会 ◆第3分科会 会場で中頭 地区提案 ※中学校単 独開催 (中頭大会)	中 頭	那 覇	那 覇	島 尻	<u>島 尻</u>	宮 古	宮 古
第2分科会	「組織・運営」 「評価・改善」		<u>八重山</u>	国 頭	国 頭	中 頭	中 頭	<u>那 覇</u>	那 覇
第3分科会	「知性・創造性」		那 覇	那 覇	島 尻	島 尻	宮 古	宮 古	八重山
第4分科会	「豊かな人間性」 「健やかな体」		国 頭	国 頭	中 頭	中 頭	那 覇	那 覇	島 尻
第5分科会	「研究・研修」		那 覇	島 尻	島 尻	宮 古	宮 古	八重山	<u>八重山</u>
第6分科会	「リーダー育成」		島 尻	宮 古	<u>宮 古</u>	八重山	八重山	国 頭	国 頭
第7分科会	「学 校 安 全」 「危 機 対 応」		島 尻	八重山	<u>八重山</u>	国 頭	国 頭	中 頭	中 頭
第8分科会	「社会形成能力」		国 頭	<u>中 頭</u>	中 頭	那 覇	那 覇	島 尻	島 尻
第9分科会	「自立と共生」 「連携・接続」		宮 古	中 頭	中 頭	<u>那 覇</u>	那 覇	島 尻	島 尻
第10分科会	「学力向上推進」		中 頭	那 覇	那 覇	島 尻	島 尻	宮 古	宮 古

① **特ゴシック体**は、九小協大会での提案地区。地区名は全連小大会における提案地区。

② 宮古・八重山地区は、一つの分科会を担当する。

③ 九小協での提案地区を優先する。研究の深化に鑑み、可能な範囲で2カ年間の継続研究とするが九小協との関連から変更も有り得る。

④ 令和8年度九小協熊本大会より、分科会協議題を一つに提案県の削減を図る。(基本各県1分科会)

(2) 中学校

分科会	領 域	令和6年度 (中 頭) ※中単独開催	令和7年度 (那 覇)	令和8年度 (島 尻)	令和9年度 (国 頭) ■全九中沖縄大会 (小単独開催)	令和10年度 (中 頭)	令和11年度 (那 覇)	令和12年度 (島 尻)	令和13年度 (国 頭)
	全九中開催県	宮 崎	熊 本	鹿児島	沖 縄	長 崎	大 分	福 岡	全日中 佐賀大会
第1分科会	「教 育 課 程」	那 覇	八重山	<u>宮 古</u>	全九中沖縄大会 ◆第1分科会 で <u>八重山</u> 地区提案	八重山	国 頭	国 頭	中 頭
第2分科会	「確 かな 学 力」	八重山	那 覇	国 頭		<u>国 頭</u>	中 頭	中 頭	那 覇
第3分科会	「豊 かな 心」 「健やかな身体」	<u>国 頭</u>	中 頭	八重山		島 尻	<u>宮 古</u>	宮 古	八重山
第4分科会	「自らの生き方」	宮 古	<u>島 尻</u>	島 尻		宮 古	<u>八重山</u>	八重山	国 頭
第5分科会	「人 材 育 成」	島 尻	国 頭	那 覇		那 覇	島 尻	<u>島 尻</u>	宮 古
第6分科会	「学 校 経 営」	<u>中 頭</u>	宮 古	中 頭		中 頭	那 覇	<u>那 覇</u>	島 尻

① **特ゴシック体**は、全九中大会における提案地区

② 令和4年度以降は、研究の深まりを考え2カ年間の継続研究とする。但し、令和4年度以降の割り振りは、全九中・全日中大会提案を優先し、前年度からその分科会を担当する。

③ 令和6年度は、九小協沖縄大会の為、中学校は単独開催となる。

15 分科会研究分担・会場及び各地区参加者割り当て（割当人数は目安。各地区の現状に応じ増減もある）

(1) 小学校

分科会場	領域 提案地区	国頭	中頭	那覇	島尻	宮古	八重山	合計
第1分科会 (沖縄県立武道館1F 会議室)	「経営ビジョン」 (中頭)	4	7	5	4	1	2	23
第2分科会 (沖縄県立武道館2F 研修室)	「組織・運営」「評価・改善」 (八重山)	3	7	6	5	1	3	25
第3分科会 (ほしぞら公民館3F ホール)	「知性・創造性」 (那覇)	4	6	4	3	1	2	20
第4分科会 (八汐荘1F 屋良ホール②)	「豊かな人間性」「健やかな体」 (国頭)	3	6	7	4	1	2	23
第5分科会 (八汐荘4F 会議室A)	「研究・研修」 (那覇)	3	6	6	3	1	2	21
第6分科会 (八汐荘4F 会議室B)	「リーダー育成」 (島尻)	3	7	6	3	2	2	23
第7分科会 (給食会館2F 大会議室)	「学校安全」「危機対応」 (島尻)	4	7	4	4	2	2	23
第8分科会 (沖縄タイムスビル5F 貸会議室)	「社会形成能力」 (国頭)	3	6	4	3	1	2	19
第9分科会 (ほしぞら公民館3F 第1学習室)	「自立と共生」「連携・接続」 (宮古)	3	6	8	3	3	2	25
第10分科会 (八汐荘1F 屋良ホール②)	「学力向上推進」 (中頭)	4	7	3	5	2	2	23
合 計		34	65	53	37	15	21	225

(2) 中学校

分科会場	領域 提案地区	国頭	中頭	那覇	島尻	宮古	八重山	合計
第1分科会 (南部合同庁舎4F 第1会議室)	「教育課程」 (八重山)	3	6	4	4	2	3	22
第2分科会 (南部合同庁舎4F 第2会議室)	「確かな学力」 (那覇)	4	5	4	4	2	4	23
第3分科会 (南部合同庁舎5F 第1会議室)	「豊かな心」「健やかな身体」 (中頭)	3	5	4	5	2	4	23
第4分科会 (南部合同庁舎5F 第2会議室)	「自らの生き方」 (島尻)	4	5	4	5	2	3	23
第5分科会 (南部合同庁舎5F 第3会議室)	「人材育成」 (国頭)	3	5	5	4	2	3	22
第6分科会 (南部合同庁舎5F 第4会議室)	「学校経営」 (宮古)	4	6	5	4	2	3	24
合 計		21	32	26	26	12	20	137

16 分科会の研究主題・協議題

(1) 小学校分科会

第1分科会 「経営ビジョン」(中 頭)

先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

〔趣旨〕

今日、知識基盤社会やグローバル化の進展は、政治や経済、文化などのあらゆる領域に影響を及ぼしており、社会構造そのものが大きく変化し、学校教育に寄せる期待も多様化している。このような中、新学習指導要領が改訂され、これからの時代に求められる教育を実現するためには、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という理念を学校と社会が共有し、学校と社会との連携及び協働のもと、教育活動が展開されていくことがより一層求められている。そのためには、「社会に開かれた教育課程の編成」が重要となり、学校経営においては、社会の変化を見極めて、「新たな知を拓く」教育を着実に推し進めていく必要がある。

また、校長は、保護者や地域住民の声を確実に捉えながら、これからの社会を生き抜く子どもの望ましい姿を思い描き、その育成に向け、先見性のある経営ビジョンを策定することが重要となる。さらに、校長の強いリーダーシップの下、教員の職務に対する誇りと使命感を大切にしながら、未来へ向かって夢と希望をもち、たくましく生きる力をもった子どもを育てる教育活動を組織的・計画的に進めていかなければならない。

本分科会では、これからの未来をたくましく生きる力をもった子どもを育てるための明確な経営ビジョンを掲げ、マネジメント能力を発揮し、学校や地域の特色を生かして、子ども一人一人の夢と希望の実現に向けた創意ある学校経営を推進するため、その具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定
② 学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

第2分科会 「組織・運営」「評価・改善」(八重山)

学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに人事評価を 教職員の資質・能力の向上と業務改善に生かす学校経営の推進

〔趣旨〕

今日、知識基盤社会の進展やグローバル化の進行等により、社会状況は急激に変化している。このような中、校長は、「新たな知を拓く」教育を実現するために掲げた学校経営ビジョンの実現に向け、活力ある組織・運営体制を築いていく必要がある。そのためには、学校組織を刷新し活気ある組織づくりを行うとともに、教職員一人一人が協働意識と参画意識をもって組織を機能させるようにしていかなければならない。

また、校長は、学校経営ビジョンに基づく確かな学校経営と教育実践を進めるとともに、絶えずその評価・改善に取り組み、学校教育の更なる充実に努めていく必要がある。そのためには、評価をマネジメント・サイクルの重要な観点として位置付け、改善に向けたより実効性のあるものとしていかなければならない。さらには、教職員評価システムも踏まえつつ、自校の教職員に対する適切な指導や助言が、個々の意識改革や資質・能力の向上、学校組織全体の成長・発展につながるようにしていかなければならない。

本分科会では、校長の示す学校経営ビジョンの具現化を図るための組織づくりと運営並びに人事評価を教職員の資質・能力の向上と業務改善に生かす学校経営の推進の具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 学校経営ビジョンの具現化に向けた活力ある組織づくりと学校運営の推進
② 教職員の資質・向上に向けた人事評価の工夫

第3分科会 「知性・創造性」(那 覇)

知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント

〔趣旨〕

今日、インターネットで情報を容易に得ることができたり、AI（人工知能）の実用化が進んだりしており、暮らしはもとより産業や経済などあらゆる分野の変革の動きが加速し、知識基盤社会やグローバル化も確実に進展している。このような中、子どもには、自他としっかり向き合いながら自分を見失うことなく、社会の変化に柔軟に対応し、自信をもって自らの夢と希望の実現に向け、たくましく生き抜く力を身に付けていくことが求められている。

また、このような中、新学習指導要領も単なる知識や技能の獲得に留まらず、時代を先取りし新たな課題に果敢に挑戦しながら、主体的に解決することを求めている。そのため、学校教育では、子どもに多様な人々と協働しながら、様々な社会的変化に対応し乗り越えることができる柔軟な思考力や判断力、表現力を身に付けさせることが必要になる。さらには新しい見方や考え方で新たな価値を創造できる資質・能力を獲得させていくことが不可欠であり、そのためのカリキュラム・マネジメントの確立が強く求められている。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、子どもが豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるように、しなやかな知性と豊かな創造性の育成を目指す「社会に開かれた教育課程」の実現とカリキュラム・マネジメントについての具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組
② しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育活動を実現するカリキュラム・マネジメント

第4分科会 「豊かな人間性」「健やかな体」(国 頭)

豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント

〔趣旨〕

今日、グローバル化の進展に伴い、文化や習慣、価値観の多様化が進む中、未来を担う子どもが自らの夢や目標の実現を図るために、学力や体力の向上はもちろん、自律的態度の確立を促すこと、互いを思いやり尊重する態度や感動する心など豊かな人間性を育むことが大切である。そのため、学校においては、全教育活動を通して体験活動を推進することや、人権教育や道徳教育を基盤とした心の教育の充実を図ることが強く求められている。

また、近年の急速な社会環境や生活環境の変化は、物質的な豊かさをもたらしている反面、精神的なストレスの増大や生活習慣病の増加など、心身両面で問題を生み出している。学校においても、体力・運動能力の低下やアレルギー性疾患、いじめや不登校等、子どもの心と体の健康に関わる様々な課題が生じている。校長としては、このようなことを踏まえ、課題解決を進める指導態勢の構築と社会の変化に対応した取組の充実を図る必要がある。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、豊かな人間性を育むための心の教育の実践、並びに未来をたくましく生き抜くための体づくりと健康づくりを推進するためのカリキュラム・マネジメントについて、具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 新たな社会を見据えた人権教育と豊かな心を育てる道徳教育の推進
② 心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指す教育活動の推進

第5分科会 「研究・研修」(那 覇)

学校の教育力を向上させる研究・研修の推進

〔趣旨〕

知識基盤社会やグローバル化が進展し、社会構造に大きな変化が見られる中、「持続可能な社会」を実現させるために必要な資質・能力の育成や、多様な人間関係を構築していく力や習慣の育成等が重要となっている。このような社会の急激な変化や時代のニーズに応え、学校教育の使命・責務を果たすためには、学校の教育力の向上・充実が急務である。

これらのことを踏まえ、校長は、確かな先見性と洞察力を身に付け、自校の課題を明らかにしながら、教職員が教職に対する使命感や責任感、探究心をもち、職務やキャリアステージに応じて求められる資質・能力を生涯にわたって高めていけるよう展望をもたせるとともに、学校経営への参画意識が高まるように研究・研修体制を充実することが重要である。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、教職員の資質・能力の向上を図るとともに、教職員にキャリアステージを意識した展望や学校経営への参画意識をもたせ、学校の教育力を向上させる研究・研修体制の確立とその推進について、その具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 教職員の資質・能力の向上を目指しての研究・研修体制の充実
② キャリアステージに応じた資質・能力や学校経営への参画意識の向上を図る研修の推進

第6分科会 「リーダー育成」(島 尻)

これからの学校を担うリーダーの育成

〔趣旨〕

今日、学校には、「新たな知を拓く」教育の実践や様々な教育課題への対応が求められ、その解決に向け、学校の教育力を高めていくことが重要になっている。学校教育目標等の具現化に向けて、教職員一人一人の力量を高め、学校組織としての教育力を向上させていくことが学校経営の重要課題である。そのため、学校を組織的に運営していくための大きな役割を果たすミドルリーダーの存在がますます重要になっており、その育成が急務である。

また、校長は、教職員一人一人の特性を把握し、必要とされる資質・能力を具備した人材を発掘して、意図的・計画的に育成していくことが重要である。特に、組織的な学校運営を推進していくためには、学校全体を統括・指導する有能な管理職人材の存在が不可欠となり、このような人材を計画的に育成していく必要がある。その際、校務分掌を通して幅広い経験をさせるとともに、経営感覚を育むことなどが重要である。

本分科会では、学校教育への確かな展望と実践力を身に付けたミドルリーダーや時代の変化をとらえる能力と豊かな人間性を身に付けた管理職人材を育成するため、その具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 学校教育への確かな展望をもち、行動できるミドルリーダーの育成
② 時代の変化をとらえる能力と豊かな人間性を身に付けた管理職人材の育成

第7分科会「学校安全」「危機対応」（島 尻）

命を守る安全・防災教育の推進並びに様々な危機への対応

〔趣旨〕

未曾有の大被害をもたらした東日本大震災以降、国民の防災意識は確実に高まってきている。近年は、台風や局地的豪雨による土砂崩れや洪水、火山噴火等の自然災害が毎年各地で起きるとともに、猛暑による熱中症も頻発し、その対策も喫緊の課題となっている。また、通学路等における不審者の声かけ事案やわいせつ事案、交通事故など、子どもが被害者となる事案や事故の発生も後を絶たない。さらに、人間関係の希薄化、家庭の教育力の低下等、子どもを取り巻く環境は、子どもの意識に変化をもたらし、暴力行為やいじめ、不登校等といった問題行動の一因となっていると考えられる。

そのため、学校では、組織的・計画的な安全教育・防災教育を推進するとともに、多様化・深刻化する危機に備え、日頃から危機管理体制の整備、危機発生時の未然防止、危機発生時の対応、並びに再発防止等の適切な対応を行っていくことが重要である。

校長は、教職員の危機管理意識をより一層高めるとともに、自然や社会の変化を踏まえた危機管理体制の確立を図ることが求められている。そのためには、家庭・地域・関係機関との連携をより一層強化し、組織的に迅速かつ的確に対応できるようにしていかなければならない。

本分科会では、子どもの安全安心を確保し、危機を回避する能力を育む教育の充実と、学校危機への計画的・組織的な対応を進め、危機に強い学校づくりの具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 危機回避能力を育む安全教育・防災教育の充実と地域や関係機関との連携を図った安全教育・防災教育の推進
② いじめや不登校等に適切に対応できる体制の整備と高い危機管理能力をもつ組織・体制づくり

第8分科会「社会形成能力」（国 頭）

社会形成能力を育む教育の推進

〔趣旨〕

これからの社会は、「将来の予測が困難な複雑で変化の激しい社会」「AI（人工知能）等の導入により、子どもが今なりたい職業は将来存在しないかもしれない社会」など、産業・経済の構造的変化、雇用体制の多様化・流動化による社会環境の大きな変化が予測される。このような社会の到来は、子ども自らの将来のとりえ方にも大きな変化をもたらしている。とどまることなく変化する社会の中で、子どもが夢や目標をもって積極的に自分の将来を切り拓いて生きていくためには、社会の変化を恐れず粘り強く前進し、失敗しても諦めず変化に対応していく力と態度を育てることが不可欠である。

そこで、学校においては、これからの社会を創りあげていくために必要な知性と創造性とともに、豊かな人間性を身に付けさせるために、他者を認めつつ、他者と協力することの大切さを教え、よりよい社会を協働して形成しようとする態度や能力を育む必要がある。

校長は、キャリア教育等の視点を取り入れた教育活動により、社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力等、子どもに生きる力の基礎を積極的に身に付けさせなければならない。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、特別活動を要としつつ教科等で身に付けた知識・技能等を基に、よりよい社会の形成に向け、主体性をもって社会に参画し、課題解決を図る能力や態度などを育むための具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 社会の発展に貢献しようとする資質・能力・態度を育む教育活動の推進
② 自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進

第9分科会 「自立と共生」「連携・接続」(宮 古)

自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進 並びに家庭・地域等との連携

〔趣旨〕

今日、学校においては、子どもが障がいの有無にかかわらず共に生活する中で、分け隔て無く相互に人格や個性を尊重し合う教育が求められている。とりわけ、特別な支援を要する子どもに、その教育的ニーズに応え、将来の自立に向けての基礎を培っていかねばならない。そのためには、校長が特別支援教育に対する理解を深め、関係機関との連携に基づく支援体制の充実を図っていくことが大切である。

また、規範意識や他者とのコミュニケーション力が十分身に付いていないことが、いじめ等の問題行動の要因の一つになっており、主体的に地域に関わろうとする子どもの育成並びに生徒指導上の課題へ対応するためには、学校・家庭・地域等が一体となった地域基盤を再構築することが求められている。

本分科会では、子どもの自立を図るための特別支援教育並びに子ども一人一人の将来を見据え、家庭・地域等との連携を推進するための具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 子どもの自立を図る特別支援教育の推進
② 家庭・地域等と連携し充実した教育活動を展開できる学校づくりの推進

第10分科会 「学力向上推進」(中 頭)

新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、 校長の理念と指導性

〔趣旨〕

今日、国際化・情報化など社会の変化と科学技術の進展には目覚ましいものがあり、今後一層、その変化や進展が加速されるものと予測される。このような急激な社会の変化の中で、学力向上においては、これから求められる資質・能力を明確にし、それらを育成するための授業の在り方等を構築していく必要がある。児童が学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、主体的に学び続けることができるようにするためには、学びの質を高める授業改善を推進することが重要である。

そこで、沖縄県では「授業改善」と「自立した学習者」の育成を核とした学力向上推進施策「「自立した学習者」育成プロジェクト」を策定した。本施策では、授業改善の取組として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実、「学習基盤としてのICT」の活用、「指導と評価の一体化」の実現、「自学自習力」を育む取組の充実をあげ、さらに「自立した学習者」育成を支える4つのポイントとして、「自己存在感の感受」、「共感的な人間関係の育成」、「自己決定の場の提供」、「安全・安心な風土の醸成」に焦点化して、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を行い、児童の学びに対する主体性を高め、「自立した学習者」の育成を図ることとした。

本分科会では、それらを基に校長のリーダーシップの下、国や県及び各学校のこれまでの取組の成果や課題を踏まえ、新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力の育成を目指し、より具体的に実効性のある教育活動の在り方に関する校長の理念と指導性についての具体的方策を明らかにする。

- 《協議題》 ① 「自立した学習者」育成プロジェクトを推進する具体的方策の在り方
② 家庭・地域社会と連携した学力向上推進の在り方

(2) 中学校分科会

第1分科会 「教育課程」(八重山)

カリキュラム・マネジメントの推進

〔趣旨〕

予測困難で急激に変化する社会に生きる生徒は、未知の状況に対応し、新しい時代を切り拓いていく力を身に付けなければならない。そのため学校は、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を形成するという目標を社会と共有しながら、生徒に育成すべき資質・能力を具体的かつ明確に示し、社会と連携・協働して教育課程を編成・実施する「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められる。

また、生徒が豊かな創造性を備え持続可能な社会の形成者となるためには「生きる力」が必要であり、育成を目指す資質・能力は、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱からなっている。そこで各学校においては、教科等の目標や内容を見通し、特に学習の基盤となる言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等をはじめとする現代的な諸課題に対応して求められる力の育成のために、教科等横断的な学習の充実や主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図るとともに教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上に努めることが必要である。

さらに、学習指導要領に基づいて、教育課程の実施状況を確実に把握しながら、学習効果の最大化を図る工夫が求められる。

このような視点から校長としての具体的な教育課程の編成の在り方や実践方法を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し共有する。

- 《協議題》 ① 学習指導要領に基づく教育課程の実施状況を把握し、学習効果の最大化を図るための工夫
② 新しい時代に求められる資質・能力を育成していくための教科等横断的な教育課程の編成・実施・評価・改善

第2分科会 「確かな学力」(那 覇)

主体的・対話的で深い学びの実現

〔趣旨〕

これからの予測困難で急激に変化していく社会を切り拓くには、身に付けた知識・技能を活用したり必要な情報を取り出したりして、自分の考えを構成し発信することが大切である。また、多様な価値観をもつ人々と協働し、新たな価値を創造していくことも必要であり、それらの資質・能力の育成は急務であるといえる。さらに、生徒が「確かな学力」を能動的に身に付けるためにも、「主体的・対話的で深い学び」による授業改善が求められている。「主体的・対話的で深い学び」を実現していくための授業改善の一つとして、一人1台端末の実現による、ICTを活用した個別学習や協働学習などがあり、多くの学校で新たな学びについて研究が進められている。また、それを支えるものとして、教職員が教科の壁を乗り越え相互に高め合う研修や、学校の教育目標を踏まえた教科等横断的な視点での目標達成に必要な教育内容の系統的な配列等が必要となる。さらには、生徒の姿、地域の現状等に基づいた教育課程の編成・実施・評価・改善を図るカリキュラム・マネジメントの実現も不可欠である。

このような視点から校長としての具体的な教育課程の編成の在り方や実践方法を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し共有する。

- 《協議題》 ① 教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の工夫
② 全ての学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題を発見し解決する能力の向上

第3分科会 「豊かな心」「健やかな身体」(中 頭)

よりよく生きようとする道德教育と、 健康で豊かな生活を実現するための教育の充実

〔趣旨〕

全ての人が自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として互いを尊重するとともにウェルビーイングな社会を目指し、その実現に向けた社会的包摂を推進する必要がある。学校や地域社会の一員として参画し、自らの個性を生かして幸せに生活でき、誰一人取り残さず一人一人の可能性が最大限に引き出されることができるようにする上で、他者への共感や寛容性、さらには多様性を尊重する態度、人間関係を築く力、異なる考えの人々と議論を重ねながら問題を解決していく力などを育成する機会を計画することが重要である。そのためには、各教科等における道德教育との関連を図りながら、「特別の教科 道德」において、発達の段階に即した計画的、発展的な指導や様々な体験活動等を生かす指導など、道德的諸価値についての理解を基に、人間としての生き方についての考えを深める授業の充実を図り、生徒の道德性を養うことが必要である。

体力は人間の活動の源であり、健康維持や精神面の充実に大きく関わっている。生徒がこれからの社会を生きていくためには、健やかな身体の育成と体力の向上、生涯にわたってスポーツに親しむ資質・能力を育てることは極めて重要である。食育やアレルギー対応、心身の健康の保持増進に関する健康教育の一層の推進を図るとともに、安全教育や防災教育及び現代的健康課題に取り組むことも必要である。

このような視点から、校長としての具体的な関わり方を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し共有する。

- ＜協議題＞ ① 道德的諸価値についての理解と、道德的な判断力、問題を発見し解決する能力の向上
② 生涯にわたる豊かな生活を実現していく資質・能力の育成と体力の向上

第4分科会 「自らの生き方」(島 尻)

一人一人のキャリア教育・進路指導と 自己指導能力を育成する生徒指導の充実

〔趣旨〕

産業構造や就業構造の変化に加え、労働市場の在り方や働く人に必要とされるスキルが今後変容して行く中で、義務教育修了段階にある生徒に対し、社会的・職業的自立に向けて必要な資質・能力を身に付けることができるよう、「基礎的・汎用的能力」を育成するキャリア教育が求められる。また、一人一人が、多様な個性・能力を伸ばし、充実した人生を主体的に切り拓いていくことのできる生涯学習社会の中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、特別活動を要としつつ学校の教育活動全体を組織的かつ全体を通じて組織的かつ計画的な進路指導を行うことが重要である。また、学校教育は、集団での生活や活動を基本としており、生徒相互の人間関係の在り方は、生徒の健全な成長と深く関わっている。好ましい人間関係を基礎に、自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成することは、人格のよりよい形成と学校生活の充実の基礎となる。様々な課題を抱える児童生徒が増える中、学校教育には、子どもの発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限に伸ばしていく教育が求められている。

こうした中で、生徒指導は、一人一人が抱える個別の困難や課題等に向き合い、「個性の発見とよさや可能性の伸長、社会的資質・能力の発達」に資する重要な役割を有している。各学校とも、いじめ防止対策推進法に基づき、組織的な対応と関係機関との連携の強化等が図られているにもかかわらず、いじめの重大事態の発生件数は増加傾向にある。また、児童生徒の自殺者数や不登校児童生徒数も増加の一途をたどっている。そのことを踏まえ、各学校では、組織的、継続的な支援・取組を更に充実させるとともに、家庭や地域及び関係機関、専門スタッフ等との連携を一層充実させる必要がある。

このような視点から、校長としての具体的な関わり方を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し共有する。

- 《協議題》 ① 社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育の充実
- ② 好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導力を育成する学校教育の在り方

第5分科会 「人材育成」(国 頭)

「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成

〔趣旨〕

「令和の日本型学校教育」を実現し、それを担う質の高い教師となるためには、教師自身が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心をもちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技術を学び続ける主体的な姿勢が必要である。また、全ての子供たちの可能性を引き出す、「個別最適な学び」と、「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた取組を更に進化させ、教育の質を向上させる能力も備えていることが求められる。今後、あらためて教師が高度専門職業人として認識されるためには、地域や学校現場の課題の解決を通じた学びを含め、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」を重視したスタイルの学びが求められている。これが「新たな教師の学びの姿」を構想する上での鍵となる。そのような学びを通じて、教師一人一人が専門職としての高度な知識・技能と、個々の生徒の多様な実態を踏まえた一人一人が抱える課題に個別に対応できる指導力を身に付けるとともに、高い倫理観に立ち、使命感溢れる指導を行って、生徒や保護者、地域の信頼を獲得することが不可欠である。また、教員養成段階から、生徒にプログラミング的思考、情報モラル等に関する資質・能力も含む情報活用能力を身に付けさせるためのICT活用指導力を養成することや、学習履歴（スタディ・ログ）の利活用などの、教師のデータリテラシーの向上に向けた教育などの充実を図っていくことが求められており、現職の教師に対してはICT活用指導力の一層の向上を図ることが急務である。さらに、心理や福祉等の専門スタッフなど多様な人材と協力したり、地域と連携・協働を円滑に行ったりする資質・能力をもち、新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばして諸課題の解決に取り組むことができる人材の育成が求められる。

このような視点から、校長としての具体的な関わり方を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し共有する。

- 《協議題》 ① 生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教師の育成と「新たな教師の学びの姿」を実現する研修の在り方
- ② 教科等の専門性と指導力及びICT活動指導力を含めた新たな課題に対応できる力量を高める人材育成と研修の在り方

第6分科会 「学校経営」(宮 古)
**学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と
「働き方改革」の実現**

〔趣旨〕

学校には、これまでも新たな課題に応じて、司書教諭、栄養教諭等の新しい職が導入されてきた。近年は、ますます複雑化・多様化する教育課題に対応するため、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、部活動指導員等の教員以外の専門スタッフが導入されている。そのため、これからは教職員間のより一層の組織的対応を強化することはもちろん、全てを教職員が担う自己完結型の運営を廃し、これら専門スタッフとの協働を推し進め、学校内の多様な人材がそれぞれの専門性を生かして能力を発揮するチームとしての学校を実現していくことが求められている。また、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）等を活用するなど、チームとしての学校と地域の連携体制を整備していくことで、地域とともにある学校づくりを推進し、社会総がかりで教育を進めていくことも求められる。

また、その結果として、教師が担うべき業務の精選・明確化などを図り、新たに導入された教員業務支援員、情報通信技術支援員等を活用し、教員の働き方改革に繋げていくことや教育委員会等に配置されているスクールロイヤー等を活用しての法的整理を踏まえた役割分担・連携が必要である。さらに、子供たちがスポーツ・文化芸術に継続して親しむことができる機会を確保するため、地域の実情に応じながら、部活動の地域連携や地域スポーツ・文化クラブ活動移行に向けた環境の一体的な整備を着実に進めることも求められる。

こうした「チーム学校」と「働き方改革」の実現のため、校長は、これまでの教職員の管理を主とするマネジメントから脱却し、多様な知識・経験をもつ人材との連携を強化し、そうした人材を取り込むことで、社会のニーズに対応しつつ、高い教育力をもつ組織となるためのマネジメントを進めていく必要がある。

このような視点から、校長としての具体的な関わり方を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し共有する。

- ＜協議題＞ ① 教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方
② チーム学校としての学校と地域の連携・協働体制の在り方

17 分科会研究分担、役員及び研究の進め方等について

- (1) 司会者、提案者、記録係は各分科領域担当地区が担当する。（提案者1名、司会者2名、記録者2）
- (2) 各分科会の運営委員は会場地区（那覇）が担当する。
- (3) 分科会への地区会員の参加は、提案する分科を主とし、各分科に参加する。
- (4) 分科会提案地区の研究部長は、提案分科会が二つの協議題のうちどちらについて研究を進めるか決定し、5月中に県研究部長（小：美差淳司「小禄小」 中：濱川 太「寄宮中」）まで報告する。
報告がまとまり次第、県研究部長は各地区研究部長に周知する。
- (5) 各地区の研究報告書のまとめ方
 - ①分科会提案地区：校長会指定の原稿4ページにまとめる。
※原稿執筆要領、留意事項様式は別紙を参照のこと。
※分科会提案資料（原稿）提出日9月5日（金）までに完了する。
 - ②分科会提案地区以外：校長会指定の原稿A4版2ページ（両面刷1枚）にまとめる。（遵守願います）
※分科会提案地区以外は、【地区別提案資料】として冊子にするので原稿をPDFにして9月5日（金）までに提出する。（厳守願います）
- (6) 各分科会の司会者、提案者、記録係、（学校名、氏名）、各分科会への参加者名簿（学校名、氏名）の県事務局への各地区からの報告は、6月4日（水）までに完了する
※全ての提出物は期限を厳守

分科会Ⅰの進行（案） ※ 13：20～13：40までは分科会打ち合わせ（於；各分科会場）

時 刻	進行内容	時 間	内 容
13：40	1. 開会のことば 2. 係りの紹介 3. 司会者のあいさつ	運営委員 3分 司会者 2分	<ul style="list-style-type: none"> ・定刻になりましたので、第〇分科会を開催いたします。 ・携帯電話等お持ちの方は、マナーモードに設定して下さい。 ・始めに、係の紹介を致します。司会者、提案者、記録者、共同研究者、運営委員 ・では、司会者のごあいさつをお願いします。（協議の進め方の指示） <p>（司会者あいさつ）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これから提案発表に移ります。本分科会の主題は〇〇です。提案発表を〇〇地区〇〇校長をお願いします。
13：45	4. 提案発表 5. 質疑応答 6. 各地区の発表	30分 20分 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・「提案発表」 ・「質疑応答」 ・これより、提案地区外の5地区の発表をしていただきます。発表時間は、地区で3分程度をお願いします。 ・3分×5地区 ※地区別提案資料を基に各地区の取組を紹介する。 ・ここで15分間休憩いたします。
14：50	休 憩 8. 再開予告	15分	<ul style="list-style-type: none"> ・研究協議1分前になりましたので、ご着席下さい。
15：05	9. 研究協議 （各グループ毎）	70分	<ul style="list-style-type: none"> ・これより、研究協議に入ります。事前に確認してあります協議題を基に、各グループで協議をお願いします。特に、「協議題に迫る具体的な方策と校長の指導性」について意見交換をお願いいたします。なお、後ほど代表して2グループ程度に発表をして頂きますので、代表者をお決め頂きたいと存じます。宜しくをお願いいたします。資料等をご準備された校長においては情報提供をお願い致します。これよりグループ協議を始めて下さい。
	10. グループ発表	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・2グループ程度に協議内容について報告を求める。（※自主的な発表又は司会者が選定）
16：20	11. 指導助言	20分	<ul style="list-style-type: none"> ・「指導助言」
16：40	12. 閉会のことば	2分	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇指導主事「指導助言ありがとうございました。」会員の先生方、ご熱心に協議を重ね、ご協力いただき有り難うございました。これをもちまして、第〇分科会を終了いたします。ご協力ありがとうございました。
	13. 諸連絡	運営委員 3分	<ul style="list-style-type: none"> ・会員の皆様、大変お疲れ様でした。 ・この後、5時30分より八汐荘1階屋良ホールにて教育懇談会を開催します。是非ご参加をお願いいたします。

18 校長会研究大会（全国・九州・沖縄） 開催地・担当地区割当計画

(1) 沖縄県小・中学校長研究大会

年度	R 4 年	R 5 年	R 6 年	R 7 年	R 8 年	R 9 年	R 10 年	R 11 年	R 12 年	R 13 年
担当地区	島 尻 ※誌上 発表	国 頭	九小協沖縄大会 (中単独開催： 中頭大会)	那 覇	島 尻	小：国頭 ※全九中沖縄 大会の為 小学校単独開催	中 頭	那 覇	島 尻	中：国頭 ※九小協沖縄 大会の為 中学校単独開催

※令和 6・9・13 年度は、全九中、九小協沖縄大会に包含するため、単独大会とする。

(2) 九州地区小学校長協議会研究大会・全国連合小学校長会研究協議会研究大会

年 度		R 5 年	R 6 年	R 7 年	R 8 年	R 9 年	R 10年	R 11年	R 12年	R 13年
九小協大会	開催県	佐 賀	沖 縄 8/5. 6. 7	福 岡 (全連小)	熊 本	鹿 児 島	佐 賀	宮 崎	長 崎	沖 縄
	・担当地区 ・分科領域	国 頭 第 1 - 1	中 頭 第 3 - 2		中 頭 第 8 - ①	宮 古 第 6 - ① 八 重 山 第 7 - ①	那 覇 第 9 - ②	島 尻 第 1 - ①	那 覇 第 2 - ②	八重山 第 5 - ①
	議 長									
全連小大会	開催県	東 京	徳 島	福 岡	北 海 道	東 北	近 畿	東海北陸	中 国	未 定
	担当県	大 分 福 岡	長 崎 熊 本	九州各県 (八重山)	鹿 児 島 佐 賀	沖 縄 宮 崎	大 分 福 岡	長 崎 熊 本	鹿 児 島 佐 賀	沖 縄 宮 崎
	分科 領域			I - 3 評価・改善						

※担当地区順 国頭 → 中頭 → 那覇 → 島尻 → 宮古 → 八重山

※九小協と全連小の発表のある年度は九小協→全連小と地区順を決定する

■令和 8 年度「熊本大会」より各分科会協議題を一つにする。（各県の提案分科会を削減する）

(3) 全九州地区中学校長会研究大会・全日本中学校長研究大会

年 度		R 5 年	R 6 年	R 7 年	R 8 年	R 9 年	R 10年	R11年	R12年	R13年
全九中	開催県	大 分 (全国大会)	宮 崎	熊 本	鹿 児 島	沖 縄	長 崎	大 分	福 岡	佐 賀
	・担当地区 ・分科領域	全 日 中 大分大会 八 重 山 第 1 ②	国 頭 第 3 - ② 中 頭 第 6 - ①	島 尻 第 4	宮 古 第 1 - ②	八 重 山 第 1 - ①	国 頭 第 2 - ①	宮 古 第 3 - ② 八 重 山 第 4 - ①	島 尻 第 5 - ① 那 覇 第 6 - ①	全 日 中 佐賀大会
全日中	担当県		岩 手	香 川	長 野	東 京	京 都	富 山	北 海 道	佐 賀
	分科領域									

※担当地区順 国頭 → 中頭 → 那覇 → 島尻 → 宮古 → 八重山

※全九中と全日中の発表のある年度は全九中→全日中と地区順を決定する

※令和 7 年度全日中香川大会より

大会主題「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」

19 業務分担一覧

	大会事前準備	大会当日の業務	事後の業務
開催地区	1 会場借用・申請（全体会場・分科会会場、他） 2 会場設営・席づくり（式典会場、分科会会場、他） 3 表示 ①式典・全体会の表示（来賓、大会役員、講師、提言者、発表者、司会等） ②会場案内（各事務所長、共同研究者、会員席） ③来賓控室 ④分科会場（分科会担当者、参加地区会員） ⑤受付関係表示（QRコードで受付） ⑥会場案内関係 4 湯茶配布計画等 5 放送施設の準備 6 盆栽（盛り花）、水差し・おしぼり等 7 消耗品（表示用等）準備 8 接遇関係 9 教育懇談会の計画・運営（持ち方、表示関係）等 10 会場表示の作成（全体会横断幕、分科会テーマ） 11 全体会懸垂幕（大会主題、教育長講話、記念講演）	1 受付（要録配布、出席簿）の確認各地区事務担当者を行う 2 湯茶・弁当配布計画 3 式典関係 放送機器、照明等、ステージの準備、国歌斉唱関係、挨拶文の受理 4 接遇関係（来賓） 5 水差し・おしぼり ・教育長講話・記念講演 6 講師対応 ・お礼（記念品等準備）	1 関係者へのお礼 2 実行委員会総括 3 来賓・大会長等の挨拶文は県事務局へ 4 アンケート実施とまとめ
県総務部	1 大会組織 2 大会役員構成と委嘱 3 大会宣言文作成 4 広報関係等への連絡 5 全体協議会の運営及び部・委員会発表者との打合せ	1 大会全体会の運営 2 宣言文朗読 3 記録関係（開催地区と連携） ①開会式・閉会式・教育長講話 ②記念講演	1 大会の総括 2 次期開催地区への引継の準備
県研究部	1 大会の企画（主題・趣旨・分科会テーマ） 2 分科会Ⅱ（共通協議題）について 3 大会までの会合スケジュール 4 研究分担 5 大会開催要項・要録の発行、大会主題趣旨 6 大会当日の日程・業務分担作成 7 分科会運営委員会（事前打合せ）の運営 8 アンケートの準備（QRコード作成）	1 全体会・分科会の運営 ①分科会参観・配車等 ②来賓の接遇関係 2 分科会記録関係収集・保管	1 大会要録の校正
教育庁	1 分科会共同研究者の編成と依頼 2 予算獲得（指定旅費等） 3 来賓及び大会役員の接遇関係 4 記念講演者の紹介	1 接遇関係（式典への案内等） 2 教育長挨拶の原稿 3 分科会参観、懇談会への案内等	
県事務局	1 本部事務局会議 2 諸会合の調整・世話 3 会場地区との連携 4 予算措置と出納 5 各校長への通知 6 各種礼状 7 開催要項、運営要領、大会要録印刷 8 関係者への案内状・依頼状 9 県教委との連携 10 会員出席名簿作成（QRコード作成） 11 記念講演講師依頼文の作成発送 12 大会当日の受付の連絡（各地区2名） 13 記章・胸章の準備（大会前日、開催地区担当へ） 14 分科会記録用紙の準備（"） 15 国旗・県旗・会旗準備（"） 16 録音テープ準備（"） 17 記念講師の推薦・連絡調整・謝礼金 18 開催地区首長等の表敬訪問調整、他会場下見準備 19 各学校長への大会参加への文書発出	1 本部の庶務関係 2 会計担当する事項の確認・相談 3 出席簿の準備、まとめ 4 講師報償費関係 5 講師の送迎（開催地区と調整） 6 来賓・共同研究者への大会要録の準備	1 関係者へのお礼 2 大会の総括 3 講話・記念講演 ※電子媒体で保管 4 次期大会引継の準備（2月中）

沖縄県小・中学校長研究大会要録 原稿執筆要領

1. 原稿枚数と原稿構成・提出について

- (1) 指定枚数（4 ページ）にまとめる。
- (2) 原稿用紙の字数、行数は、(25文字×2 段) ×45行＝2,250文字
- (3) パソコンで執筆し、上記の様式で作成する
※様式は、県校長会事務局より、執筆者へメールにて送信する。
- (4) 原稿構成に当たっては、「原稿用紙記入例」(P19-20) を参考にして、下記事項に留意する。
 - ① 11行目までは、分科会名、研究主題、分科会関係者名、設定の趣旨等を記入する。
 - ② 図、表、写真等を挿入する場合は、字数・行数を考慮して配置し、図 1、図 2、写真 1、写真 2 と記入し、別封筒に入れ、原本はコピーしておく。また、縦線は 1 行とり、横線は行間とする。なお、拡大・縮小の場合は、原稿用紙にその枠を示すこと。
- (5) 提出先と締切
県校長会事務局に 9 月 1 日（金）までにメールにて送信する。
※校長会事務局長 E-mail : oki-koutyokai2@kca.biglobe.ne.jp

2. 原稿表記について

- (1) 文章表現について
 - ① 文章は、2 ～ 3 行（50 字～70 字）を 1 センテンスにするなど、簡潔に表現する。
 - ② 文章は、「～である」「～と思われる」等、常体でまとめる。
 - ③ 文章の区切りなどに使用する。 、 「 」 () などは、一字分とする。
 - ④ 漢字、熟語等は、正確に表記する。平仮名の方がよいところは、平仮名にする。[漢字等の表記] を参照
 - ⑤ 行の最後で文が終わり、句読点やカッコなどが次の行の最初にくる場合は、枠外にはみ出して書く。
 - ⑥ 項目だけが最終行にきて、内容が次のページにくるような記述はさける。
 - ⑦ 校長としての公的出版物であるので、校長としての格調ある表現でありたい。
 - ⑧ 人権・同和教育の観点からの留意も必要である。

(2) 記号の使い方

項目など見出しに番号を付ける場合は、「原稿用紙記入例」(P 21) を参考にして、つぎのようにする。

1	※ 1 マス目から記入する。
2	
3	
(1)	※ 2 マス目から記入する。
(2)	
(3)	
①	※ 3 マス目から記入する。
②	
③	
ア	※ 4 マス目から記入する。
イ	
ウ	

3. 参考文献の引用について

- (1) 本文中に参考文献を引用した部分は、『 』等で明確にし、終末に文献名を例記する
【引用文献記載例】

4. 文献を参考にして作成した資料などは、欄外に「注」などで、そのことを明示する。

【参考文献記載例】

漢 字 等 の 標 記 に つ い て

1. 原則として漢字で書くもの

(1) 次のような代名詞

〔例〕 彼 何 僕 私 我々 誰

(2) 次のような副詞及び連体詞

〔例〕 必ず 少し 既に 甚だ 再び 全く 最も 直ちに 余り 至って
大いに 恐らく 極めて 殊に 更に 専ら 絶えず 次いで 努めて 常に
初めて 果たして 去る 少なくとも 割に 概して 切に 実に 特に 突然
無論 互いに 来る 例えば 明るく 大きく 我が国

ただし、次の副詞は平仮名で書く。

〔例〕 かなり ふと やはり よほど

(3) 次のような接頭語

〔例〕 接頭語が付く語を漢字で書く場合は、漢字で書く。

御案内 御指導

〔例〕 接頭語が付く語を平仮名で書く場合は、平仮名で書く。

ごあいさつ ごべんたつ

《注》「挨拶」「鞭撻」は、常用漢字外のため、「あいさつ」「べんたつ」と平仮名で書く。また、「御」には、「お」という訓がないので、次のように書く。

お願い お申し込み

2. 原則として平仮名で書くもの

(1) 次のような接尾語

〔例〕 親しげ 私ども 偉ぶる 弱み 少なめ

(2) 次のような接続語

〔例〕 おって かつ ついては ただし ゆえに ところで ところが いわゆる
しかも また したがって

《注》次の4つの語は、原則として漢字で書く。

並びに 及び 又は 若しくは

(3) 次のような助動詞及び助詞

〔例〕 行かない 歩けるようだ 三十歳ぐらい 走っただけ 三日ほど

(4) 次のような使い方をするときの語句は、原則として平仮名で書く。

〔例〕 下記のとおりである 行かないこと 歩くとき 今のところ元気 正しいもの
説明するとともに 取り除くほか 神仏ゆえ 賛成するわけ 利用できる
貸してあげる 来ていただく 寒くなってくる 試してみる 増えていく
通知しておく 話してください 逃げてしまう 天才かもしれない 外れたにすぎない
見てほしい

3. その他の表記

(1) 次の語は、「 」のように書く。

〔例〕 ともだち「友達」 じゅうぶん「十分」 あたりまえ「当たり前」 つくす「尽くす」
つきる「尽きる」 ひとりひとり「一人一人」

(2) 横書きの場合は、原則として算用数字を用いる。

〔例〕 平成24年11月2日 3日間 12時30分 234人 1丁目 5番地

《注》慣用的な語句及び数量的な意味の薄い語句は、漢字で書く。

〔例〕 一般的 一部分 一つずつ 二日

(3) 公用文では、「?」「!」は使わないことになっている。

もし、使う場合には、これらの記号の後に「。」は不要。

(4) 意図して特別な読み方をするときには、漢字に「ふりがな」を付ける。

第 分科会『領域』

研究主題

提案者

司 会 者

記 録 者

ブロック共同研究者

1 はじめに

A diagram consisting of five horizontal rows of small circles. The first four rows each contain 20 circles, and the fifth row contains 5 circles.

2 主題設定の理由

- (1) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
- (2) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
①○○○○○○○○○○○
②○○○○○○○○○○○

3 研究の視点

A diagram showing a 20x4 array of data. It consists of four rows of circles. The first three rows each contain 20 circles, and the fourth row contains 10 circles, for a total of 70 circles.

4 研究の実際（※校長の関わりを具体的に示す）

A 10x10 grid of 100 small circles, arranged in 10 rows and 10 columns. The circles are light gray with a thin black outline.

A diagram of a 120-sided polygon (dodecahedron) represented by a grid of small circles. The grid is 6 rows high and 20 columns wide. The first five rows are full, each containing 20 circles. The sixth row contains only the first 10 circles, with the remaining 10 positions being empty. This arrangement of circles represents the vertices of a 120-sided polygon.

5 成果と課題

- (1) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○
- (2) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○
- ①○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○
- ②○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○
- ③○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○

6 おわりに

第 分科会

研 究 主 題

地区共同研究者（名前・○中）

地区共同研究者（名前・○中）

地区共同研究者（名前・○中）

1 はじめに

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○

2 主題設定の理由

- (1) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
(2) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
①○○○○○○○○○○○○
②○○○○○○○○○○○○

3 研究の視点

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○

4 研究の実際（※校長の関わりを具体的に示す）

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

5 成果と課題

- (1) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○
(2) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○
①○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○
②○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○
③○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○

6 おわりに

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

○原稿は2ページとする。

※ページの表記の仕方

小1-1-①（小1分科会 -1：国頭・2：中頭・
3那覇・4島尻・5：宮古・6：八重山）-①（p1）
を表す。

■中2分科会・中頭・p2の場合は、中2-2-②
と表記する。

会場案内図



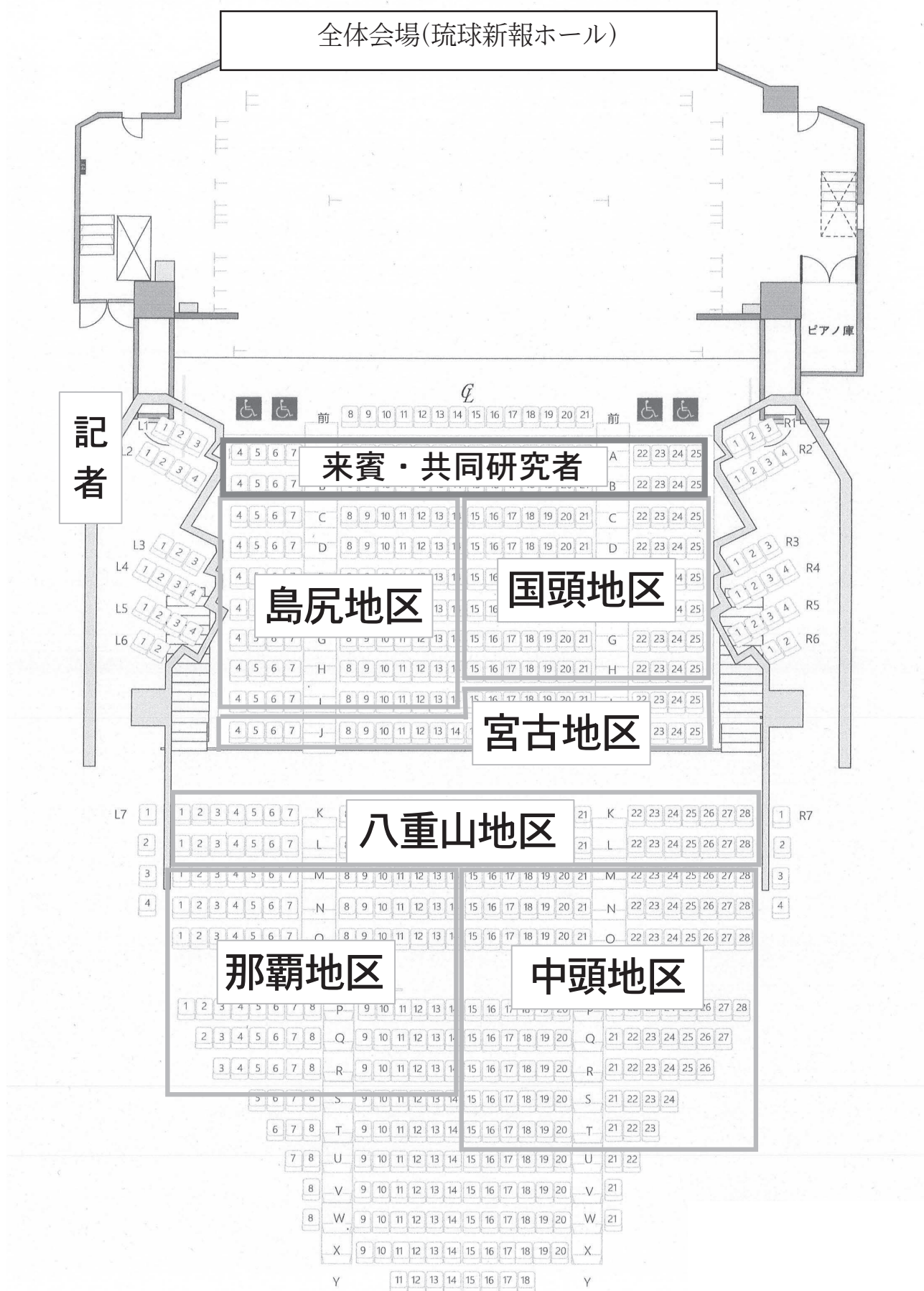
小学校長会場

第1分科会	沖縄県立武道館 1 F 会議室 TEL 098-858-2700	第6分科会	八汐荘 4 F 会議室 B TEL 098-867-1191
第2分科会	沖縄県立武道館 2 F 研修室 TEL 098-858-2700	第7分科会	給食会館 2 F 大会議室 TEL 098-867-1493
第3分科会	ほしぞら公民館 3 F ホール TEL 098-917-3443	第8分科会	沖縄タイムスビル 5 F 貸会議室 TEL 098-860-3000
第4分科会	八汐荘 1 F 屋良ホール② TEL 098-867-1191	第9分科会	ほしぞら公民館 3 F 第1学習室 TEL 098-917-3443
第5分科会	八汐荘 4 F 会議室 A TEL 098-867-1191	第10分科会	八汐荘 1 F 屋良ホール① TEL 098-867-1191

中学校長会場

第1分科会	南部合同庁舎 4 F 第1会議室 TEL 098-867-1066	第4分科会	南部合同庁舎 5 F 第2会議室 TEL 098-867-1066
第2分科会	南部合同庁舎 4 F 第2会議室 TEL 098-867-1066	第5分科会	南部合同庁舎 5 F 第3会議室 TEL 098-867-1066
第3分科会	南部合同庁舎 5 F 第1会議室 TEL 098-867-1066	第6分科会	南部合同庁舎 5 F 第4会議室 TEL 098-867-1066

座席配置図



20 大会運営組織図



21 大会役員

〈大会会長〉

田 島 正 敏 (県小学校長会長)

〈大会副会長〉

有 銘 真一郎 (県中学校長会長)
玉 城 有 (県小学校副会長)
平 良 淳 (県小学校長副会長)
豊 里 寿 (県小学校長副会長)
石 田 陽一郎 (県中学校副会長)
佐 伯 進 (県中学校副会長)
神 山 吉 明 (県中学校副会長)

〈運営委員長〉

古 賀 義 之 (那覇地区小学校長会長)

〈運営副委員長〉

名嘉原 安 志 (那覇地区中学校長会長)
大 村 朝 彦 (那覇地区小副会長)
宮 里 満 男 (那覇地区小副会長)
徳 門 敦 子 (那覇地区小副会長)
米 嵩 睦 子 (那覇地区小副会長)
黒 島 佐和子 (那覇地区中副会長)
山 里 崇 (那覇地区中副会長)
平 良 一 (那覇地区中副会長)
松 尾 剛 (県校長会小総務部長)
與那嶺 正 (県校長会中総務部長)
美 差 淳 司 (県校長会小研究部長)
濱 川 太 (県校長会中研究部長)

〈運営委員〉

安慶田 正 人 (国頭地区小学校長会長)
天 願 直 光 (中頭地区小学校長会長)
平 良 全 (島尻地区小学校長会長)
砂 川 栄 作 (宮古地区小学校長会長)
真玉橋 真由美 (八重山地区小学校長会長)
小 渡 克 彦 (國頭地区中学校長会長)
塩 川 齊 (中頭地区中学校長会長)
大 城 圭 (島尻地区中学校長会長)
狩 俣 典 昭 (宮古地区中学校長会長)
仲 地 秀 将 (八重山地区中学校長会長)

〈大会事務局〉

崎 原 永 輝 (沖縄県小・中学校長会)
比 嘉 紘 美 (沖縄県小・中学校長会)

This image shows a single sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

22 分科会担当者一覧

(小学校)

■協議題のゴシック体は提案内容

分科	領 会 域 場	主 題	協 議 題
1	経営ビジョン 沖縄県立武道館 1F会議室	先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進 (中頭)	①未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定 ②学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進
2	「組織・運営」 「評価・改善」 沖縄県立武道館 2F研修室	学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに人事評価を教職員の資質・能力の向上と業務改善に生かす学校経営の推進 (八重山)	①学校経営ビジョンの具現化に向けた活力ある組織づくりと学校運営の推進 ②教職員の資質・向上に向けた人事評価の工夫
3	「知性・創造性」 ほしぞら公民館 3Fホール	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント (那覇)	①「社会に開かれた教育課程」の実現に向けた取組 ②しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育活動を実現するカリキュラム・マネジメント
4	「豊かな人間性」 「健やかな体」 八汐荘1F 屋良ホール②	豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント (国頭)	①新たな社会を見据えた人権教育と豊かな心を育てる道徳教育の推進 ②心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を目指す教育活動の推進
5	「研究・研修」 八汐荘4F 会議室A	学校の教育力を向上させる研究・研修の推進 (那覇)	①教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実 ②キャリアステージに応じた資質・能力や学校経営への参画意識の向上を図る研修の推進
6	「リーダー育成」 八汐荘4F 会議室B	これからの学校を担うリーダーの育成 (島尻)	①学校教育への確かな展望をもち、行動できるミドルリーダーの育成 ②時代の変化をとらえる能力と豊かな人間性を身に付けた管理職人材の育成
7	「学校安全」 「危機対応」 給食会館 2F大会議室	命を守る安全・防災教育の推進並びに様々な危機への対応 (島尻)	①危機回避能力を育む安全教育・防災教育の充実と地域や関係機関との連携を図った安全教育・防災教育の推進 ②いじめや不登校等に対応できる体制の整備と高い危機管理能力をもつ組織・体制づくり
8	「社会形成能力」 沖縄タイムスビル 5F貸会議室大1・2	社会形成能力を育む教育の推進 (国頭)	①社会の発展に貢献しようとする資質・能力・態度を育む教育活動の推進 ②自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進
9	「自立と共生」 「連携・接続」 ほしぞら公民館 第1学習室	自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進並びに家庭・地域等との連携 (宮古)	①子どもの自立を図る特別支援教育の推進 ②家庭・地域と連携し充実した教育活動を展開できる学校づくりの推進
10	「学力向上推進」 八汐荘1F 屋良ホール①	新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、校長の理念と指導性 (中頭)	①「自立した学習者」育成プロジェクトを推進する具体的方策の在り方 ②家庭・地域社会と連携した学力向上の在り方

共同研究者	提 案 者	司 会 者	記 録 者	運 営 委 員 会 場 責 任 者	各地区参加割合						合 計
					国頭	中頭	那覇	島尻	宮古	八山	
喜屋武 匡 (国頭教育事務所 指導班班長)	堤 正 代 (諸見小) 赤 嶺 絹 代 (沖：島袋小)	知 念 英 也 (山内小)	上 原 秀 樹 (コザ小) 宮 平 安 智 (中の町小)	佐久田 悟 (古蔵小)	3	5	4	3	1	2	18
池 原 鉄 (那覇教育事務所 指導班 主任指導 主事)	磯 部 大 輔 (真喜良小)	真玉橋 真由美 (石垣小)	與世山 操 (大本小)	大 川 剛 (安謝小)	3	5	4	4	1	3	20
上 里 亮 (義務教育課 幼児教育班班長)	仲 地 千 佳 (真嘉比小)	新 川 美 紀 (大道小)	石 原 郁 代 (松川小)	奥 間 千賀子 (松島小)	4	6	4	3	1	2	21
前 花 和 秀 (島尻教育事務所 指導班 主任指導 主事)	島 川 直 樹 (久辺小)	宮 城 昭 彦 (大北小)	島 田 綾 子 (奥間小)	細 田 幸 弘 (浦添小)	3	8	5	4	1	2	23
島 袋 健 (義務教育課 義務教育指導班 主任指導主事)	中 山 盛 延 (石嶺小)	宮 里 辰 也 (大名小)	神 谷 貴 子 (城東小) 工 藤 直 也 (城北小)	神 谷 貴 子 (城東小)	3	9	5	4	1	2	24
有 銘 眞 吾 (島尻教育事務所 指導班 主任指導 主事)	上江洲 学 (新城小)	渡慶次 憲 雄 (糸満南小)	竹 下 晴 康 (百名小) 上 原 義 仁 (ゆたか小)	金 城 こずえ (壺屋小)	3	7	7	4	2	2	25
勢理客 貴 之 (島尻教育事務所 指導班 班長)	仲 村 保 (豊崎小)	赤 嶺 智 郎 (とよみ小)	山 城 真 雄 (津嘉山小) 宮 里 安 英 (真壁小)	上江洲 卓 (垣花小)	4	7	6	4	2	2	25
西 銘 かおる (国頭教育事務所 指導班 主任指導 主事)	比 嘉 豊 (瀬喜田小)	屋 良 篤 (松田小)	玉 城 史 江 (本部小)	喜屋武 直 人 (清水小)	3	4	6	3	1	2	19
玉 城 和 機 (中頭教育事務所 指導班 班長)	下 地 美和子 (下地小)	村 吉 博 勝 (東小)	名 城 歩 (鏡原小)	根 間 正 人 (内間小)	3	8	6	3	3	2	25
花 崎 太 郎 (中頭教育事務所 指導班 主任指導 主事)	佐 伯 賢 (宮里小)	坂 本 哲 隆 (美里小)	石 川 真奈美 (北美小)	永 田 聖 子 (城岳小)	4	5	4	3	2	2	20

(中学校)

■協議題のゴシック体は提案内容

分 科	領 会 域 場	主 題	協 議 題
1	「教育課程」 南部合同庁舎 4F 第 1 会議室	カリキュラム・マネジメント の推進 (八重山)	①学習指導要領に基づく教育課程の実施状況を把握し、学習効果の最大化を図るための工夫 ②新しい時代に求められる資質・能力を育成していくための教科等横断的な教育課程の編成・実施・評価・改善
2	「確かな学力」 南部合同庁舎 4F 第 2 会議室	主体的・対話的で深い学びの 実現 (那覇)	①教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の工夫 ②全ての学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題を発見し解決する能力の向上
3	「豊かな心」 「健やかな身体」 南部合同庁舎 5F 第 1 会議室	よりよく生きようとする道徳 教育と、健康で豊かな生活 を実現するための教育の充実 (中頭)	①道徳的諸価値についての理解と、道徳的な判断力、問題を発見し解決する能力の向上 ②生涯にわたる豊かな生活を実現していく資質・能力の育成と体力の向上
4	「自らの生き方」 南部合同庁舎 5F 第 2 会議室	一人一人のキャリア教育・進 路指導と自己指導能力を育成 する生徒指導の充実 (島尻)	①社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育成する系統的なキャリア教育の充実 ②好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導力を育成する学校教育の在り方
5	「人材育成」 南部合同庁舎 5F 第 3 会議室	「令和の日本型学校教育」を 担う教師の育成 (国頭)	①生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教師の育成と「新たな教師の学びの姿」を実現する研修の在り方 ②教科等の専門性と指導力及びICT活動指導力を含めた新たな課題に対応できる力量を高める人財育成と研修の在り方
6	「学校経営」 南部合同庁舎 5F 第 4 会議室	学校と地域の連携・協働によ る「チーム学校」と「働き方 改革」の実現 (宮古)	①教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方 ②チーム学校としての学校と地域の連携・協働体制の在り方

共同研究者	提 案 者	司 会 者	記 録 者	運 営 委 員 会 場 責 任 者	各地区参加割合						合 計
					国頭	中頭	那覇	島尻	宮古	八山	
當 山 誠 (義務教育課学力 向上推進室 主任指導主事)	岡 崎 心 一 (竹富中)	仲 山 ゆかり (小浜中)	亀 川 善 朝 (黒島中) 伊志嶺 安 威 (西表中)	大 城 朝 也 (浦添中)	3	5	5	4	2	4	23
狩 俣 英 樹 (中頭教育事務所 指導班 主任指導 主事)	山 田 泰 之 (仲井真中)	宮 良 安 剛 (石田中)	前 川 和 昭 (北中)	宮 良 安 剛 (石田中)	4	5	3	4	2	3	21
善 国 道 太 (那覇教育事務所 指導班 班長)	仲 程 正 (嘉数中)	松 田 庄一郎 (西原中)	宮 里 里加子 (宜野湾中) 松 尾 望 (西原東中)	喜久川 洋 (城北中)	3	5	4	4	2	4	22
中 村 哲 也 (義務教育課義務教育 指導班 班長)	稲 福 政 彦 (具志頭中)	吉 田 順 太 (知念中)	仲 程 俊 浩 (三和中) 足 立 克 枝 (大里中) 平 仲 健 (東風平中)	望 月 雄 紀 (鏡原中)	3	6	5	5	2	3	24
高 良 恵 (国頭教育事務所 指導班 主任指導 主事)	伊 波 勉 (伊豆味中)	佐 藤 繁 (大宮中)	具志堅 勝 司 (国頭中)	大 田 守 利 (松島中)	3	5	4	4	2	3	21
福 里 祥 代 (那覇教育事務所 指導班 主任指導 主事)	佐久本 聡 (伊良部島中)	新 崎 慶 (城東中)	又 吉 史 晃 (球美中)	又 吉 史 晃 (球美中)	4	5	3	4	2	3	21

23 各分科会グループ別名簿

◎小学校分科会

第 1 分科会 (18名)			
第1分科会 中頭	沖縄市立山内小学校	知 念 英 也	司会
	沖縄市立諸見小学校	堤 正 代	提案
	沖縄市立島袋小学校	赤 嶺 絹 代	提案
	沖縄市立コザ小学校	上 原 秀 樹	記録
	沖縄市立中の町小学校	宮 平 安 智	記録

第 2 分科会 (20名)			
第2分科会 八重山	石垣市立石垣小学校	真玉橋 真由美	司会
	石垣市立真喜良小学校	磯 部 大 輔	提案
	石垣市立大本小学校	與世山 操	記録

1 グループ

国 頭	名護市立大宮小学校	上 間 久	
中 頭	沖縄市立山内小学校	知 念 英 也	
中 頭	沖縄市立中の町小学校	宮 平 安 智	
那 覇	那覇市立真地小学校	長 嶺 奈々子	司会
宮 古	宮古島市立平良第一小学校	與那覇 盛 彦	記録

1 グループ

国 頭	名護市立羽地小学校	赤 松 啓 介	
中 頭	うるま市立与那城小学校	大 庭 真由美	司会
那 覇	那覇市立銘苅小学校	渡 口 里 夏	記録
島 尻	豊見城市立長嶺小学校	瑞慶覧 長 洋	

2 グループ

国 頭	大宜味村立大宜味小学校	平 良 智	司会
中 頭	沖縄市立諸見小学校	堤 正 代	
那 覇	那覇市立古蔵小学校	佐久田 悟	記録
島 尻	豊見城市立豊見城小学校	平 良 全	
八重山	石垣市立野底小学校	大 浜 覚	

2 グループ

国 頭	名護市立安和小学校	西 江 剛	司会
中 頭	うるま市立平敷屋小学校	島 袋 弘 文	
那 覇	那覇市立天久小学校	松 永 智 昭	記録
宮 古	宮古島市立砂川小学校	砂 川 栄 作	

3 グループ

中 頭	沖縄市立島袋小学校	赤 嶺 絹 代	
那 覇	那覇市立上間小学校	赤 嶺 栄 達	
島 尻	渡嘉敷村立阿波連小学校	西 表 り か	記録
八重山	石垣市立明石小学校	仲 皿 善 也	司会

3 グループ

国 頭	名護市立東江小学校	友 利 義 明	記録
中 頭	うるま市立高江洲小学校	前 原 博 光	
島 尻	八重瀬町立白川小学校	大 城 直 也	司会
八重山	石垣市立石垣小学校	真玉橋 真由美	

4 グループ

国 頭	伊江村立西小学校	上 間 洋 介	記録
中 頭	沖縄市立コザ小学校	上 原 秀 樹	
那 覇	那覇市立仲井真小学校	大 城 香 織	
島 尻	南風原町立南風原小学校	前 城 光 告	司会

4 グループ

中 頭	うるま市立勝連小学校	宮 城 政 光	記録
那 覇	那覇市立安謝小学校	大 川 剛	司会
島 尻	豊見城市立上田小学校	大 城 仁 美	
八重山	石垣市立大本小学校	與世山 操	

※以下の県役員は、分科会協議には参加せず、全体の様子を参観する。

県 会 長	那覇市立城南小学校	田 島 正 敏
県 副 会 長	宜野座村立漢那小学校	豊 里 寿
県 副 会 長	宜野湾市立嘉数小学校	玉 城 有
県 副 会 長	与那原町立与那原小学校	平 良 淳
県研究部長	那覇市立小禄小学校	美 差 淳 司

5 グループ

中 頭	うるま市立南原小学校	比 嘉 正 彦	司会
那 覇	那覇市立曙小学校	真喜志 達 哉	
島 尻	南城市立大里北小学校	國 仲 貴 光	記録
八重山	石垣市立真喜良小学校	磯 部 大 輔	

第3分科会 (21名)

第3分科会 那覇	那覇市立大道小学校	新 川 美 紀	司会
	那覇市立真嘉比小学校	仲 地 千 佳	提案
	那覇市立松川小学校	石 原 郁 代	記録

1 グループ

国 頭	宜野座村立宜野座小学校	新 城 雄二郎	司会
中 頭	沖縄市立美東小学校	仲 村 恵 子	記録
那 覇	那覇市立真嘉比小学校	仲 地 千 佳	
島 尻	南城市立知念小学校	前 川 真 哉	
八重山	竹富町立白浜小学校	比 嘉 君 代	

2 グループ

国 頭	国頭村立奥小学校	佐久本 努	
中 頭	沖縄市立高原小学校	伊 禮 弘 幸	司会
那 覇	那覇市立大道小学校	新 川 美 紀	
島 尻	糸満市立光洋小学校	新 垣 仁	記録

3 グループ

国 頭	伊平屋村立伊平屋小学校	松 田 和 美	記録
中 頭	沖縄市立室川小学校	長 遠 順 二	
那 覇	那覇市立松川小学校	石 原 郁 代	
島 尻	南城市立佐敷小学校	慶田盛 元	司会

4 グループ

国 頭	金武町立中川小学校	井 口 憲 治	記録
中 頭	沖縄市立泡瀬小学校	上 門 信 人	
那 覇	那覇市立松島小学校	奥 間 千賀子	
宮 古	宮古島市立城辺小学校	上 間 幹 夫	司会

5 グループ

中 頭	沖縄市立安慶田小学校	川 根 智恵美	記録
中 頭	沖縄市立比屋根小学校	桃 原 のぞみ	
島 尻	豊見城市立伊良波小学校	長 尾 順 子	
八重山	竹富町立上原小学校	名嘉眞 功 基	司会

第4分科会 (23名)

第4分科会 国頭	名護市立大北小学校	宮 城 昭 彦	司会
	名護市立久辺小学校	島 川 直 樹	提案
	国頭村立奥間小学校	島 田 綾 子	記録

1 グループ

国 頭	名護市立久辺小学校	島 川 直 樹	
中 頭	宜野湾市立普天間第二小学校	多和田 一 美	司会
中 頭	宜野湾市立長田小学校	照 屋 文 宏	
那 覇	浦添市立浦城小学校	日 高 聡	記録
島 尻	糸満市立糸満小学校	仲 座 正	

2 グループ

国 頭	国頭村立奥間小学校	島 田 綾 子	
中 頭	宜野湾市立大山小学校	比 嘉 秀 次	
中 頭	宜野湾市立はごろも小学校	天 願 直 光	
那 覇	浦添市立港川小学校	片 平 雅 明	司会
宮 古	宮古島市立狩俣小学校	喜屋武 真 史	記録

3 グループ

国 頭	名護市立大北小学校	宮 城 昭 彦	
中 頭	宜野湾市立大謝名小学校	玉 寄 誠	
那 覇	浦添市立牧港小学校	吉 田 朝 顕	
島 尻	南城市立船越小学校	高 島 友 幸	司会
八重山	石垣市立八島小学校	石 垣 永 一	記録

4 グループ

中 頭	宜野湾市立宜野湾小学校	兼 城 勲	記録
那 覇	浦添市立当山小学校	大 村 朝 彦	
島 尻	糸満市立高嶺小学校	又 吉 由美子	
八重山	竹富町立大原小学校	田 嶋 文 彦	司会

5 グループ

中 頭	宜野湾市立普天間小学校	島 袋 孝 治	司会
中 頭	宜野湾市立志真志小学校	田 中 志 郎	
那 覇	浦添市立浦添小学校	細 田 幸 弘	
島 尻	与那原町立与那原東小学校	砂 川 充	記録

第5分科会 (24名)

第5分科会 那覇	那覇市立大名小学校	宮 里 辰 也	司会
	那覇市立石嶺小学校	中 山 盛 延	提案
	那覇市立城東小学校	神 谷 貴 子	記録
	那覇市立城北小学校	工 藤 直 也	記録

1 グループ

国 頭	東村立有銘小学校	前 川 恒 久	司会
中 頭	西原町立西原小学校	名 護 千賀子	記録
中 頭	北中城村立北中城小学校	塩 川 真 弓	
那 覇	那覇市立大名小学校	宮 里 辰 也	
島 尻	豊見城市立座安小学校	城 間 修 司	

2 グループ

国 頭	今帰仁村立今帰仁小学校	徳 山 章 子	記録
中 頭	西原町立西原南小学校	平 良 みどり	司会
中 頭	北中城村立島袋小学校	榮 葉 子	
那 覇	那覇市立石嶺小学校	中 山 盛 延	
島 尻	糸満市立兼城小学校	大 田 出	

3 グループ

国 頭	名護市立名護小学校	安慶田 正 人	
中 頭	中城村立中城小学校	森 本 雅 人	記録
那 覇	那覇市立城東小学校	神 谷 貴 子	
宮 古	宮古島市立久松小学校	上 田 達 大	司会

4 グループ

中 頭	西原町立西原東小学校	榮野川 活	
中 頭	中城村立津覇小学校	新 垣 徳 夫	
那 覇	那覇市立城北小学校	工 藤 直 也	
島 尻	南風原町立北丘小学校	上 原 千 秋	司会
八重山	石垣市立平真小学校	大 浜 譲	記録

5 グループ

中 頭	西原町立坂田小学校	金 城 美奈子	
中 頭	中城村立中城南小学校	島 袋 清	
那 覇	那覇市立城西小学校	古 賀 義 之	
島 尻	糸満市立潮平小学校	新 垣 誠	記録
八重山	石垣市立吉原小学校	高 木 健一郎	司会

第6分科会 (25名)

第6分科会 島尻	糸満市立糸満南小学校	渡慶次 憲 雄	司会
	八重瀬町立新城小学校	上江洲 学	提案
	南城市立百名小学校	竹 下 晴 康	記録
	豊見城市立ゆたか小学校	上 原 義 仁	記録

1 グループ

国 頭	名護市立稲田小学校	鎌 田 登志男	司会
中 頭	読谷村立読谷小学校	玉 城 靖	
那 覇	那覇市立壺屋小学校	金 城 こずえ	記録
那 覇	那覇市立若狭小学校	照 屋 謙 二	
島 尻	八重瀬町立新城小学校	上江洲 学	

2 グループ

国 頭	国頭村立辺土名小学校	町 田 祐 治	
中 頭	読谷村立喜名小学校	豊 田 達 雄	司会
那 覇	那覇市立神原小学校	宮 城 信 夫	
那 覇	那覇市立那覇小学校	眞境名 君 代	
宮 古	宮古島市立西辺小学校	與那覇 正 人	記録

3 グループ

国 頭	東村立高江小学校	知 花 人	
中 頭	読谷村立古堅南小学校	與 座 朝 明	記録
那 覇	那覇市立天妃小学校	與那嶺 美奈子	司会
島 尻	糸満市立糸満南小学校	渡慶次 憲 雄	
宮 古	宮古島市立北小学校	呉 屋 武 志	

4 グループ

中 頭	読谷村立古堅小学校	林 史 子	記録
中 頭	嘉手納町立屋良小学校	島 袋 伸	
那 覇	那覇市立開南小学校	儀 間 実 子	
島 尻	南城市立百名小学校	竹 下 晴 康	
八重山	石垣市立登野城小学校	宮 良 健	司会

5 グループ

中 頭	読谷村立渡慶次小学校	玉那覇 文 隆	司会
中 頭	嘉手納町立嘉手納小学校	新 城 剛	
那 覇	那覇市立泊小学校	玉 村 かおり	
島 尻	豊見城市立ゆたか小学校	上 原 義 仁	
八重山	与那国町立久部良小学校	金 城 淳	記録

第7分科会 (25名)

第7分科会 島尻	豊見城市立とよみ小学校	赤 嶺 智 郎	司会
	豊見城市立豊崎小学校	仲 村 保	提案
	南風原町立津嘉山小学校	山 城 真 雄	記録
	糸満市立真壁小学校	宮 里 安 英	記録

1 グループ

国 頭	名護市立真喜屋小学校	宮 城 敬	司会
中 頭	恩納村立恩納小学校	古 謝 敦 子	
那 覇	那覇市立高良小学校	宮 里 満 男	
島 尻	豊見城市立とよみ小学校	赤 嶺 智 郎	
八重山	石垣市立新川小学校	大 浜 公三枝	記録

2 グループ

国 頭	伊是名村立伊是名小学校	宜志富 勇	
中 頭	恩納村立山田小学校	松 尾 剛	記録
那 覇	那覇市立さつき小学校	徳 門 敦 子	
島 尻	豊見城市立豊崎小学校	仲 村 保	
八重山	石垣市立川原小学校	西島本 貴 子	司会

3 グループ

国 頭	国頭村立安田小学校	崎 山 和 史	
中 頭	うるま市立宮森小学校	金 城 睦 男	司会
中 頭	恩納村立安富祖小学校	山 内 久 江	
那 覇	那覇市立宇栄原小学校	奥 平 美智子	記録
島 尻	南風原町立津嘉山小学校	山 城 真 雄	

4 グループ

国 頭	国頭村立安波小学校	泉 川 良 之	記録
中 頭	うるま市立城前小学校	伊 礼 美和子	
那 覇	那覇市立金城小学校	米 嵩 睦 子	司会
島 尻	糸満市立真壁小学校	宮 里 安 英	
宮 古	宮古島市立上野小学校	與那覇 修	

5 グループ

中 頭	恩納村立仲泊小学校	福 地 正 雄	司会
中 頭	うるま市立伊波小学校	宮 城 卓 司	
那 覇	那覇市立小禄南小学校	宮 城 紀 子	記録
那 覇	那覇市立垣花小学校	上江洲 卓	
宮 古	宮古島市立西城小学校	亀 川 はるみ	

第8分科会 (19名)

第8分科会 国頭	宜野座村立松田小学校	屋 良 篤	司会
	名護市立瀬喜田小学校	比 嘉 豊	提案
	本部町立本部小学校	玉 城 史 江	記録

1 グループ

国 頭	名護市立瀬喜田小学校	比 嘉 豊	
中 頭	北谷町立北谷小学校	眞境名 兼 彦	司会
那 覇	久米島町立美崎小学校	我如古 忍	
那 覇	久米島町立清水小学校	喜屋武 直 人	記録
宮 古	宮古島市立福嶺小学校	高 里 慎一郎	

2 グループ

国 頭	宜野座村立松田小学校	屋 良 篤	
中 頭	北谷町立北玉小学校	根 保 輝	
那 覇	久米島町立久米島小学校	大 嶺 成	司会
島 尻	糸満市立喜屋武小学校	金 城 奈津子	記録
八重山	与那国町立比川小学校	新 里 和 也	

3 グループ

国 頭	本部町立本部小学校	玉 城 史 江	
中 頭	北谷町立浜川小学校	稲 福 正	記録
那 覇	久米島町立比屋定小学校	大 城 勝 子	
島 尻	南城市立玉城小学校	城 間 勝	司会
八重山	与那国町立与那国小学校	水 見 拓 磨	

4 グループ

中 頭	北谷町立北谷第二小学校	太 田 薫	記録
那 覇	久米島町立仲里小学校	松 原 伸 一	
那 覇	久米島町立大岳小学校	浦 添 充 志	司会
島 尻	八重瀬町立具志頭小学校	城 間 優 子	

第9分科会 (25名)

第9分科会 宮古	宮古島市立東小学校	村 吉 博 勝	司会
	宮古島市立下地小学校	下 地 美和子	提案
	宮古島市立鏡原小学校	名 城 歩	記録

1 グループ

国 頭	名護市立屋部小学校	松 田 しずか	司会
中 頭	うるま市立天願小学校	米 田 大 作	記録
中 頭	うるま市立赤道小学校	大 里 元 児	
那 覇	浦添市立前田小学校	平 良 その子	
宮 古	宮古島市立下地小学校	下 地 美和子	

2 グループ

国 頭	金武町立嘉芸小学校	屋 宜 健	記録
中 頭	うるま市立あげな小学校	屋 宜 英 樹	司会
那 覇	浦添市立仲西小学校	金 城 一 石	
那 覇	浦添市立内間小学校	根 間 正 人	
宮 古	宮古島市立東小学校	村 吉 博 勝	

3 グループ

国 頭	今帰仁村立兼次小学校	大 城 豊	
中 頭	うるま市立田場小学校	島 袋 淳	
那 覇	浦添市立神森小学校	嘉 陽 健	司会
島 尻	糸満市立西崎小学校	上 原 正 寛	記録
宮 古	宮古島市立鏡原小学校	名 城 歩	

4 グループ

中 頭	うるま市立兼原小学校	島 袋 盛 章	
中 頭	うるま市立具志川小学校	上 門 健 作	
那 覇	浦添市立宮城小学校	石 川 恵 優	
島 尻	南城市立大里南小学校	與 儀 毅	司会
八重山	石垣市立白保小学校	北 田 憲 司	記録

5 グループ

中 頭	うるま市立川崎小学校	小 濱 勉	
中 頭	うるま市立中原小学校	松 田 健 史	
那 覇	浦添市立沢岬小学校	川 端 修	記録
島 尻	八重瀬町立東風平小学校	高 木 眞 治	
八重山	石垣市立宮良小学校	石 田 美喜子	司会

第10分科会 (20名)

第10分科会 中頭	沖縄市立美里小学校	坂 本 哲 隆	司会
	沖縄市立宮里小学校	佐 伯 賢	提案
	沖縄市立北美小学校	石 川 真奈美	記録

1 グループ

国 頭	伊江村立伊江小学校	島 袋 洋	司会
中 頭	沖縄市立宮里小学校	佐 伯 賢	
那 覇	那覇市立真和志小学校	瀬名波 淳	
島 尻	南城市立馬天小学校	瀬 底 正 栄	記録

2 グループ

国 頭	本部町立瀬底小学校	渡 口 美智代	
中 頭	沖縄市立北美小学校	石 川 真奈美	
那 覇	那覇市立与儀小学校	福 本 利江子	司会
八重山	石垣市立伊野田小学校	前 泊 康 史	記録

3 グループ

国 頭	今帰仁村立天底小学校	我那覇 隆	記録
中 頭	沖縄市立越来小学校	渡久地 裕 子	
那 覇	那覇市立城岳小学校	永 田 聖 子	
宮 古	宮古島市立南小学校	天 久 康	司会

4 グループ

国 頭	金武町立金武小学校	伊 藝 剛	
中 頭	沖縄市立美原小学校	浦 崎 景 子	
島 尻	糸満市立米須小学校	高 良 美奈子	司会
宮 古	多良間村立多良間小学校	古 堅 秀 樹	記録

5 グループ

中 頭	沖縄市立美里小学校	坂 本 哲 隆	
那 覇	那覇市立識名小学校	上 間 輝 代	記録
島 尻	南風原町立翔南小学校	城 間 智	
八重山	石垣市立大浜小学校	福 地 かおり	司会

◎中学校分科会

第 1 分科会 (23名)

八重山 第1分科会	竹富町立小浜中学校	仲 山 ゆかり	司会
	竹富町立竹富中学校	岡 崎 心 一	提案
	竹富町立黒島中学校	亀 川 善 朝	記録
	竹富町立西表中学校	伊志嶺 安 威	記録

1 グループ

国 頭	伊是名村立伊是名中学校	具志堅 仁 一	司会
中 頭	沖縄市立越來中学校	山 本 薫	
那 覇	浦添市立神森中学校	津 波 匠	
島 尻	豊見城市立豊崎中学校	大 城 正 篤	記録
八重山	竹富町立黒島中学校	亀 川 善 朝	

2 グループ

国 頭	名護市立羽地中学校	新 城 基 之	記録
中 頭	北中城村立北中城中学校	上 原 充	司会
那 覇	浦添市立港川中学校	山 里 崇	
島 尻	南城市立久高中学校	山 田 浩 也	
八重山	竹富町立小浜中学校	仲 山 ゆかり	

3 グループ

国 頭	名護市立屋部中学校	小 渡 克 彦	
中 頭	中城村立中城中学校	具志堅 博 昭	
那 覇	浦添市立浦西中学校	仲 嶺 香 代	司会
宮 古	宮古島市立鏡原中学校	濱 川 泰 成	記録
八重山	竹富町立西表中学校	伊志嶺 安 威	

4 グループ

中 頭	沖縄市立コザ中学校	仲宗根 政 人	記録
那 覇	浦添市立浦添中学校	大 城 朝 也	
島 尻	与那原町立与那原中学校	當 間 保	
宮 古	宮古島市立上野中学校	砂 川 泰 範	司会

5 グループ

中 頭	沖縄市立山内中学校	渡慶次 安 弘	
那 覇	浦添市立仲西中学校	金 城 淳	記録
島 尻	豊見城市立伊良波中学校	下 地 秀 隆	司会
八重山	竹富町立竹富中学校	岡 崎 心 一	

第 2 分科会 (21名)

那覇 第2分科会	那覇市立石田中学校	宮 良 安 剛	司会
	那覇市立仲井真中学校	山 田 泰 之	提案
	宮古島市立北中学校	前 川 和 昭	記録

1 グループ

国 頭	今帰仁村立今帰仁中学校	宮 城 政 樹	司会
中 頭	うるま市立彩橋中学校	北 村 貴 徳	
那 覇	那覇市立古蔵中学校	太 田 寛	
島 尻	糸満市立西崎中学校	宮 城 義 隆	
八重山	石垣市立石垣第二中学校	宮 良 篤	記録

2 グループ

国 頭	宜野座村立宜野座中学校	渡慶次 靖	
中 頭	うるま市立津堅中学校	徳 永 誠	記録
島 尻	座間味村立座間味中学校	伊 井 秀 治	司会
八重山	石垣市立大浜中学校	仲 地 秀 将	

3 グループ

国 頭	伊江村立伊江中学校	伊 波 寿 光	
中 頭	うるま市立与勝中学校	塩 川 斉	
島 尻	南城市立佐敷中学校	川 上 一	記録
宮 古	宮古島市立北中学校	前 川 和 昭	司会

4 グループ

国 頭	伊平屋村立野甫中学校	池 原 健	記録
中 頭	うるま市立与勝第二中学校	上 門 博 之	司会
那 覇	那覇市立石田中学校	宮 良 安 剛	
宮 古	宮古島市立平良中学校	狩 俣 典 昭	

5 グループ

中 頭	うるま市立高江洲中学校	當 銘 剛	記録
那 覇	那覇市立仲井真中学校	山 田 泰 之	
島 尻	豊見城市立豊見城中学校	島 袋 篤	
八重山	石垣市立石垣中学校	石 垣 史 昭	司会

※以下の県役員は、分科会協議には参加せず、全体の様子を参観する。

県 会 長	南城市立玉城中学校	有 銘 真一郎
県 副 会 長	那覇市立那覇中学校	石 田 陽一郎
県 副 会 長	宜野湾市立真志喜中学校	佐 伯 進
県 副 会 長	名護市立名護中学校	神 山 吉 明
県研究部長	那覇市立寄宮中学校	濱 川 太

第3分科会 (22名)

第3分科会 中頭	西原町立西原中学校	松 田 庄一郎	司会
	宜野湾市立嘉数中学校	仲 程 正	提案
	宜野湾市立宜野湾中学校	宮 里 里加子	記録
	西原町立西原東中学校	松 尾 望	記録

1 グループ

国 頭	名護市立緑風学園	謝 花 しのぶ	
中 頭	宜野湾市立普天間中学校	由 博 文	
那 覇	那覇市立城北中学校	喜久川 洋	司会
島 尻	渡嘉敷村立渡嘉敷中学校	嘉 数 雄 信	
八重山	石垣市立名蔵中学校	當 銘 武 志	記録

2 グループ

国 頭	大宜味村立大宜味中学校	宮 城 研 治	司会
中 頭	宜野湾市立宜野湾中学校	宮 里 里加子	
那 覇	那覇市立石嶺中学校	馬 上 晃	
島 尻	南風原町立南星中学校	與那嶺 律 子	記録
八重山	石垣市立崎枝中学校	下 地 和 美	

3 グループ

中 頭	西原町立西原中学校	松 田 庄一郎	
那 覇	久米島町立久米島西中学校	島 田 毅	記録
島 尻	座間味村立慶留間中学校	大 田 恵	
八重山	石垣市立川平中学校	大 濱 用四郎	司会

4 グループ

国 頭	伊平屋村立伊平屋中学校	松 本 優一郎	記録
中 頭	西原町立西原東中学校	松 尾 望	
宮 古	宮古島市立久松中学校	下 地 直 樹	司会
八重山	竹富町立船浮中学校	宮 良 三貴子	

5 グループ

中 頭	宜野湾市立嘉数中学校	仲 程 正	
那 覇	那覇市立首里中学校	島 袋 勝 範	
島 尻	糸満市立糸満中学校	平 良 真 也	司会
宮 古	宮古島市立下地中学校	崎 山 用 彰	記録

第4分科会 (24名)

第4分科会 島尻	南城市立知念中学校	吉 田 順 太	司会
	八重瀬町立具志頭中学校	稲 福 政 彦	提案
	糸満市立三和中学校	仲 程 俊 浩	記録
	八重瀬町立東風平中学校	平 仲 健	記録
	南城市立大里中学校	足 立 克 枝	記録

1 グループ

中 頭	読谷村立読谷中学校	後 藤 直 樹	記録
那 覇	那覇市立小禄中学校	松茂良 尚 哉	司会
島 尻	南城市立大里中学校	足 立 克 枝	
宮 古	宮古島市立池間中学校	平 良 吉 嗣	
八重山	竹富町立船浦中学校	入嵩西 清 幸	

2 グループ

国 頭	東村立東中学校	知 花 淳 次	司会
中 頭	読谷村立古堅中学校	糸 数 昌	
那 覇	那覇市立鏡原中学校	望 月 雄 紀	記録
島 尻	糸満市立三和中学校	仲 程 俊 浩	
宮 古	宮古島市立西辺中学校	与那覇 周 作	

3 グループ

国 頭	本部町立上本部学園	天 久 孝 雄	
中 頭	嘉手納町立嘉手納中学校	玉 城 健 一	司会
那 覇	那覇市立金城中学校	仲 間 健	
島 尻	八重瀬町立具志頭中学校	稲 福 政 彦	
八重山	竹富町立大原中学校	大 嶺 千 秋	記録

4 グループ

中 頭	恩納村立うんな中学校	比 嘉 利 博	
中 頭	北谷町立桑江中学校	大 嶺 徹	記録
那 覇	北大東村立北大東中学校	幸 地 巧	
島 尻	南城市立知念中学校	吉 田 順 太	
八重山	竹富町立波照間中学校	阿 利 正 則	司会

5 グループ

国 頭	名護市立久辺中学校	永 野 正 也	記録
中 頭	北谷町立北谷中学校	上 原 靖	
那 覇	南大東村立南大東中学校	根路銘 国 太	司会
島 尻	八重瀬町立東風平中学校	平 仲 健	

第5分科会 (21名)

第5分科会 国頭	名護市立大宮中学校	佐藤 繁	司会
	本部町立伊豆味中学校	伊波 勉	提案
	国頭村立国頭中学校	具志堅 勝 司	記録

第6分科会 (21名)

第6分科会 宮古	宮古島市立城東中学校	新崎 慶	司会
	宮古島市立伊良部島中学校	佐久本 聡	提案
	久米島町立球美中学校	又吉 史 晃	記録

1 グループ

国頭	本部町立伊豆味中学校	伊波 勉	
中頭	うるま市立伊波中学校	照屋 武	
那覇	那覇市立松城中学校	黒島 佐和子	司会
島尻	糸満市立高嶺中学校	比嘉 正 樹	記録
八重山	竹富町立鳩間中学校	三浦 和 博	

1 グループ

国頭	本部町立本部中学校	根路銘 国 哉	
中頭	沖縄市立安慶田中学校	與那嶺 正	
那覇	那覇市立上山中学校	當間 五 弥	司会
島尻	渡名喜村立渡名喜中学校	上原 惠 二	
八重山	石垣市立久部良中学校	手登根 広 幸	記録

2 グループ

国頭	国頭村立国頭中学校	具志堅 勝 司	
中頭	うるま市立石川中学校	金城 かなえ	
那覇	那覇市立松島中学校	大田 守 利	記録
宮古	宮古島市立狩俣中学校	松本 尚	司会

2 グループ

国頭	名護市立東江中学校	比嘉 智 広	司会
中頭	沖縄市立美東中学校	宮城 守	記録
那覇	那覇市立神原中学校	名嘉原 安 志	
島尻	粟国村立粟国中学校	大嶺 拡	

3 グループ

国頭	名護市立大宮中学校	佐藤 繁	
中頭	うるま市立具志川東中学校	仲村 正 樹	
島尻	糸満市立潮平中学校	玉寄 兼 明	司会
宮古	多良間村立多良間中学校	安田 一 博	記録

3 グループ

国頭	名護市立屋我地ひるぎ学園	比嘉 幹 男	記録
中頭	沖縄市立宮里中学校	金城 均	司会
宮古	宮古島市立伊良部島中学校	佐久本 聡	
八重山	石垣市立白保中学校	仲地 みゆき	

4 グループ

中頭	うるま市立あげな中学校	新垣 和 哉	記録
那覇	那覇市立安岡中学校	平 良 一	
島尻	糸満市立兼城中学校	大城 圭	
八重山	与那国町立与那国中学校	西原 琢 哉	司会

4 グループ

国頭	金武町立金武中学校	千葉 康 成	
中頭	沖縄市立沖縄東中学校	宮城 秀 輝	記録
島尻	豊見城市立長嶺中学校	新崎 峰 子	司会
宮古	宮古島市立城東中学校	新崎 慶	

5 グループ

中頭	うるま市立具志川中学校	伊波 努	司会
那覇	那覇市立真和志中学校	森山 涼 子	
島尻	座間味村立阿嘉中学校	神里 吉 竹	
八重山	石垣市立富野中学校	伊舎堂 用 右	記録

5 グループ

中頭	沖縄市立美里中学校	與世原 朝 史	
那覇	久米島町立球美中学校	又吉 史 晃	
島尻	南風原町立南風原中学校	城間 優	記録
八重山	石垣市立伊原間中学校	高原 直 樹	司会

24 「シンポジウム」「記念講演」テーマ一覧

年 度	シ ン ポ ジ ウ ム	記 念 講 演
昭和60年度 島 尻 大 会	「学校教育に期待すること」 コーディネーター 儀間朝善 (県学校指導主事) 提 言 者 山里孝子 (元豊見城中PTA副会長) 金城弘征 (大宝証券社長) 石川清治 (琉球大学教授)	「沖縄における国際交流と沖縄国際 センターの役割」 沖縄国際センター所長 小 澤 大 二
昭和61年度 小 学 校 単 独 開 催 (全九中沖縄大会のため)	「学校教育に望むこと」 コーディネーター 新垣清徳 (義務教育課指導主事) 提 言 者 内田忠平 (国立沖縄青年の家所長) 宮城 豊 (県経営者協会副会長) 高良ミチ子 (前那覇市PTA連合会副会長)	「野外活動から学ぶもの」 琉球大学名誉教授 池 原 貞 雄
昭和62年度 中 頭 大 会	「今 学校教育に望むこと」 コーディネーター 大樹敏彦 (義務教育課長補佐) 提 言 者 島袋 哲 (琉球大学教授) 稲嶺恵一 (琉球石友株式会社社長) 島袋美佐子 (沖縄市社会教育委員)	「那覇 ワシントン ロンドン」 NHK沖縄放送局長 小八重 順一郎
昭和63年度 国 頭 大 会	「学力向上について考える」 コーディネーター 金城龍生 (義務教育課課長補佐) 提 言 者 屋田直勝 (沖縄県PTA連合会長) 玉城勝郎 (義務教育課主任指導主事) 仲田善明 (本部小学校長)	「人間の成長について」 琉球銀行経営相談所主任調査役 吉 茂
平成元年度 宮 古 大 会	な し	「宮古の将来を展望する」 平良市役所企画室長 砂 川 玄 徳
平成2年度 島 尻 大 会	「学力向上対策の現状と課題」 コーディネーター 玉城勝郎 (義務教育課副参事) 提 言 者 久手堅憲仁 (高嶺中学校長) 仲田典爾 (義務教育課課長補佐) 大城恵子 (豊見城村中央公民館長)	「21世紀に向けての人づくりの協力」 沖縄国際センター所長 田 口 定 則
平成3年度 中 頭 大 会	「生涯学習とこれからの学校教育」 コーディネーター 知念清雄 (社会教育課補佐) 提 言 者 井上講四 (琉大助教授) 幸地清祐 (義務教育課長) 真玉橋均 (県P代表)	「沖縄人の意識構造について」 琉球大学教授 東 江 平 之
平成4年度 小 学 校 単 独 開 催 (全日中沖縄大会のため)	「国際化時代と沖縄の教育」 コーディネーター 比嘉信勝 (義務教育課主任指導主事) 提 言 者 宜保榮次郎 (県立博物館館長) 宮城弘岩 (県工業連合会副会長) 玉城勝郎 (大宮小学校長)	「教育の国際化を考える」 放送大学沖縄ビデオ学習センター長 元 琉球大学学長 東 江 康 治
平成5年度 国 頭 大 会 中 学 校 単 独 開 催 (全連小沖縄大会のため)	「国際化時代と沖縄の教育」 コーディネーター 仲西昌秀 (義務教育課副参事) 提 言 者 島本 巖 (前沖縄県立図書館長) 當間一朗 (沖縄県立図書館資料編集室主幹) 奥平 一 (浦添市立沢岬小学校)	「新時代に求められる人間像」 琉球大学教授 比 嘉 照 夫
平成6年度 八重山大会	「郷土文化と学校教育」 コーディネーター 下地節子 (義務教育課副参事) 提 言 者 崎山 直 (石垣市史誌編集委員) 石垣博幸 (市民会館長) 山内盛春 (久茂地小学校長)	「沖縄県経済の展望と人づくり」 沖縄電力取締役副社長 仲井真 弘 多
平成7年度 那 覇 大 会	「思いやりとひろい心をもつ人間の育成」 コーディネーター 比嘉裕起 (義務教育課長補佐) 提 言 者 渡久地政吉 (那覇市立真地小学校長) 玉城朋彦 (琉球放送アナウンサー) 鈴木和雄 (那覇少年鑑別所長)	「国際化時代における小・中学校の 在り方」 国際協力事業団企画部長 小野田 展 丈
平成8年度 島 尻 大 会	「21世紀をたくましく『生きる力』の育成」 コーディネーター 伊佐常正 (那覇市教委学務課長) 提 言 者 浦崎修子 (沖縄県人事委員会委員) 新里里春 (琉球大学教育学部教授) 宮城弘岩 (ひろいわ学校教授)	「人間として生きる力を育む」 —学校経営の改善— 財団法人 教育調査研究所理事長 (財)教科書研究センター副理事長 奥 田 眞 丈

年 度	シ ン ポ ジ ウ ム	記 念 講 演
平成9年度 中 頭 大会	「国際化時代に期待される人材の育成」 コーディネーター 提 言 者 金城三和 (義務教育課副参事) 黒島義茂 (拓南キャピタル代表取締役社長) 仲地 勇 (伊良波中学校長) 仲地 清 (名桜大学国際学部助教授)	「琉球・アジア交流史とその教訓」 琉球大学教授 高 良 倉 吉
平成10年度 国 頭 大会	「これからの環境教育」 コーディネーター 提 言 者 比嘉信勝 (義務教育課副参事兼課長補佐) 當間秀樹 (見文化環境部廃棄物対策) 友利哲夫 (元高校教諭) 大森 保 (琉球大学理学部教授)	「マルチメディアにおける現状について」 NTT沖縄支店副支店長 仲 本 栄 章
平成11年度 那 覇 大会 中学校単独 (九小沖縄大会のため)	「完全学校週5日制とこれからの中学校教育」 コーディネーター 提 言 者 比嘉裕起 (義務教育課副参事) 遠藤庄治 (沖縄国際大学文学部教授) 幸喜徳子 (沖縄石油ガス株式会社) 高嶺朝勇 (県教育庁生涯学習振興課長)	「中学校教育の明日」 全日本中学校長会会長 安 齋 省 一
平成12年度 島 尻 大会	「21世紀を拓く学校教育の展望」 コーディネーター 提 言 者 古波蔵肇 (県教育庁義務教育課副参事) 芳澤 毅 (琉球大学法文学部社会学科) 教授・教育社会学 佐々木豊 (沖縄国際センター所長) 知名洋二 (沖縄県経営者協会会長)	「新しい時代が求める人材育成」 日本文化経済学院 理 事 加賀美 正 明
平成13年度 中 頭 大会 小学校単独 (全九中沖縄大会のため)	「基礎・基本の習得と個性を生かす教育」 コーディネーター 提 言 者 諸見里稔 (沖縄県教育庁義務教育課副参事) 又吉助好 (沖縄市教育委員会教育委員長) 高安正勝 (ベンチャー高安南代表取締役) 大嶺實清 (沖縄県立芸術大学元教授・陶芸家)	「21世紀・新しい時代の教育の展望」 嘉手納町教育長 伊 波 勝 雄
平成14年度 国 頭 大会	「生きる力」をはぐくむ学びの創造 コーディネーター 提 言 者 上原敏彦 (沖縄県教育庁義務教育課課長補佐) 津留健二 (沖縄女子短期大学非常勤講師) 照屋義実 (株照正組代表取締役社長) 島袋正敏 (名護市教育委員会教育次長)	「生物学から覗いた文化現象」 生物資源利用研究所 所長 根路銘 国 昭
平成15年度 那 覇 大会	「組織マネジメントと校長の指導性」 コーディネーター 提 言 者 安田栄蔵 (今帰仁小学校校長) 金城三和 (前沖縄県教育庁那覇教育事務所長) 亀川 爵 (前県立高校校長 教育懇話会主幹)	「海外ウチナーンチュの現況とウチナーの心」 沖縄テレビ放送報道制作局長 前 原 信 一
平成16年度 島 尻 大会	「今求められる校長の指導性」 コーディネーター 提 言 者 長嶺明浩 (小禄中学校校長) 稲葉律子 (与那原町教育相談員) 照屋義実 (株照正組 代表取締役社長) 宮城能鳳 (沖縄県立芸術大学客員教授) 大城誠一 (西原町与那城汗っかき会世話人)	「IT社会の進展と沖縄」 国際電子ビジネス専門学校 校長 稲 垣 純 一
平成17年度 中 頭 大会	「教職員の資質向上と校長の指導性」 ～教職員評価システムを通して～ コーディネーター 提 言 者 山田 稔 (宮里小学校校長) 富村用助 (文進印刷株式会社 常務取締役) 上門清春 (沖縄大学客員教授) 吉本 勝 (仲泊小中学校校長)	「モノ作りの環境」 山 田 真 萬 (読谷山窯)
平成18年度 国 頭 大会	「特別支援教育の現状と今後のあり方」 コーディネーター 提 言 者 大城政之 (県立総合教育センター特殊教育課指導主事) 真謝 孝 (県立学校教育課特殊教育室主任指導主事) 識名節子 (たかえすクリニック 臨床心理士) 多和田稔 (宜野湾市立大謝名小学校校長)	「美ら海の子ら」 内 田 詮 三 (沖縄美ら海水族館 館長)
平成19年度 那 覇 大会 小学校単独 (全九中沖縄大会のため)	「保護者や地域に応える学校経営の在り方」 ～学校評価ガイドラインに基づいた学校経営～ コーディネーター 提 言 者 平良嘉男 (浦添市立内間小学校校長) 大城 章 (嘉手納町教育委員会学校教育課長) 長濱ミツエ (嘉手納町立嘉手納小学校) 外間香善 (前沖縄県小学校長会会長)	「ジョイント～東京と沖縄をつなぐ」 尾 関 茂 雄 (メンズセレクトショップ (WEB) Zeel ラウンジダイニングバー「西麻布 Birth」社長)
平成20年度 那 覇 大会 中学校単独 (九小協沖縄大会のため)	「保護者や地域の信頼に応える学校経営のあり方」 ～学校評価ガイドラインに基づいた学校経営～ コーディネーター 提 言 者 川上啓一 (宜野湾市教育委員会学校教育部長) 大城 章 (嘉手納町教育委員会学校教育課長) 大城茂一 (嘉手納町立嘉手納中学校長) 久保田暁 (学校評価委員 (文部科学省)・元県校長会副会長)	「琉球歴史の謎とロマン」 亀 島 靖 (NPO沖縄芸術観光人材育成協会 理事長、浦添市教育委員会教育委員)

年 度	シ ン ポ ジ ウ ム	記 念 講 演
平成21年度 島 尻 大 会	「子どもたちの夢と希望をはぐくみ、保護者や地域の信頼に応える学校経営」 ～学習指導要領移行期の教育課程編成の工夫と学力向上対策～ コーディネーター 上地幸市（那覇市立古蔵中学校） 提 言 者 屋比久守（県教育長義務教育課主任指導主事） 玉城きみ子（那覇市立松川小学校） 神元 勲（北谷町立桑江中学校）	「出会いは宝」 株式会社仲善 代表取締役 仲 本 勝 男
平成22年度 国 頭 大 会	な し	「私が出会ったやんばるの生き物たち」 本部町立博物館嘱託職員 本部町カルスト公園検討委員会委員長 友 利 哲 夫
平成23年度 中 頭 大 会	な し	「みんなに無限の可能性がある」 筑波大学名誉教授 国際科学振興財団バイオ研究所所長 全日本家庭教育研究会総裁 村 上 和 雄
平成24年度 那 覇 大 会	「適正な部活動の在り方」 コーディネーター 上地幸市（沖縄大学教授） 提 言 者 神谷良昌（県スポーツ少年団指導者協議会運営委員） 大山 正（那覇地区PTA連合会会長） 具志堅侃（県教育委員会保健体育課課長） 石川正信（うるま市立具志川東中学校長）	「人材育成と学校におけるOJT」 福岡県教育センター所長 清 田 嘉 治
平成25年度 島 尻 大 会	な し	「琉球に上陸したジョン万次郎 一万次郎から学ぶバイオニア精神と 使命感」 糸満市教育委員会学校教育課 参事兼課長 神 谷 良 昌
平成26年度 国 頭 大 会 小学校単独大会 (全九中沖縄大会のため)	な し	「いん石研究者への夢を追って」 神戸大学名誉教授 中 村 昇
平成27年度 国 頭 大 会 中学校単独大会 (九小協沖縄大会のため)	な し	「地域づくりのキーワードは夢・戦 略・信念・情熱」 沖縄県地域づくりネットワーク副会長 山 城 定 雄
平成28年度 中 頭 大 会	な し	「子どもの心が開くとき」 前岩国市教育委員会教育委員長 佐 古 利 南
平成29年度 那 覇 大 会	な し	「『特別の教科 道徳』の先行実施と これからの学校教育」 東京学芸大学大学院教育学研究科教授 永 田 繁 雄
平成30年度 島 尻 大 会	な し	「学習指導要領移行期における 校長の役割」 福岡教育大学教職大学院教授 脇 田 哲 郎
令和元年度 国 頭 大 会	な し	「社会に開かれた教育課程」 「学校運営協議会・コミュニティ・スクールの実践」 広島県府中市立明郷学園学校運営協議会会長 立 石 克 昭 広島県府中市教育委員会学校教育課主幹 宮 田 幸 治 コーディネーター 名護市教育委員会 学校教育課 学校支援係長 渡 口 裕

年 度	シ ン ポ ジ ウ ム	記 念 講 演
令和2年度 中 頭 大 会 (中止)誌上発表とする	な し	な し
令和3年度 那 覇 大 会 小学校単独大会 (中止)誌上発表とする	な し	な し
令和4年度 島 尻 大 会 (中止)誌上発表とする	な し	「国際的な視点から考える日本の教育」 文部科学省国際統括官付国際戦略 企画官国立教育政策研究所フェロー、 東京学芸大学客員教授 白 井 俊
令和5年度 国 頭 大 会	な し	「学力向上に向けた教師エージェンシー の在り方」 国立教育政策研究所 総括研究官 千々布 敏 弥
令和6年度 中 頭 大 会 中学校単独大会 (九小協沖縄大会のため)	な し	「1人1台端末＋クラウド環境の日常的 な活用による主体的な学びの実現と校 務・研修改善」 教育DX推進専門官 文部科学省:学校DX戦略アドバイザー 水 谷 年 孝 県立学校教育課教育DX推進室主任指導主事 文部科学省:学校DX戦略アドバイザー 大 城 智 紀
令和7年度 那 覇 大 会	な し	「遺骨収集の現場から見える沖縄戦」 沖縄戦の遺骨収集ボランティア 「ガマフヤー」代表 具志堅 隆 松

分科会提案事項

小 学 校

第1分科会	先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進……………	47
第2分科会	学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに人事評価を 教職員の資質・能力の向上と業務改善に生かす学校経営の推進……………	51
第3分科会	知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント……………	55
第4分科会	豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント……………	59
第5分科会	学校の教育力を向上させる研究・研修の推進 ～教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実～……………	63
第6分科会	これからの学校を担うリーダーの育成 ～学校教育への確かな展望をもち、行動できるミドルリーダーの育成～ ……	67
第7分科会	命を守る安全・防災教育の推進並びに様々な危機への対応……………	71
第8分科会	社会形成能力を育む教育の推進 ～自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進～……………	75
第9分科会	自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の推進並びに 家庭・地域等との連携……………	79
第10分科会	新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、 校長の理念と指導性……………	83

第1分科会

研究主題

先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

提 案 者：堤 正 代（諸見小学校）
 ”：赤 嶺 絹 代（島袋小学校）
 司 会 者：知 念 英 也（山内小学校）
 記 録 者：上 原 秀 樹（コザ小学校）
 ”：宮 平 安 智（中の町小学校）

1 はじめに

本地区5校は、沖縄市の中心部に位置し、大型商業施設や陸上競技場、大型アリーナ施設等が立地している。また、学校周辺は商店街や繁華街を形成し、米軍施設も近く、外国の人々も居住している。本分科会では、「先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進」の主題のもと、本地区5校の特色を生かし、未来を見据えた教育の方向性を踏まえ、各校の実践とその成果と課題を共有しながら研究に取り組むこととした。

2 主題設定の理由

現代社会は、AI技術の急速な進歩や高度情報化により、瞬時に情報が共有され、社会生活に様々な影響を与えている。また、グローバル化、少子高齢化、環境問題等、変化の激しい社会であり、様々な課題を抱えている。これらの課題に向き合い、学校経営を推進していくためには、未来を見据え、今後の教育の方向性を踏まえた学校経営ビジョンを構築することが重要になる。学校経営ビジョンにおいて、何を重視しなくてはならないのか、重点事項の判断が校長に求められる。中央教育審議会答申（令和3年1月26日）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』では、「令和の日本型学校教育」はこれまでの学校教育を継承し、今後の改革の方向性として「(1) 学校教育の質と多様性、包摂性を高め、教育の機会均等を実現する、(2) 連携・分担による学校マネジメントを実現する、(3) これまでの実践とICTとの最適な組合せを実現する」ことを方向性として示している。これを踏まえ、本分科会では、学校や地域の特色を生かした実践や学校経営ビジョンの策定を通して、先見性のある創意ある学校経営が実現できると仮説を立て、研究を進めた。

3 研究の視点

校長の役割は教育の方向性を見極め、明確な学校経営ビジョンを描き、社会の激しい変化に応じて、今どのような教育をどのように進めていけばよいかを洞察し、学校経営を構築することである。このような視点を踏まえ、以下の2点を研究の視点とした。

- (1) 先見性のある経営ビジョンの策定と共有
- (2) 創意ある学校経営の推進と充実

4 研究の実際

(1) 沖縄市立中の町小学校の実践

学校経営ビジョンは、校長が学校づくりの目標像や展望を示すものであり、未来を拓く子ども達のために学校をどのような学びの場にしていくかを提示するものである。校長の先見性、リーダー性等を生かし、構想力を発揮するために、意図的・計画的・組織的に組み立てる必要がある。そこで、教職員に明確な学校経営ビジョンを示し、ビジョンについての意見や要望等を議論し、必要に応じて精査を図り、再構築する体制づくりが重要であるのではないかと考えた。

① 先見性のある経営ビジョンの策定と共有

組織を積極的に運営していくためには、明確な学校経営ビジョンを丁寧に具体的に提示し、全教職員の共通理解のもと、同じ目標に向かって教育活動を推進することが重要である。

ア グランドデザインの取組事項を明確にする。

- ・校長だより、学校だより、学校HP、学校メール、職員会議等で校長方針を発信し、学校経営ビジョンの共有化を図る。

イ PDCAサイクルを重視し、改善点を示す。

- ・学校評価を活用し、実践内容の効果や改善点を明確にする。

ウ 一人一人の教職員が組織的な学校運営を行う。

- ・教職員の役割分担を明確にし、進捗状況を定期的に報告・共有しながら成果、改善に繋げる。

② 創意ある学校経営の推進と充実

校内の課題意識を共有し、機動的な組織を作り上げるため、3つのプロジェクトチームを編成した。教職員は3つのプロジェクトのいずれかの部会メンバーとなる校内体制を築き、教職員一人一人が組織の一員である自覚をもち、主体的かつ協働的に教育活動を推進できるよう組織力を高めていく。各プロジェクト部会においてPDCAサイクルの点検と見直しを確実にを行い、学校運営を推進していくことが不可欠である。

ア 確かな学力の向上推進部

- ・校内研修と学力向上推進の連携、ICTを効果的に活用した授業改善、レインボー7の充実

イ 豊かな心の育成推進部

- ・生徒指導の4つのポイントを踏まえた教育実践、道徳教育、キャリア教育、安全指導、児童理解部会、いじめ防止会議の実施

ウ 健やかな体の育成推進部

- ・食育、生活リズムチェック、体力測定、泳力調査、大縄グランプリの実施

③ 地域連携

地域から信頼される学校づくり、社会的な教育基盤の構築等の観点から、「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、学校と地域はパートナーとして相互に連携・協働していくことが重要である。

ア 学校運営協議会での積極的な協議

イ 地域自治会との学習交流

ウ PTA祭りでの地域住民、保護者交流

④ 校長の関わり

ア 明確でわかりやすい学校経営ビジョンの策定

イ めざす児童像、具体的実践事項等に対する教職員への学校運営参画及び意識づけ

ウ 校務分掌の工夫による協働体制の構築

エ 地域連携による持続可能な学校運営の推進

(2) 沖縄市立コザ小学校の実践

本校校区は、エイサーや三線等の豊かな伝統文化を有する地区であり、沖縄市の中心市街地でもある。地域の方々は本校に厚い信頼を寄せている。このような地域の方々の思いを今後も大切にしたい。

① 先見性のある経営ビジョンの策定と共有

ア 教育目標、スクールプラン、学年目標の連鎖

本校児童の有する力の伸長のために、次の時代を見据えた取り組みが必要であると考え。本校では、学校経営方針等を踏まえたグランドデザインを策定し、年度末及び年度当初にこれを全職員で共有している。今年度はこれと合わせて、市教委の助言を受けながらスクールプランを全職員で議論して策定した。その上で、各学年で学年目標を設定し、今年度の本校教育実践の柱としている。

イ 学校だより及び校長講話の活用

学校だよりを定期的に発行し、学校の取り組みを伝えている。特に注力しているのは、学力向上推進に係る情報提供と共有化である。例えば、全国学力調査等の出題上の特色について保護者に提示し、家庭での学習上の協働・連携を図る手立てとなるよう試みた。また、各学期に数回、校長講話を実施している。校長として「世界一楽しい学校」という目標を年度当初に提示し、児童が、どのように行動すれば良いか考えることを促した。これに対する児童からの意見を年度半ばに紹介し、共有化の機会とする。

② 創意ある学校経営の推進と充実

ア 地域との協働・連携の推進

地域との協働及び連携の取り組みとして、日々の交通安全指導、放課後三線教室での指導、飼育するヤギの餌の提供等多岐に渡る。また、自治会や保護者の方々のボランティアで、子ども食堂を実施し、子ども達の心の安定につながっている。

イ 会議の有効活用と校務のデジタル化

毎月1回の職員会議及び週1回の連絡会を実施している。短時間の取り組みとなるよう工夫している。具体的には、3者会（校長、教頭、教務）での事前調整、電子ファイルの作成と事前回覧、会議で最終確認という手順である。

ウ 誉めて認める教育の推進

小規模校ということで、常に、全職員による全児童への声かけを目標としている。その上で、勇気づけ教育を推進し、児童の心の安定を図る。

(3) 沖縄市立山内小学校の実践

本校は、PTAのみならず、各6部活動指導者保護者会をはじめ、各字自治会や青年会、老人会市体験学習施設（やまっち）と密に連携し、交通立哨や美化作業だけでなく、児童の居場所づくりや問題行動等の未然防止、情報共有など地域と共に歩んでいる開かれた学校である。また、本校卒業生が中心となり構成している建設業の「山里至誠隊」や「山内創業」のメンバーがこれまでも、校内の修繕・改修作業を無償で行ったり、山内中校区青年会が主催し、今年23年目を迎える夏祭り「風山祭」も今や地域の風物詩として定着している。

① 先見性のある経営ビジョンの策定と共有

本校では、学校経営方針等を明確にしたグランドデザインを策定し、昨年度末と新年度当初に全職員で共有し共通理解をした。昨年度の実態から、4つのめざす学校像「安全・安心で快適な学校」「子ども一人一人が楽しいと思える学校」「いじめや問題行動の未然防止、早期発見に努め、迅速な対応ができる学校」「保護者や地域と連携し、信頼され共に歩む開かれた学校」を掲げ、児童に対しても、校長だよりや校長講話等で話している。また、学校運営協議会や山内中ブロック協議会でもビジョンを共有化し、コミュニティースクールの機能を充実させ地域と開かれた学校づくりを推進している。

② 創意ある学校経営の推進と充実

教職員の多忙感を解消し、子ども達と向き合う時間を生み出す工夫に努めるために、働き方改革や校務の改善を図っている。内容については、こ

れまでの時数を見直して削減し、学期毎の2種類に分けた。また、職員の電話対応時間の設定や「スクペイ」での振り込みによる改善、PTA美化作業の平日実施を行っている。他にも小1プロブレムを防止し、順調な接続をするために「スタートカリキュラム」を導入したり、夏休み明けには、全学年とも「スロートタイム週間」を実施する。他にも、運動会の土曜日開催や学期・年度末事務処理週間の設定による時数削減を行う。

(4) 沖縄市立島袋小学校の実践

本校の学校教育目標は、「学び合い高め合い輝く島っ子」となっている。『笑顔で安心して過ごせる学校』を掲げ、学校教育目標を具現化できるよう、全職員でチーム学校として協働体制を図り、以下の取り組みを推進している。

① 先見性のある経営ビジョンの策定と共有

本校の実態として、児童は、素直で明るく、単学級（全児童131名）で、互いのことを認め合いながら過ごしている。保護者・地域は学校教育に関心が高く、期待も大きい。そこで、本校で特に大切にしたい事を校長講話や、学校だより、学校運営協議会等にて説明し、職員・児童・保護者・地域に共有している。令和7年度は、「思いやり」「続ける」をキーワードとし、学校教育活動全てにつながるよう意識している。さらに、小規模校の特性を生かした活動や関わりを大切に、教育活動を推進している。

② 創意ある学校経営の推進と充実

ア 日常的な観察と迅速な対応

- ・日頃から、管理職で分担して学級を回っている。主に、教頭は安全面、校長は授業や児童の様子と見方を分け、日常的に観察を行うようにしている。そうすることで、危機管理の面や児童の対応に迅速に動くことができると考える。

イ 教職員の業務時間の効率化

- ・「チーム学校」の視点から、新しく取り入れたい内容に関しては、校長から職員へICTを活用して意見を収集し、より良い内容へとブラッシュアップしている。
- ・教職員の授業準備等の時間確保のため週時程の見直しを行った（図1）。また、朝の児童玄関開錠を8時にすることで、授業等準備に余裕を持って過ごすことができています。さらに、定期的な会議にICTを効果的に活用し、時間短縮を行い児童の話やコミュニケーションの時間を大切にしている。

朝の時間	月・火・金	水・木
	8:00児童玄関オープン ▶ 8:25までに登校	8:00児童玄関オープン ▶ 8:25までに登校
	8:15▶8:25(朝の活動8:15▶8:25)	8:15▶8:25(朝の活動8:15▶8:25)
	朝の会8:30▶8:35	読書・読み聞かせ 朝の会 8:30▶8:45
1	8:40▶9:25	8:50▶9:35
2	9:35▶10:20	9:45▶10:30
3	10:35▶11:20	10:40▶11:25
4	11:30▶12:15	11:35▶12:20
給食	12:30▶12:50	12:35▶12:55
かたづけ・園みがき	12:50▶12:55	12:55▶13:00
清掃	ダイヤモンド清掃 12:55▶13:10	ノー清掃・かたづけ 13:00▶13:10
昼休み	13:10▶13:30	13:10▶13:30
5	13:35▶14:20	13:35▶14:20
6	14:30▶15:15	14:30▶15:15
	帰りの会 15:15▶15:25	帰りの会 15:15▶15:25

R7.4改正

図1 週時程

(5) 沖縄市立諸見小学校の実践

本校は令和7年度、文部科学省「リーディングDXスクール校（以降LDX）」および「生成AIパイロット校」指定の3年目を迎え、「児童主体の学び」を推進している。GIGAスクール構想の下、汎用的なソフトウェアとクラウド環境を最大限に活用し、児童の情報活用能力の育成を図るとともに、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、そして校務DXを推進することで、先見的な学校経営を推進している。

① 先見性のある経営ビジョンの策定と共有

本校は、「教育DXは20年後、30年後の社会の変化を見据えた国家の計である」との長期的な視点と、「子ども達が自ら学ぶ資質能力を育む」という明確なビジョンを掲げている。このビジョンは、校長より職員会議や週案コメント等、あらゆる場で繰り返し共有され、最新情報も適宜伝えられることで、教職員全体への浸透を図っている。このビジョンに基づき、行政・管理職・教師の役割を明確にした上で研修等を計画し、「育てたい資質・能力」に焦点を当て、3年先、5年先を見据えた持続可能な体制を検討している。学習定着状況の評価・分析と改善策の実施のため、RPDCAサイクルを確立し、ビジョン達成に向けた継続的な改善を推進している。（図2）

第2分科会

研究主題

学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営並びに人事評価を教職員の資質・能力の向上と業務改善に生かす学校経営の推進

提案者：磯部大輔（真喜良小学校）

司会者：真玉橋 真由美（石垣小学校）

記録者：與世山 操（大本小学校）

1 はじめに

学校教育を取り巻く環境が変容し、教職員への期待は増大の一途を辿っている。学校教育の成功は教職員一人一人の力量に大きく左右され、その資質・能力の向上は喫緊の課題である。教職員の資質・能力を高めるためには、個々の努力に任せるだけでなく、学校組織全体で多様な能力を引き出し、積極的に育成する人事・支援策が不可欠である。

本県教職員評価システムは、組織として教職員の意欲を支え、資質・能力向上と学校組織の活性化を図り、その評価を人事管理の基礎とする枠組みである。職務に必要な能力や評価基準を明確化し、個々の取組への適切な評価、指導、助言を行う。

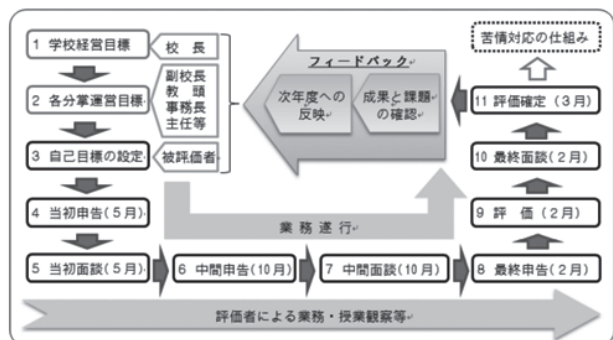


図1 沖縄県教職員評価システムの流れ

複雑化する教育課題に対応し、子どもたちの未来を拓く力を育むためには、教職員が意欲を高め、能力を最大限に発揮し、組織の一員としての役割を果たす資質・能力を育成する必要がある。校長は学校経営の責任者として、教職員の目標と進捗を的確に把握し、人事・処遇と連動させながら、計画的かつ継続的な人材育成のために人事評価システムを適切に運用することが重要である。

本研究はこのような視点に立ち、日本、そして本県の最南端に位置する八重山地区における活用事例、特に若手教員育成に焦点を当てる。八重山地区の現状と課題に対し、教職員評価システムがどのように活用されているのか、具体的な実践とその工夫を詳述し、成果と課題を整理する。その上で、人事評価を教職員の資質・能力向上と学校経営改善につなげる校長の役割と指導性について考察を深めるものである。

2 本県・本地区の現状と課題

本県では平成18年度に教職員評価制度が導入され、県立学校及び市町村立学校の全ての教職員を対象としている。このシステムは、教職員の資質・能力の向上、学校組織の活性化、人事管理の基礎となることを目的としている。

今回取り上げる八重山地区は、石垣島、竹富島、西表島、与那国島など多数の島々から構成されており、日本の最南端である沖縄県でも最南西端に位置するという地理的に隔絶された特殊な地域である。八重山地区の学校数は、小学校が21校、中学校が9校であり、このうち11校が小学校と中学校を併置した小中併置校である。教職員数は692人（本務596人、臨時的任用職員96人）であり、臨時的任用職員の割合が非常に高い。（※R7年4月現在）

八重山地区が抱える最も顕著な、そして教育実践に大きな影響を与える課題の一つは、4～7年経験の若手教員が地区内教職員全体の約4割を占めるという現状である。この背景には、本県独自の教員異動方針がある。本県では、初任者が正規採用後3年間勤務した後、2校目として離島校へ赴任することが一般的となっている。そのため、八重山地区には、県内の他地域から経験年数の少ない若手教員が多く赴任してくる構造になっているのである。

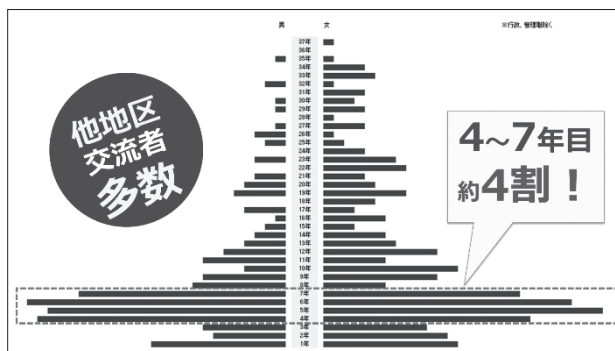


図2 八重山地区教諭（養護含む）勤務年数別グラフ

3年目以下の教員も合わせると、若手教員比率はさらに高くなり、八重山地区の教育における現状と課題を形成する上で極めて重要な要素である。若手教員が豊富であることは、学校組織に新しい活気と多様な視点をもたらす可能性を秘めているという強みがある。しかし一方で、特に石垣島以外の離島校においてはベテラン教職員

が少なく、若手教員の指導や育成を十分に担える体制が手薄になりがちであるという弱みも存在する。そのため、八重山地区においては、若手教員の指導力向上に向けた取組が他地区と比較して不可欠であり、教職員評価システムを単なる人事管理や業績評価のツールとしてではなく、若手教員を組織として計画的・継続的に「育てる」という視点で積極的に活用することが極めて重要となっている。

3 具体的な実践

八重山地区では、若手教員の多さや離島校の状況といった地域特有の現状を踏まえ、教職員評価システムを「育てる」ツールとして活用する実践に取り組んでいる。システムは、年間を通じて自己申告、面談、評価というプロセスで進行する。この各段階における校長の役割と工夫が、若手教員の育成には特に重要となる。

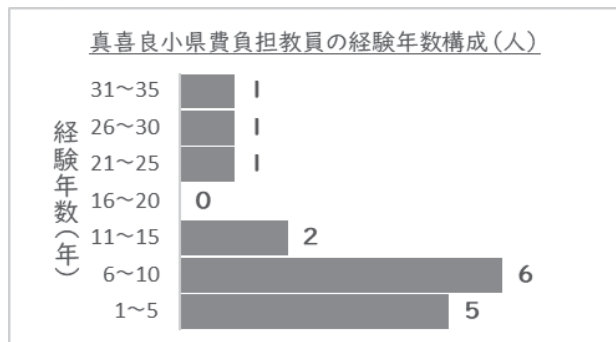


図3 真喜良小学校の経験年数構成

(1) 自己申告と目標設定支援

教職員は年度当初（5月頃）に「育成・評価記録書Ⅰ（申告書）」を用いて、学校経営目標や自身の役割を踏まえた年間の目標（役割達成評価）を設定し申告する。その際、自己目標の上位目標が学校経営目標となるため、校長は在籍する全職種の者が上位目標として設定できるような学校経営目標を設ける必要がある。

この目標設定の段階で、校長（最終評価者）及び教頭（一次評価者）は、被評価者が設定した自己目標が学校経営目標と整合しているかを確認する。特に若手教員は目標設定に慣れていない場合が多いため、努力すれば十分に達成可能で、できる限り具体的であるかなど適切な目標設定を支援する。必要に応じて具体的な資料提供を求め、実現可能で育成につながる目標設定となるよう、個々の資質能力や適性、キャリアステージを踏まえて助言を行う。

資質能力評価については、年度当初に特別な手続きは必要ないが、自身の職種に求められる評価項目を確認しておくことが大切であり、この点についても評価者は面談等の機会に促している。

(2) 面談を通じた育成支援

教職員評価システムにおいて、面談は最も重要な要素の一つである。被評価者と評価者との間で、年度間に原則3回（当初、中間、最終）、それぞれ15～20分程度実施されることが基本である。

① 当初面談（5月～6月頃）

被評価者が申告した目標や手だてについて、評価者（校長、教頭）に説明する。評価者は、目標内容や難易度について意見交換を行い、認識の共有を図りながら目標を確定する。若手教員の場合、この面談は目標設定の支援だけでなく、期待する役割や育成の方向性を伝える重要な機会となる。評価者は、話しやすい雰囲気を作り、被評価者の話をよく聞き、双方で十分に意見交換を行うことが求められる。さらに、具体的な助言を通じて目標達成に向けた意識を高めている。

令和 ● 年度育成・評価記録書Ⅰ（申告書）【教諭】

所属	石垣市立A小学校	通番	番号	氏名	八重山 海
課程・部	課程	部	HR担任・校務分掌(係)等		
担当学年・科・教科(科目)等●年■組					
1. 役割達成評価					
項目	当初申告				
	今年度の目標	目標達成のための手立て			
学習指導	[上位目標] 自らの学びに能動的にかかわる「自律した学習者」の育成	①「問い」を持ち、主体的に学ぶ授業改善と未定着部分の確実な習得 ・学習全体の課題と個人の課題を明確にする手立てを打ち、学習の主体を児童においた授業づくりを行う。 ②自律して学ぶ「自学自習力」の育成 ・「学びのふり返り」の時間を活用し、「見通す」→「実践する」→「ふり返る」のサイクルを身につけさせる。 ③ICTの活用等による「個別最適な学び」の推進 ・個別の課題を見取りやデータで確認し、児童自身が学びを選択し、自己調整できるよう支援を行う。			
	[自己目標] ICTを活用し、個別最適な学びを目指し、授業改善を行う。能動的にかかわる学習者の育成に向け、課題をもて授業づくりを行う。				
学級経営・校務分掌	[上位目標] 幸福・自分とみんなの幸せのために行動する子の育成	①学校教育目標と運動した学年目標設定及び達成への具体的方策 ・聴く心を大切に、共感できる時間や安心してできる環境を教室につくよう意識的に声かけを行う。 ②6つの承認の日常化 ・他者理解を含み、賞賛する活動を重視して自己有用感が育つようリフレーミングを取り入れていく。 ③担当分掌をアップデートする工夫 ・現状の提案をよく理解し、過去の反省を受け、新たな価値観をもとに運営できるようにする。			
	[自己目標] 児童の変化に気づき、声かけや見取りを行い、児童同士が安心感のある学校づくりに努める。体育的・学校行事に携わることで児童が主体となる学校経営を目指す。				
研究・研修・その他	[上位目標] 自分自身の資質向上と服務規律の徹底	①A小職員のルールを実践 ・毎朝確認し、重点的に行う事項を決めて取り組む。 ②自分ごととして研修に取り組む工夫 ・自分の考えを表現を積極的に行い、インプットで終わらない研修を意識する。また、自身で受講した研修内容をまとめてアウトプットする機会を設ける。 ③服務規律を徹底する方策 ・自らの職責を理解し、その遵守に努める。			
	[自己目標] 校内研修での学びを実践し、内省することで自身の自己研鑽を常に行う。				
地域連携	[上位目標] 目指す資質・能力や方策の共有と相互に支え合う互恵的関係の構築	①校区内連携、協働・小連携充実 ・校区内の職員との情報交換を積極的に行い、中学卒業というゴールを見据えた系統性ある指導を行う。 ②PTA活動活性化の方策 ・PTA活動への参加をできる限り行うよう努力する。 ③地域資源を活かす方策 ・総合的な学習の時間を核とし、教科横断的に海をテーマにした学習を展開し、地域の方との活動を積極的に取り入れる。			
	[自己目標] 行事等を行う際、PTAや地域の方と連携を図り、よりよい活動になるように尽力する。地域の村である海をテーマにした学習を展開することで地域資源を生かす。				

図4 Y教諭（5年目）の当初申告

② 中間申告と中間面談（10月頃）

被評価者は、中間申告として、目標への進捗状況と職務遂行における能力の発揮状況を自己評価し申告する。評価者は、この申告内容を確認し、中間面談で進捗状況や能力発揮状況について被評価者と認識を共有する。八重山地区では、中間面談を重視し、特に若手教員の成長度合いや課題を早期に把握することに努めている。進捗が遅れている場合はその原因を共に確認し、軌道修正のための具体的な指導・助言を行う。また、資質能力の発揮状況についても、日頃の行動観察記録と自

己評価を照らし合わせながら確認し、更なる成長に向けた励ましや助言を行う。この面談は、評価のためだけでなく、被評価者のやる気を引き出し、困難な状況でも粘り強く取り組めるよう激励する機会でもある。具体的なアドバイスや励ましが、その後のモチベーション維持や資質向上に繋がるため、肯定的かつ建設的な対話を心がけている。

③ 最終申告と最終面談（2月頃）

最終申告では、年間の目標達成状況や能力の発揮状況、成果と課題について自己評価する。この自己評価に基づいて行われるのが最終面談であるが、八重山地区では、この最終面談において、評価者が最終評価に至った理由や根拠を具体的に、被評価者が納得できるよう十分に説明することを重視している。資質能力評価においては、職務遂行上の行動事実を判断材料として、評価項目ごとに示される行動や着眼点に照らし合わせて評価する。評価者は、日頃からの評価事実の収集（授業観察、被評価者とのコミュニケーション等）に努め、具体的なエピソードを交えながら被評価者の強みや課題を伝える。例えば、「〇〇の行事において、あなたは△△という行動をとった。これは□□という評価項目の着眼点に合致しており、大変評価できる」といった具体的なフィードバックを行うことで、被評価者は自身の評価結果をより深く理解し、納得感を高めることができる。また、本年度の成果と課題を確認し、次年度の目標設定や今後のキャリア形成、資質・能力向上に向けた具体的な取組について共に考える機会としている。「育成・評価記録書Ⅱ（評価書）」には、被評価者のスキルアップに向けた指導方針を具体的に記載する欄があり、これを活用して次年度に向けた育成計画を共有する。

(3) 評価結果の活用と透明性の確保

評価結果は、人事管理の基礎として活用されるが、教職員評価システムの公平性・透明性を確保するため、被評価者は評価に関する苦情を申し出ることができる仕組みが設けられている。評価者が日頃からコミュニケーションを通じて双方の疑問点や不満等を解消するよう努めること、そして評価結果の通知や苦情対応の仕組みがあることは、制度への信頼性を高める上で重要である。

八重山地区における若手教員育成の観点からは、これらのプロセスと結果を単に人事上の措置に結びつけるだけでなく、具体的な研修ニーズの把握やチーム学校としてのOJTの強化に積極的に活用することが重要である。例えば、評価面談で明らかになった課題に対して、校内でのメンター制度や研究授業を通じた支援をすることで、評価を「育てる」

ための具体的な行動へとつなげることができる。特に経験の浅い教員にとっては、評価結果とそれに基づく具体的な成長支援が連動していることが、職務意欲の向上に大きく寄与すると考えられる。校長は、評価結果を踏まえ、一人一人の資質・能力と意欲の向上に向けた指導方針を明確に持ち、被評価者のスキルアップにつながるよう具体的な助言を行う。

(4) 校長のリーダーシップ

これらの実践を効果的に進める上で、校長のリーダーシップは不可欠である。校長は、担当業務の一つであると認識し、主観的な判断基準ではなく、評価基準や行動・着眼点に基づいて評価を行うこと、そして日頃から教職員の職務行動を把握し、評価事実を収集することが求められる。

また、校長は評価者であると同時に、教職員全体の人材育成の責任者でもある。評価結果を個々の教職員の強み・弱みの把握につなげ、計画的・継続的に教員を育成する役割を担う。特に八重山地区のような若手教員が多い環境では、普段の授業参観で良い取組事例があれば、すぐに取り上げて紹介することも効果が大きい。校長は、教職員評価を通じて、職員間の相互理解を深め、建設的なコミュニケーションを促進、「チーム学校」としての連帯感を醸成するリーダーシップを発揮することが求められている。



図5 良い取組は校長だよりで全職員に紹介

4 成果と課題

(1) 成果

八重山地区の小学校において、教職員評価システムを「育てる」視点に立ち運用してきた結果、以下のような成果が見られる。

まず、若手教員一人一人が自己の目標を明確に設

定し、その達成に向けて計画的に取り組む主体性が向上している。目標設定や面談を通じたきめ細やかな指導・助言により、自身の強み・弱みを具体的に把握し、成長に向けた具体的な方向性を見出すことができている。特に、面談での努力や成果の承認、激励は、若手教員の職務意欲と自信を大きく向上させている。具体的な行動事実に基づく評価とフィードバックは評価結果に対する納得性を高め、自己評価と評価者評価のギャップを減らし、今後の成長に向けた課題を明確にする助けとなっている。

次に、教職員間のコミュニケーションが活性化し、学校組織全体の活性化が進んでいる。目標設定や面談のプロセスを通じて、教職員同士が自身の目標や業務内容について話し合う機会が増え、互いの役割や取組に対する理解が深まった。特に、学校経営目標と個々の目標のつながりを明確に共有できたことは、学校全体として共通の目標に向かって協働していく意識を高めている。若手教員が経験豊富な教員に相談しやすい雰囲気も醸成され、学校全体で若手教員を育てていこうという意識が強まっている。

さらに、業務改善への意識が高まり、具体的な取組にも繋がっている。目標達成に向けた手立ての検討や、中間・最終申告における振り返りを通じて自身の業務プロセスを見直し、効率化や質の向上に向けた工夫を行う教職員が増えている。面談での対話を通じて、業務上の課題を共有し、解決策を共に考えることが、学校全体の業務効率化や負担軽減にもつながっている。

これらの成果は、教職員一人一人の成長と学校組織全体の活力向上につながり、結果として子どもたちに対するより質の高い教育活動の展開につながっていると実感している。特に若手教員が自信を持って職務に取り組めるようになったことは、八重山地区の教育の未来にとって大きな希望である。

(2) 課題

一方で、人事評価システムをより効果的に運用し、人材育成と業務改善に繋げていくためには、いくつかの課題も存在している。

第一に、評価者の負担感である。小規模校や小中併置校が多い八重山地区では、校長や一次評価者が抱える業務が多岐にわたり、時間外の会合も多い現状がある。被評価者の数は少なくとも、一人一人に丁寧な面談を行い、評価の根拠となる具体的な事実を収集することは大きな負担となっている。限られた時間で質の高い面談を行い、評価の根拠を明確にするためには、評価者のスキル向上や研修、評価者間の情報交換の場がさらに充実する必要がある。

第二に、評価の客観性・公平性・納得性のさらなる向上である。評価基準に基づき、具体的な行動事

実に即して評価を行うよう努めているが、評価者の主観や評価エラーを完全に排除することは難しく、被評価者によっては評価結果に納得できない場合も生じうる。評価結果に対する苦情相談・処理の仕組みは存在するものの、その周知度や利用しやすい環境整備が課題である。評価者と被評価者の双方向のコミュニケーションをさらに密にし、日頃からの信頼関係構築が、評価に対する納得性を高める上で最も重要である。

第三に、評価結果の人材育成や業務改善へのより効果的な連携である。評価結果を単に人事管理の資料として利用するだけでなく、個々の教職員の資質・能力開発にどうつなげていくかが重要である。令和7年度から本格的に導入される「全国教員プラットフォーム（Plant）」は、キャリアを振り返る貴重な記録であり、教職員の学び・育ちの実感と自己肯定感を高めたい。また、評価で明らかになった学校全体の課題を、学校評価や働き方改革の取組にどうフィードバックし、具体的な改善策につなげていくか、そのシステムやプロセスの洗練が求められ、また、させていく必要がある。

これらの課題を克服するためには、評価者である校長自身が、人事評価制度の目的と意義を深く理解し、「育てる」という強い意識を持って運用にあたることが不可欠である。また、学校組織全体として人事評価を人材育成と業務改善の機会として捉え、教職員一人一人が主体的に関わる環境を作ることが重要である。

結びに、八重山地区の小中学校では、教職員一人一人の成長を支援し、その力を学校教育の充実に結びつけていくためのツールとして今後も教職員評価システムを積極的に活用していく。子どもたちの未来を創る持続可能な学校を目指し、「志をもち多様な他者と協働しながら次代を創る人財を育む学校経営」を推進していく決意を述べ、結びとしたい。

第3分科会

研究主題

知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメント

1 はじめに

真和志北は、沖縄県那覇市に位置する地域で、那覇市の中心部から北西に広がるエリアである。この地域は、那覇市の主要な商業・文化エリアからは少し離れており、住宅地として静かで落ち着いた雰囲気を持ち、住みやすい環境が整っている。周辺には、沖縄の伝統的な文化や自然を感じられるスポットも点在しており、地域の特色を楽しむことができる。

真和志北第2ブロックには、小学校4校（真嘉比小、大道小、松川小、松島小）があり、学力向上や生徒指導、地域連携等を中心とした教育課題の共有化を図り、4校が同じ方向性で様々な教育活動に取り組んでいる。

2 主題設定の理由

今日、インターネットで情報を容易に得ることができたり、AI（人工知能）の実用化が進んだり、知識基盤社会やグローバル化が確実に進展している。このような中、子ども達は社会の変化に柔軟に対応し、自信を持って自らの夢と希望の実現に向け、たくましく生き抜く力を身につけていくことが求められている。

また、学校教育では、子どもに、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化に対応し乗り越えることができる、柔軟な思考力や判断力、表現力を身につけさせることが必要になる。さらには、新しい見方や考え方で新たな価値を創造できる資質・能力を獲得させていくことが不可欠であり、そのためのカリキュラム・マネジメントの確立が強く求められている。

本分科会では、校長のリーダーシップの下、子どもが豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるように、しなやかな知性と豊かな創造性の育成を目指す「社会に開かれた教育課程」の実現とカリキュラム・マネジメントについての具体的方策を明らかにする。

3 研究の視点

研究の視点については、「社会に開かれた教育課程」の在り方を踏まえ、具体的に考察に取り組むものとする。

1. 教育課程を軸に学校教育の改善・充実を図る「カリキュラム・マネジメント」の視点
2. 地域社会と連携し、つながる視点

提案者：仲地千佳（真嘉比小学校）

司会者：新川美紀（大道小学校）

記録者：石原郁代（松川小学校）

ブロック共同研究者：奥間千賀子（松島小学校）

4 研究の実際（各学校の取組実践）

研究主題を具現化するために、真和志北第2ブロックのそれぞれの小学校において実態に応じた手立てを講じてきた。ブロック校長研修会を通して共有し、今後の実践につなげるように取り組んだ。

(1) 真嘉比小学校（児童数576名）

① 学校運営と現状

本校は、那覇市真嘉比・松島地域の土地区画整理事業により、スーパーや飲食店が立ち並ぶ都市的環境へと変貌を遂げた地域に位置している。また、モノレールや幹線道路にも近接しており、都市的利便性の高い立地である。それに伴い児童数も令和時代から増加しており、活気に満ちた学校である。一方で、地域には古くからの自治会や青年会が現存し、伝統文化を重んじる気風が根付いている。近代的な街並みと、地域に息づく伝統が共存するこの真嘉比の地で、子どもたちは、多様な価値観に触れながら、たくましくそして楽しく生きる力を獲得している。

② 実践の概要

ア 学校経営の具体的取組

学校が掲げる教育目標を実現するためにキャリア教育の視点から教育課程を再構築している。教育活動全体に「キャリア教育の視点」を通底させ、児童が自己の生き方や将来を見つめながら、社会とつながる実感をもてるようカリキュラム・マネジメントを進めていく。

学校の理念：社会を生きぬく人材の育成

～自ら考え・判断し・行動できる児童の育成～

教育目標：主体的に学ぶ力

～自立した学習者の育成～

めざす学校像：



児童の自己決定を尊重し、互いに認め、支え合える、学び場である学校

めざす児童像：

夢や目標に向かって、自ら考え学び努力することができる児童

イ 学校課題への組織的な取組

教育課程においてははめぎす学校像に明記されているように児童が自己決定できる機会を位置付ける。また、夢や目標を設定することにおいて外部からの刺激を与えられるよう講師派遣や施設を訪問する機会を多く設ける。

	自己決定	夢や目標に関わる協力者
1年	国語：1単元 (保幼小連携) 算数：1単元	道徳：人権（指導員） 音楽：鍵盤演奏（指導員）
2年	算数：3単元	生活：校区まち探検（施設訪問：商業施設）
3年	算数：2単元 体育：1単元 (器械運動)	算数：そろばん（指導員） 社会：1単元 (施設訪問：商業施設) 総合：町づくりと福祉（社会福祉協議会）
4年	算数：3単元 社会：3単元	総合：地域の課題解決 (施設訪問：クリーンセンター、倉敷ダム) 外国語：異文化交流(AETの先生方)
5年	算数：3単元 社会：3単元 学校行事：自然教室 児童会：委員会活動	総合：伝統文化・稲作 (真嘉比自治会、青年会)、自然環境・生物・伝統文化の3つに分かれ探究活動 (NPO法人、沖縄大学教授、講師)
6年	算数：全単元 社会：全単元 国語：3単元 学校行事：修学旅行、卒業式 児童会：委員会活動	体育：3単元（指導員） 国語と特活：インタビュー（地域の人々、先生方） 社会：平和学習（平和祈念資料館） 租税教室（税務署） 総合：よりよく生きる（関連企業、保護者）
理科	5年：3単元 6年：4単元	
音楽	和音のひびきの移り変わりを感じ取ろう 	音楽の授業の様子
全体	・児童会による一年生を迎える会、卒業を祝う会の企画・実施 ・ワクワク学びフェスタ（1～6年で家庭学習の取り組み状況を異学年交流） 	ワクワク学びフェスタの様子

- ・年間のテーマ作成（代表委員会）
- ・運動会、音楽発表会（児童主体で進めていく）
- ・クラブ活動（教師、地域ボランティア）
- ・音楽鑑賞会（演奏者）
- ・平和集会（講演：「月桃の花」の作詞者招聘）
- ・豊年祭に向けた綱編み体験



稲作講話の様子



刈り取り作業の様子

(2) 大道小学校（児童数255名）

① 学校運営と現状

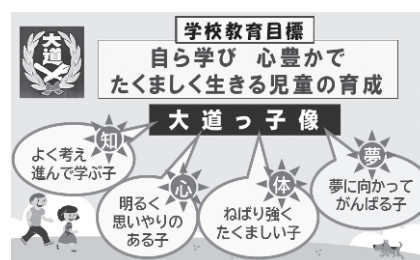
本校は通常学級9、特支学級4の小規模校である。昨年度の学校評価「地域との連携（地域教材や人材の活用）達成度」や「将来の夢・希望を持っている」が7割に止まり、地域との繋がり方に教師の困り感とキャリア教育の視点で学校課題が見えてきた。

そこで、既存の家庭・地域と連携した取組を、協働して育てる持続可能な学びへ転換を図るため、将来社会の創り手となる子供に自治意識の醸成と教師の地域との協働体制の再構築に取り組んでいる。

② 実践の概要

ア 学校経営の具体的取組

- 「大道っ子像（知心体）」に「夢」を加え、掲示を一新し見える化。
- PTA総会や授業参観で学校教育方針や計画を保護者と情報共有。



学校教育目標と大道っ子像

- 地域人材・企業・関係機関と連携体制を再構築。
- 地域の特色を生かした人材・教材の再開発。

イ 学校課題への組織的な取組

地域の人・もの・ことを生かした体験的活動等から子供が地域や学校に誇りを持ち、夢や希望を持って課題に取り組む力や探究する力を育てる。

- a こども園・本校・中学校との12年間を見通した教育計画の見直しを実施しながら行っている。

12年間を見通した教育計画

- b 委員会活動を活用し、児童主体の学校行事運営と新行事や活動の奨励。
c 持続可能な「お仕事体験教室」への再構築。

本校独自のキャリア教育活動の一環に「お仕事体験教室」がある。保護者や地域企業等の協力を得て、全児童が授業参観で様々な体験をしている。

今年度は持続可能な学びへの転換を図るため開催内容・方法について再検討し、実施する。



お仕事体験教室（鑑識体験）

(3) 松川小学校（児童数472名）

① 学校運営と現状

昭和31年に那覇市立大道小学校より分離創立され、本年度創立69周年を迎える歴史と伝統のある学校である。那覇市内を一望できる小高い丘（ひばりが丘）に立地し、緑豊かな素晴らしい環境に恵まれている。

本校では、教育活動を推進するにあたり日常的に、交通安全指導や環境美化整備等、多くのボランティアの方々のご支援をいただき学校、家庭、地域が一体となり地域学校として協力体制が受け継がれている。

そこで「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて全職員でベクトルを揃え以下の実践に取り組んでいる。

② 実践の概要

ア 学校経営の具体的取組

- a 支持的風土のある学年、学級経営
(ア) 朝レク、学級活動等による教師と児童、児童同士の心の関係づくり
(イ) YPアセスを活用した児童理解
(ウ) 週時程での工夫として、朝の学習時間（モジュール）を取り入れ、基礎学力の定着
(エ) 放課後の時間確保

イ 学校課題への組織的な取組

a 地域連携を活かした授業の実施

- (ア) 地域の工業高校との交流を通してものを作ることの楽しさや、人の生活を支える仕事の大切さを早い段階で知ることができ、将来の職業や進学について視野が広がる。また地域の魅力も再発見できる。
(イ) 下関市立山の田小学校とのオンライン連携（遠隔授業）を通して、文化、風土の違う場所で育った同世代の子ども達と意見交換することで、考え方の幅が広がると同時に自分の地域を客観的に見る力も養える。
(ウ) 地域の専門家や企業人を授業に招いて、教科書だけではわからない「仕事のリアル」や社会の仕組みに興味を持ち、また「自分たちも地域の一員である」という意識を持つようになる。



高校生との交流授業の様子

(4) 松島小学校（児童数535名）

① 学校運営と現状

本校の近隣には自然豊かな末吉公園が広がっており、四季折々の自然を活かした体験的な学びが可能である。また、歴史と文化の薫る首里城の近くに位置し、松島青年会によるエイサー演舞や末吉自治会の獅子舞など、地域の伝統行事にも積極的に参加している。一方で、学校はモノレール沿線上にあり、那覇市中心部や空港へのアクセスにも優れた都市的環境にも恵まれている。伝統と近代が融合するこの地で、児童は豊かな自然・文化・利便性のある環境の中、未来に羽ばたく力を育てている。

② 実践の概要

ア 学校経営の具体的取組

学校が掲げる教育目標を実現するために、地域と

連携した学びを教育課程の中に位置づけ、学校の運営や教育内容をより良くしていくことを目指します。その取り組みを通じて、教育課程全体を見直し改善する「カリキュラム・マネジメント」を進めていく。

教育目標：ふるさとを愛し世界に目を向ける子
育成する資質能力：地域と関わり地域の良さを理解し
尊重する力



めざす学校像：開かれた教育課程のもと、地域とともに成長する学校
めざす児童像：地域に関心を持ち大切にする子

イ 学校課題への組織的な取組

教育課程においては、地域の魅力や歴史・文化に触れる学習を通して、児童がふるさとや学校に誇りを持てるような内容を位置づける。

	教育課程への位置づけ		連携協力機関
1年	生活	秋みつけ	末吉公園
2年	生活	生き物探検 校区まち探検	森の家みんな 商業施設
3年	総合	私たちの松島じまん モノレール見学	末吉自治会 モノレール
4年	社会	自然災害に備えるまちづくり 昔から今へ続くまちづくり	松島自治会
5年	社会総合	沖縄大好き彩（再）発見 紅型・首里織、首里城見学、エイサー、獅子舞	首里城 末吉自治会
6年	総合	平和をつくるプロジェクト	平和祈念公園 南風原町教委
理科	生命の誕生		助産師
音楽	地域まつり参加 合唱鑑賞会		松島中学校
全体	読み聞かせ 環境整備作業 プール補助ボランティア クラブ活動 放課後こども教室		保護者 松島自治会 地域C.O.



1年 秋みつけ



5年 沖縄大好き彩(再)発見

5 成果と課題

- それぞれの学校の地域の特色を生かしたPDCAサイクルにより、教育課程の編成・実施を行ってきた。各学校の取組を共有することで、多くの効果的な実践を学ぶことができた。
- 地域社会との連携により、豊かな体験活動が確保できた。また、児童は地域社会の一員としての意識が高まった。
- 教育目標からグランドデザインを描き、育成する資質能力を明確にすることで、各学校の教育課程を軸に学校教育の改善や充実を図る「カリキュラム・マネジメント」の実現に迫ることができた。
- 地域に対する思いを育むための、地域と連携した活動を積極的に行う必要がある。
- 組織的な取組や社会に開かれた教育課程のさらなる推進が必要である。
- 各教育活動で育んだ児童の資質能力を、現代的な諸課題に関する教科横断的な学習活動につなげる取組を充実させる必要がある。
- 各校の特色ある取組を、児童が中心となって地域に発信する「情報発信力」を育成する必要がある。

6 おわりに

これから子どもたちの育成において必要とされる資質・能力は、急速に変化する社会や技術の進展、多様化する価値観に対応できる「柔軟で持続可能な力」と考える。異なる意見を調整し、地域や世界の人々と共に生きていくための力を育んでいくことが必要である。

そのためにも、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、各成果のもと今後も推進・継続していく。さらに地域社会と連携し協働した柔軟なカリキュラム・マネジメントを進め、既存の枠にとらわれない新しい価値を創出する子ども達の育成に努めていきたい。

第4分科会

研究主題

豊かな人間性と健やかな体を育むカリキュラム・マネジメント

提 案 者：島 川 直 樹（久 辺 小 学 校）

司 会 者：宮 城 昭 彦（大 北 小 学 校）

記 録 者：島 田 綾 子（奥 間 小 学 校）

1 はじめに

近年、ICTの活用やSociety5.0によるグローバル化、答えが一つでない課題など、子ども達をとりまく社会や生活は大きく変化している。今後、子供たちは、さらなる変化の激しい予測困難な時代をむかえ、そこで生き抜くためには、自らを人との関わりの中で律しながら、自分自身の生き方を考え、いかに自己を確立していくかが大切である。学校では子供たちに豊かな人間性を育む教育活動が求められており、子供たち一人一人が人としての生き方や社会のあり方について多様な価値観の存在を認識し、自立した人間として、自他の尊重等を踏まえ、未来を切り拓く力を身につけることが重要である。

2 主題設定の理由

SNS等による誹謗中傷は低年齢化し、小学校においても生徒指導、いじめ問題の一因として大きな影響を受けている。このように新たな人権問題が多発する社会において、人権教育及び道徳教育の重要性はますます増している。子供たちが人権にかかわる基本的な知識を身につけ、自他を認め互いに尊重し合いながら社会全体の幸せを実現する人権感覚を育成する教育活動が求められている。本分科会は、沖縄本島北部の名護市にある標準規模の大北小学校、小規模の久辺小学校と、本島最北端の緑豊かな国頭村にある、小規模校の奥間小学校の3校で構成された分科会である。2つの市村で学校規模も大きく異なる為、本分科では、共同研究員それぞれの学校の特色を活かした教育活実践を通して得た成果や課題を考察しながら研究を深めていくこととし、人権教育や道徳教育など「豊かな人間性」を育成する教育活動を意図的・計画的に推進するカリキュラムマネジメントの具体的な取り組みと、地域共にある教育活動を通して人権・道徳教育の可能性を広げた実践について、各学校の方策と成果を明らかにする。

3 研究の視点

- (1) 多様な人々と協働しながらよりよい社会を創る人権教育の推進。
- (2) 豊かな心を育む道徳教育の推進。
- (3) 地域と共にある教育活動を通して人権・道徳教育

の可能性を広げる。

4 研究の実際

○「名護市立久辺小学校の実践事例」

(1) 実践内容

本校は、名護市の東海岸に位置し、辺野古、豊原、久志の三つの行政区の児童が通う。児童数136名、学級数9学級の小規模校で、職員数23名である。今年度は地域の力を最大限活かす方法を模索しながら人権・道徳教育をどう推進していくか研究を進めていきたい。

① コミュニティスクールの可能性（※1）

本校区の学校運営協議会（以下CS）には、多様で魅力がある委員がそろっている。CS会長は地元出身で県内大手のグループ企業の社長を務めた経歴を持ち、「持続可能なふるさと創り、クリエイティブでイノベティブな人材を育成する為に、基地問題にも向き合いたい」と、CSが主体となった講演会等を実践。

ア ダブルバインドから見えるモラルジレンマから子供たちの道徳的な成長を促す。地域に見られる事例を通して、授業の進め方を工夫し、子供たちの思考力や判断力を養うことを目指す。

イ CSでは、小、中学生代表も参加し、地域の現状から見える身近な人権教育を題材に、目指す家庭地域像についてワークショップや熟議（久辺トーク）を進める。

② 児童養護施設の強み（※1）

校区には児童養護施設もあり年度途中の転入生も多いが、本校に来てから困り 感も解消され元気に登校している。その要因として本校児童は、毎年のように転入生がいる環境から、偏見や差別といった行動もなく、多様な子を自然と受け入れる意識が育っている。また、地域の方々の支えもあり、児童養護施設の子も含め「地域の子は地域で守り育てる」という、分け隔てのない環境がここにはある。

ア 児童養護施設職員、保育園職員、小中管

理職による定例連絡会による情報交換会を実施。

③ 児童会を中心とした自治的活動の充実

ア 学校行事等「子どもに意見を表明させ、最大限に尊重する」取り組み。

- ・遠足の場所、卒業式の会場作り、運動会の雨天時の対応。
- ・児童会が校長に交渉し「水曜日は部活も宿題もない日」を設定。

④ その他の取り組み

ア 「よい子の歩み」では、児童自身が、自分の行動や思考を評価する機会とし、メタ認知を高め、客観視の能力を高める事を目指している。

イ 縦割り班清掃（清掃時間に月1回）

ウ 朝のボランティア（チョボラ）活動、午前7時50分～8時10分まで。

エ 保護者、地域の方の読み聞かせ。

オ 授業参観日に全学級で道徳授業を実施。

(2) 校長の指導性

① 人権が尊重され、道徳性を育む職場環境を目指した、経営ビジョンと組織づくり。

ア 学校経営方針や役割を明確にし、組織としての仕組み化（ルール作り）を徹底。

イ 物事を筋道立てていくロジカルも大切であり、効率も必要だが、職員は管理職の熱意（リーダーシップ）に惹かれ、配慮に心打たれる。年齢や経験、立場が違うからこそ、人権尊重の理念、道徳性は私たち自身がお互いを尊重しつつ、全職員がチームを意識した教育活動を目指す。

ウ 教職員同士の連携を強化し組織的に機能するには、教職員による「対話」の機会を意図的に作り出す。職員会議や連絡会は定例でしっかり確保し、さらに担任会の充実が必要不可欠だと感じている。担任同士の対話こそアイデアが生まれ、ベクトルを揃え、ボトムアップを生み出す。

○「国頭村立奥間小学校」

(1) 実践内容

本校は、沖縄県北部に位置し、2021年に世界自然遺産に登録された豊かな生態系を持つ地域国頭村にあり、児童数75名、学級数は特別支援学級を含む9学級の小規模校である。担任・専科の構成は、本務9名（基礎2・充実3・発展1・指導3）、

臨任1名、「全職員で全校児童を育てる」協働体制で日々の教育活動に取り組んでいる。学校運営協議会は現在未設置であるが、保護者や地域は学校の教育活動へ協力的で、小規模校や地域の優位性を生かし学校経営に取り組んでいる。

① 人権意識高揚、人権尊重の取組の継続

学校生活全体の中で、児童が自らの大切さや他者の大切さが認められていることを実感できる取り組みを推進する。（児童の発案による活動の計画・準備・実践・振り返り、特別支援コーディネーターによる「脳の引き出し」授業など）

日常的な指導に加え、毎月第1火曜日を「人権の日」と位置付け、朝や給食時間の校内放送で呼びかけ、給食時職員、児童の意識の高揚を図る。人権教育担当を中心に、「他者を思いやる言葉遣い」「さん付け」「自他ともに大切すること」について、生活朝会を実施し、人権意識を育む。

② 良好な人間関係づくりの推進

児童が安心してわからないことを「わからない」「教えて」と言い合える支持的風土ある学級経営を基盤に、さまざまな教育活動を実践する。授業における協働的な学び、学級活動や各委員会の主体的な取組み、清掃活動の縦割り班活動など、全教育活動を通して児童が中心となった活動を推進し、「聴き合い、支え合い、共に成長」できる関係を育む。

③ 道徳教育の充実

カリキュラム・マネジメント表を活用し、各教科、道徳の時間、特別活動、総合的な学習の時間、それぞれの関連性を明確にして教育活動に取り組む。道徳の授業と体験活動を関連させて学習することにより、一層豊かに道徳性を育むことをめざす。

④ 家庭・地域・行政との連携

保護者や児童親族、警察署職員などを含む地域の方を読み手とした朝の読み聞かせを通し、児童の実態や地域で育みたい児童像を共有、学校・家庭・地域で共に児童を見守り育む体制の構築をめざしている。また、野菜栽培体験や地域の自然・伝統文化についての学習（生活科、社会科、総合的な学習）では、保護者や地域の方を講師に迎えて共に児童の学びを支えている。（世界自然遺産環境学習は村教育委員会主催で村内5小合同学習）

児童にとっては、地域の大人や近隣小学校児童との関わりの中で、多くの他者の考えや思いに触れたり、協働活動をしたり、考え行動する良い機会となっている。

(2) 校長の指導性

学校生活や授業において、児童や教師の共通した指針となる学校経営ビジョンを明確に示し、めざす児童像を全職員で共有、適宜指導助言を行い、取り組みの方向性を揃えた実践を支える。PDCAサイクルで活動に取り組み、校内研主任と学力向上推進担当中心に見直しをしながら改善を図る。

地域人材や教育資源を生かし、家庭・地域・行政との連携を図りながら児童の学習活動と成長を支える。

○「名護市立大北小学校」

(1) 実践内容

本校は昭和60年に名護小学校から分離 独立し、児童数も年々増え、児童数495名、学級数は23学級（特別支援学級含む）、職員数41名（市費職員含む）の適正規模の学校である。1区1校のため、保護者や地域の学校教育に関する期待や関心も高く、学校への協力も積極的にPTA活動も盛んである。

① 人権教育の取組

本校では毎月第3水曜日を「人権を考える日」と定め、各クラスで人権について考える機会を設けている。今年度は、子どもたちが主体的に人権について考えることができるよう、児童会が掲げている4つのいっぱい運動「あいさつ・花・読書・思いやり」の「思いやりいっぱい」を共通実践事項として、学校教育のあらゆる場面で意識して取り組む。

具体的な取り組みの一つに、「マナーアップキャンペーン」がある。マナーアップキャンペーンの目標は、「自分もみんなも気持ちよく生活できるように考えて行動すること」「よいことは進んでやる悪いことはやらない」「(ルールやマナーを) わかるからできる」の3つを設定した。各学級で3つの目標を達成するために話し合い、1か月間取り組み、できるようになったことに掲示したり、クラス全員で共有したりすることで、自分の人権を大切にし、他の人の人権も同じように大切にする（思いやり）といった人権意識が少しずつ培われていく。

② 道徳教育の充実

本校では、道徳科の授業力向上のため、校内研やOJTで教材研究の質の向上に努めている。また、道徳の授業では、同学年の中で担任が交換授業（ローテーション道徳）を行うことで、教員同士の授業に対する会話が增え、教材研究の質の向上や授業力向上につながる。

③ 地域ぐるみで子どもを育てる体制づくり

本校では、「地域を愛し未来に夢と希望を持てる大北っ子の育成」をコミュニティスクールの基本理念として掲げている。学校運営協議会で、情報を共有し、学校を中心に家庭や地域の教育力を高め、多くの大人と触れ合う中で、他人を思いやり、人との関わりを大事にし、積極的にコミュニケーションをとれる子どもを育成するため、地域ぐるみで以下のような取り組みを実践している。

ア 登下校の見守り

イ 朝の読み聞かせ

ウ 授業における地域人材の活用

(2) 校長の指導性

年度当初の職員会議で学校経営ビジョンについて全職員で共通理解を図る。今年度の学校経営のキーワード「幸せいっぱい」「笑顔いっぱい」な学校を創っていくため、それぞれの立場で当事者意識を持って学校経営に参画できるような体制づくりをする。

また、本キーワードを教職員だけではなく、児童や保護者、地域の方へも伝え、それぞれの役割を理解し、共に創り上げていくことができるよう、地域と共にある教育活動を通して人権・道徳教育環境を整備する。

5 成果と課題

(1) 成果

① 地域に見られる生活課題を、人権・道徳教育の教材や機会、地域の協力を活用して取り組むことにより、より身近な教育活動となった。

② 地域連携による教育活動は、多様な社会的活動に参画する機会を確保し、多くの他者や思いに触れ、子どものために大人が考え守ってくれていることを実感。良好な人間関係を育む機会となった。

③ 児童会が学校生活をより良くするために「4つのいっぱい運動（共通実践項目）」を目標に掲げ、

各委員会が中心となり、主体的に取り組むことで、自分事として人権を大切にする意識の変容が見られつつある。問題行動への対応では、共通実践事項を元に振り返り、当事者意識で問題に向き合い、改善策を共有することができた。

(2) 課題

人権・道徳教育の実践は、子どもを含め、教職員、保護者や地域、行政等、共に子どもを支える人々が、共通のビジョンを持って取り組む必要があると感じた。

6 おわりに

未来社会を築く子供たちに、自他の存在や互いの価値観を尊重し合い、認め合うことのできる「人権感覚」を身につけさせることが、学校教育に求められている。そのためにも、各学校においては、その実態を適切に把握し、地域・学校の特色を生かした「豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメント」をさらに検証、実践することが重要である。

人権が尊重される社会の実現は、校長の理念とリーダーシップ、地域の協力を最大限に活かし、さまざまな取組を仕掛け、学校経営にあたらなければならない。

※1 参考資料（原稿執筆：本校教頭 齊藤博孝）

第5分科会

研究主題

学校の教育力を向上させる研究・研修の推進
～教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修
体制の充実～

提 案 者：中山 盛 延（石嶺小学校）
司 会 者：宮 里 辰 也（大名小学校）
記 録 者：工 藤 直 也（城北小学校）
〃：神 谷 貴 子（城東小学校）
ブロック共同研究者：古 賀 義 之（城西小学校）
〃：田 島 正 敏（城南小学校）

1 はじめに

Society5.0時代の到来やGIGAスクール構想の加速により、教師のICTを活用した指導力のさらなる向上が必要とされている。近年、教職員の大量退職・大量採用により経験豊富な教員が減少し、若手教員が増加していることや、多忙さから教職員の同僚性が十分に発揮されず、知識・技能の継承が困難な状況が生まれている。学校の教育力を高めるためには、個々の教員の指導力向上だけでなく、共通の目標達成に向けて機能する教員集団の形成が必要である。教員の資質・能力向上には、職場の同僚同士のチームワークや学び合いによる全員のレベルアップが求められる。新学習指導要領では、教師の「学びの専門家」へのシフトチェンジを求めており、すべての教師が主体的・対話的で深い学びの実現に向けて自己研鑽を積むべきだとされている。

2 主題設定の理由

校長は、教員一人ひとりの意識改革を促し、学校教育目標の実現に向けて、自校の実態や目指す姿を明確にしながら、重点課題を絞り込み、教員の資質・能力が高まる校内研究体制のあり方を追求していかなければならない。このような課題認識に基づき、キャリアステージに応じた資質・能力を活かし、学校経営への参画意識を高めていく研究・研修を推進するため、本主題を設定した。

3 研究の視点

- (1) 学び続ける教職員を目指し、資質・能力の向上を図る研究・研修体制の充実

教職員は、技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子どもの主体的な学びを支援するファシリテーターとしての能力を備える必要がある。

校長はリーダーシップを発揮し、教職員自らが生涯にわたってキャリアステージに応じた資質・能力を高めていくように促す必要がある。

この視点から、教職員の資質・能力を高める研究・研修体制を推進する上での校長の役割と指導性を明らかにする。

- (2) 「チーム学校」の運営意識をもたせる研修の推進

学校の教育力向上には、チームとして協働する質の高い組織の育成が重要であり、専門性に基づくチーム体制の構築、学校マネジメント機能の強化、教員一人ひとりが力を発揮できる環境の整備が不可欠である。

校長は、自己申告書等を通じて教職員の能力等を的確に把握・共有し、資質・能力の向上につなげるとともに、経験や分掌を踏まえた研修のあり方を共に考え「チームとしての学校」の一員として積極的に職務を遂行させる必要がある。

4 研究の実践

- (1) 各学校の実践

① 石嶺小学校の実践（児童数816名）

本校では、「自ら考え表現する子の育成を目指して～対話力を高める「話すこと・聞くこと」領域の授業づくりを通して～」をテーマに掲げている。今年度は、教科を国語科に絞り、児童の主体的な学びに「対話」を手がかりとして授業改善を図り、自ら学ぶ力を養い、自ら考え表現する子の育成をめざしている。学校教育活動のあらゆる場面において、考える事を意識し、「自ら考え、判断し、行動すること」の実践を低学年から意識して積み重ねている。さらに授業の中での「学ぶ」姿勢においても、全校体制で学びの姿勢として意識付けとして、本校教諭が作成した「あなたの学習観」を自分の指標として活用し、学習に臨んでいる。また、自立する学習者の育成の視点から家庭学習の見直し月間や「めざせ宿題名人」などの取組を行い、選択・自己決定型の宿題を提案し、自律的な学びを家庭と連携しながら実施している。

また、教師一人一人の指導力や学校教育力の向上を図る授業研究会の持ち方を工夫し、授業リフレクションを取り入れた。児童の学ぶ様子や教師の発問、児童目線の振り返り時間の設定

また、授業改善や教師間の心理的な安心・安全な環境作りのために学期の最後に「しゃべり場」を設定し、授業実践・手立てや困り感などを共有する場を設け、実施している。



写真1 《OJTによる学び合い》 《掲示用「学習観」》

《校長の役割》

校長は教育理念と学校のビジョンを示し、全職員で最上位の目標を決め、めざす子ども像の実現に向けた取組を保護者や地域と共に、全て教師に当事者意識を持たせながら、教育活動全般で実施している。また、校内研主任や学推主任に決定権を持たせ主体的な活動や組織運営をさせている。

② 城北小学校の実践（児童数659名）

今年度の校内研究テーマを「自立した学習者の育成～地域の教育的資源を活用した総合的な学習の時間を通して～」と設定し、全職員で組織的に取り組んでいる。

＜実態把握と見通し持つ取組＞

年度当初のワークショップでは、「児童の現状」と「1年後の成長した姿」、「自立した学習者」のイメージを共有し、児童の育成に向けた方向性や必要な手立てが明確になった。

＜子供の姿に焦点を当てた授業研究会＞

研究授業では教師が観察する児童を分担し、授業後に児童と10分程度のリフレクシオンタイムを設けるなど子供の変容に焦点を当て、学びの相似形を意識した「共に学びを創る授業実践」を進めている。

＜次へつながる教師の振り返り＞

研修の最後には、「実践に生かせること」「気付き」などを振り返ることができるようなワークシーを活用することで、学びを次へとつなげる姿勢が育まれている。



写真2 リフレクシオンタイムの様子

《校長の役割》

校長は校務分掌や学年配置など体制整備に努め、研究主任らと連携するとともに、小中一貫教育や経年研修とも足並みを揃え、計画的に研究・

研修を推進している。このように、校内外を視野に入れ、教師一人ひとりがキャリアステージを意識しながらチーム学校の一員として主体的に学びける環境づくりを行っている。

③ 城東小学校の実践（児童数485名）

本年度、本校は「学び続ける教職員を目指し、資質・能力の向上を図る研究・研修体制の充実」を研究の視点として掲げ、教職員一人ひとりの専門性向上と、学校全体の教育力向上を目指して取り組んでいる。特に、チームとして協働する質の高い組織の育成に重点を置き、校内研究の組織編成に工夫を凝らした点が、今年度の大きな特色である。これまでの学年単位での授業研究から、新たに「サークル型授業研究」を導入した。この取り組みは、単に授業力を高めるだけでなく、校内OJTを促進し、教科の専門性を深めることを目的としている。また、教職員が教科指導について気軽に相談や雑談ができるような、風通しの良い職場風土の醸成も視野に入れている。今年度は、経年研修対象教員の授業をサポートすることを主眼に置き、算数（2年研）、国語（5年研）、道徳（3年研）、そして特別支援学級担任からの要望に応える形で「自立活動」の4つのサークルを立ち上げた。教職員は自分で入りたいサークルを選択し、積極的に参画するよう促している。各サークルには、経験豊富な教員を「メンターリーダー」として配置し、授業者のサポートはもちろんのことサークル運営が円滑に進むよう、多岐にわたる支援を行っている。この実践を通じて教職員が互いに学び合い高め合う関係性を築き、学校全体の教育力向上に繋がるであろうと感じている。

《校長の役割》

・ビジョンの明確化

サークル型授業研究会の目的を明らかにし、教職員が主体的に取り組めるよう導く。

・環境整備と支援体制の構築

サークル活動時間の確保、必要な資料や教材の準備、ICT活用促進、外部講師の招聘等のリソースの提供。

・風通しの良い組織文化の醸成

教職員同士又は管理職と教職員の対話を大事にし、心理的安全性の高い職場環境を整える。



写真3 サークル型研究会の様子

④ 城南小学校の実践（児童数365名）

本校は「自律的に学ぶ子」を教育目標に掲げ、今年度の校内研究テーマを「自律する児童の育成～教師のファシリテーションや協働的な学びの工夫を通して～」としている。この教育目標の達成に向け、全教職員がベクトルを揃え日々の教育実践に取り組んでいる。

研究授業では、座席表を元に児童の学びの姿の見取りを分担し、授業者の手立てや声かけ、場の設定等の良さや課題を共有し、授業者も参観者もよりよい授業実践に向けて授業改善につなげる授業研究会を進めている。

また、本校は県指定の学校管理職マネジメント力強化推進の指定を受けており、次年度から実施のコミュニティスクールと地域学校共同本部（まち協）、PTAとの連携を強化し、地域の「ひと、もの、こと、自然」を最大限に活かし学びの効果を高める準備を進めている。何事も「トライ＆エラー＆ラーン」でチャレンジしていこうとする風土が職員の中に育ちつつある。

本校の強みは、教職員の専門性を活かした活発なOJTである。たとえば、研究主任が企画する「放課後サロン」では、ICTの効果的な活用方法についてざっくばらんに意見交換を行っている。また、学力向上推進担当が主導し、「問いを生む発問の工夫」や「探究学習」に関する任意の学習会や資料提供を実施している。これらの取り組みは、学校全体で授業改善に前向きに取り組む風土を育てている。

《校長の役割》

一人一人の教職員が持つ専門性を見極め、それを校内研修に活かしている。得られた知見を全体で共有し、共通実践へと結びつけることで、学校全体の教育力の向上を目指している。

教職員の特性やキャリアステージに応じた計画的・系統的な研修を推進し「県学校教員等育成指標」を共通の視点とし、若手からベテランまで全ての教職員の資質・能力向上を目指している。また、若手教員には早い段階からリーダーとしての経験を積ませ、学校経営への参画意識を高めるよう促している。

その他、地域やPTAとの交流に積極的に参加し、地域の人材や学習素材を発掘するよう意識し、地域と学校をつなぎ、児童の学びをさらに豊かにできるよう心がけている。



写真4 OJTによる学び合いの様子

⑤ 城西小学校の実践（児童数611名）

本校では校内研のテーマを「互いに認め、学び、高め合いながら、課題解決に向き合う児童の育成～ESDの視点に立った『ふるさと首里』の学習における授業改善を通して～」と設定し、生活科および総合的な学習の時間を中心に研究を進めている。この研究は、一昨年度の文部科学省の指定を受けたテーマを三年目として継続しているが、本校児童の実態や本校職員にとっての必要性に即した内容になっているかという疑問があった。

また、今年度は校長・教頭を含め、約半数の職員が異動し、研究主任も新たに赴任した教員が担当している。こうした中で研究の継続性や深まりに課題を感じた。これは人事異動や学校規模によって多くの学校でも起こりうる共通の課題である。また、これまでの校内研では「与えられた研究をこなす」傾向があり、教員が主体的に取り組んでいるか、児童の実態に即した研究となっているかという点でも再考が必要と感じていた。

そこで今年度当初から、職員との対話を重ねながら、真に必要性を感じ、学びたいと思える内容を引き出し、他校教員による示範授業や実践事例の紹介を取り入れるなど、実践的な校内OJTを展開している

《校長の役割》

学校の実態や、教育を取り巻く現代的な課題を踏まえ、これからの教職員に求められる資質・能力の育成に向けて、校内OJTの推進に力を注いでいる。具体的には、これまで赴任してきた学校や関わってきた指導主事・他校教員との人脈を生かし、協力を得ながら示範授業の実施や実践事例の共有など、外部の知見を効果的に取り入れている。今後も、職員のニーズや児童の実態に応じて柔軟かつ実効性のあるOJTを実施し、本校教職員の資質・能力の向上に継続的に取り組んでいく。

⑥ 大名小学校の実践（児童数165名）

本校では、特別支援教育の充実に向けて、適切な「交流及び共同学習」の推進に取り組んでいる。

本年度の特別支援学級は、知的学級1学級と自閉・情緒学級2学級の計3学級を設置しているが、担任はいずれも支援学級担任の経験年数が浅く、特別支援教育を着実に推進するには、全校体制での組織的支援が必要な状況であった。

特別支援教育では、共に学び、共に育つインクルーシブ教育システムの構築が求められており、「交流及び共同学習」の効果的な実施は、子供たちが将来、共生社会の一員として生きていく力を育むうえで重要である。

本校ではこれまで、教科ごとに特別支援学級の児童を交流学級で学ばせていたが、その目的や意義について、双方の担任間での共有が不十分であった。その結果、交流学級で授業についていけない児童への対応に苦慮する場面や、児童自身の戸惑いが生じ、改善が求められた。

《校長の役割》

こうした状況を受けて校長は、特別支援学級の実態や課題を丁寧に把握した上で、交流及び共同学習の改善に向けた方向性を示し、教職員間での認識共有を図った。さらに、教職員の資質・能力向上を図る具体策として、夏季研修会で「児童生徒理解」や「交流及び共同学習の在り方」をテーマに研修を実施した。インクルーシブ教育の理念や合理的配慮の考え方を全職員で共有し、共通理解のもとで主体的に教育活動に取り組む姿勢を育成した。

また、比較的時間が確保できる夏休み期間中に、「こども支援委員会」の在り方を見直した。従来の一方向的な報告中心の場合から、対象児童の支援学級担任・交流学級担任・管理職が一人ひとりの状況をもとに支援の方向性を協議する実質的な場へと改善したことで、交流の目的や方法を明確化し、夏休み明けからの支援体制構築につながった。

今回の研究は、組織的な改善を主導しながら、資質・能力の向上を図る研究・研修体制の構築と学校全体の教育力の向上を目指すことにつながった。

5 成果と課題

各学校の実践から、教員の資質・能力向上と「チーム学校」形成に向けた校内研究・研修体制の推進において、校長のリーダーシップは極めて重要であることがわかった。その成果として、教員の主体性を引き出す体制の構築が挙げられる。どの実践からも従来のトップダウン型ではない、教員一人ひとりが学校経営に参画する意識が高まる傾向が見られた。特に、教員が自らの興味関心に基づいて学ぶサークル型授業研究や、授業の企画・運営に決定権を持たせることで、当事者意識が芽生え、自律的な学びが促進される様子が見られた。

授業研究会では、教員の指導法だけでなく児童の学びの変容を深く考察する場へと捉え直す試みが見られる。授業後に児童と直接対話する「リフレクションタイム」を設けることで、教員は児童の視点から学びを捉え直し、より実効性の高い授業改善へと繋げている。また、多忙さや経験差から生じがちな教員間の孤立を防ぎ、「チーム学校」の基盤を強化する動きがあった。校長が外部の人脈を活かして示範授業を行うなど、積極的に教員間の対話と協働を促すことで、互いに学び合い、高め合う関係性が築かれていったと考える。

一方で、本研究にはいくつかの課題も明らかになった。各校の取り組みは、校長や教員の熱意に強く依存しており、その成果を定量的に示すデータが不足しており、他校への普遍的な適用性については、今後さらなる検証が必要である。また、人事異動や学校規模といった要因が、取り組みの継続性を阻害する可能性があるため、これらの成果に汎用性があるかも今後の検証が必要である。

さらに、自発的な参加を促す研修は有効であるものの、全ての教員が平等に学びの機会を得られているとは限らない。多忙な教員が自主研修に参加する時間を確保することや、ベテラン教員のさらなる成長を促すための仕組みづくりなど、多様なニーズに応じた研修設計が求められる。これらの課題を克服することで、教員の資質・能力向上と学校組織の活性化をさらに進めていきたい。

6 おわりに

本研究により、教員の専門性向上と学校組織の活性化には、校長のリーダーシップが極めて重要であることが確認された。各校の実践から、校長が教員に主体性と当事者意識を持たせることで、自律的な学びが促され、チームとしての教育力が向上することが示唆された。特に、教員同士が協働して専門性を高め合う活動や、授業後に児童の学びの変容を深く見つめる取り組みが、その効果を高めることがわかった。

今後は、これらの実践が児童の成長にどのような影響を及ぼしているかを客観的に検証する必要がある。また、人事異動や教員の多忙さといった、学校が抱える構造的な課題を乗り越え、より多くの学校で実践可能な持続的な研修モデルを構築していくことも目標にしていきたい。

第6分科会

研究主題

これからの学校を担うリーダーの育成
～学校教育への確かな展望をもち、行動できる
ミドルリーダーの育成～

1 はじめに

社会が急激に変化するVUCA時代、時にはこれまでの常識が覆され、従来の考え方では対応できないことも増えると言われている。

そのような時代を生き抜く人材を育成する学校は、常に情報を収集し、教職員一人一人の力量を高め、学校組織としての教育力を向上させていくことが学校経営の重要課題の一つである。その解決のためには、校長のリーダーシップのもと、学校の中核的役割を果たすミドルリーダーが不可欠であり、その育成に注力する必要がある。

そこで、確かな展望を持ち、自ら判断し、行動できるミドルリーダーの組織的・計画的な育成を図る上での校長の果たすべき役割と指導性について考える。

2 主題設定の理由

令和5年度本研究大会要録（第6分科会）に於いて、本地区における「ミドルリーダー育成状況」が報告された（令和6年度の県大会は九州大会と併用開催）。そこで、本研究では、学校教育への確かな展望を持ち、行動できるミドルリーダーの育成に向けた校長の役割と指導性、校務分掌の機能化に向けたリーダー育成について、本地区公立小学校長（離島含む）を対象にアンケートを実施し、実態を把握するとともに、各学校の特色ある取り組みを挙げ、ミドルリーダー育成に向けての方策を探っていきたい。

3 研究の視点

- (1) 地区ミドルリーダー育成状況の把握
- (2) 各学校の取り組み

4 研究の実際

- (1) 地区ミドルリーダー育成状況

本地区における、ミドルリーダー育成の実態を把握するために本地区公立小学校の校長を対象に令和7年7月アンケートを実施した。以下に質問項目と回答をまとめた。

① アンケート結果

ア ミドルリーダー育成で有効な取組と思うものを一つ選んでください。（選択式）

提 案 者：上江洲 学（新城小学校）
司 会 者：渡慶次 憲 雄（糸満南小学校）
記 録 者：竹 下 晴 康（百名小学校）
”：上 原 義 仁（ゆたか小学校）

・育成を視点とした校務分掌	76.9%
・評価面談での指導・助言・激励	23.1%
・三役（四役）会議等での指導助言	0%

イ ミドルリーダー育成についての課題は何だと考えますか。（記述式）※主なものを抜粋して記載

本人の意識・資質に関する課題
・ミドルリーダーとしての自覚や意識をどのようにもたせ、やる気や主体性を喚起するか。
・教職員の学校運営への参画意識

環境・組織体制に関する課題
・学校の課題について一緒に考えることが育成に繋がると考えるが、時間的なゆとりがもてず、時間の確保が難しい

校長の役割・支援に関する課題
・ミドルリーダーを育成する校長の力量
・校長（管理職）の「育てる」という意識
・ミドルリーダー育成に係る環境整備（時間の確保・研修の充実）

ウ ミドルリーダー育成について、必要なことは何だと考えますか。（記述式）※主なものを抜粋して記載

・自分事として学校経営に関わる意識の醸成。
・働きやすい環境と負担感の軽減。
・時間的なゆとりの確保。
・人間関係づくりと組織を俯瞰する視点。
・仕事を任せ、悩みや不安を傾聴すること。
・OJT、職員同士の繋がりが。
・教員一人一人に学び続ける意識をもたせ、それを支える同僚性の構築。
・校長（管理職）とミドルリーダーの信頼関係。
・個々の適正や良さを把握しそれを伸ばす視点。
・研修場面と実践場面の提供。

② 考察

ミドルリーダーの育成に有効な取組として、「育成を視点とした校務分掌」という回答が最も多い。

（8割）これは、教職員の資質や適性を活かし、実践を通して育成する意図が示唆される。また、約3割が「評価面談での指導・助言・激励」を挙

げ、学校長が経営方針を示し、実践させ達成感や自己有用感を与えることが、リーダー育成に有効であると考察される。

ミドルリーダー育成には、教職員自身の意欲・意識と個々の資質向上、そして、自覚・主体性の醸成が重要である。しかし、生徒指導や保護者対応等の多忙な現状がその役割を困難にし、組織的な環境整備が課題となっている。さらに、学校長による「育てる」意識をもった支援や意図的な関わりが十分にできないことも課題として挙げられている。

ミドルリーダー育成に必要なことについての回答は多岐にわたるが、前述のアンケート結果が示すようにミドルリーダーの学校経営への参画意識等の教職員の意識の醸成や業務改善による負担軽減、時間の確保等が多くの学校長の考えとして挙げられている。

（2）各学校の取り組み

八重瀬町立新城小学校（児童441名、県費教職員33名）

本校は農村地域の学校として、1学年1学級の児童数150名程度の小規模校であったが、近年、住宅地の造成が進み児童数が毎年30～40名増加、それに伴い学級数も増加し続け、多様な家庭環境、特性を抱えた児童も多数通っている現状がある。

本校の本務職員25名の育成ステージ別構成は、13年ぶりに初任者が配置され、採用5年目までの採用（1人）・基礎（1人）ステージの職員がそれぞれ3％、充実（8人）ステージの職員が24％、発展（5人）・指導（10人）ステージと全体の73％と大半を占め、職員構成は毎年、新採用職員がいる学校とは状況が異なる。

この状況を踏まえ、職員構成の中心である発展・指導ステージ職員の学校経営への参画意識を高め、中堅教諭等資質向上研修前後の職員をミドルリーダーとしての意識、資質の向上をめざし、以下のように「リーダー育成に向けた校務分掌の機能化」の取組を推進している。

① 五役会〈学校運営リーダーの育成〉

校長、教頭、教務、県費事務、こども園長が週一回定時に集まり週行事計画の確認、園児児童、保護者、教師の様子、施設等の諸課題について幅広く意見交換・連絡調整を行うことを目的とし今年度より実施している。

② 適材適所を意識した校務分掌

ミドルリーダー育成において、適材適所による校務分掌の配置と、当該分掌での役割達成や充実が重要であると考えます。

ア 教務主任：校長の経営ビジョンの具現化を教頭とともに中心で推進している。教務主任には学校経営を通して得られる充実感を適宜

紹介し教務の役割や成果を賞賛し学校経営の醍醐味を感じさせることで管理職への動機付けとなるよう感化していく。

イ 学年主任：発展・指導ステージの職員を中心に配置し、臨任及び基礎・充実ステージ職員のサポートや助言等を通して、授業力や学級経営力の向上・充実を実感させる。また、経営への参画意識を高めながら、改善を視点にした協議ができるようにし今後のミドルリーダー育成に繋げている。

③ 諸問題時対応能力の育成

時代の変化に伴う諸問題に対し、発生時に対応力の育成に積極的に取り組みたい。特に「初期対応能力」育成に、発展・指導ステージ職員の経験を活かした対処法を伝える機会を確保し、互いに高め合いながら職員個々の資質向上を目指している。具体的には、「報連相確」は基本として、週案への記録、報告書の作成、提出を細めに行う等で、教師自身が「自分事」として意識し危機意識や危機対応能力を高められるよう取り組んでいる。

豊見城市立ゆたか小学校（児童712名、県費教職員42名）

本校は、過密校解消のため平成27年に開校した。近年、市街化開発が進み、那覇市のベッドタウンとしても人口が増える傾向にあり、児童数は、開校当時512名であったが、現在は712名と、10年で約40％増加した。

本務教職員33名の育成ステージ構成は、採用ステージ2名（6％）、基礎ステージ5名（15％）、充実ステージ3名（9％）、発展ステージ12名（36％）、指導ステージ11名（33％）となっており、採用10年目以上である発展・指導ステージの職員で約7割を占める。

この状況を踏まえ、学校づくりを最前線で担うチームリーダーであるミドルリーダーの育成について下記のように取り組んでいる。

① 校内OJTの推進

ミドルリーダーの育成は長期的な視野で行う必要がある。若手や中堅の時に校内OJTをとおして様々なことを経験し学ぶことは、リーダーになったときに大きな財産になる。

ア 「学校の最小単位は学年」の考え方の浸透

4月の校長による学校経営方針説明で「学校の最小単位は学級ではなく学年である」と言う意識で、常に学年で連携して教育活動を推進してほしいと話した。その結果、職員の95％が日頃からそれを意識して職務に取り組んでいると回答した。

常に学年で連携することで、自ずと日頃からOJTが行われ、若手や中堅職員は、学年主任や同僚職員から多くのことを学ぶことに

なる。

イ 全学年での教科担任制（交換授業）

本校では、全学年で一部教科の交換授業を行っている。日常的に複数の学級に入ること、自然と授業づくりや児童への対応についての情報交換や話し合いが行われる。

② 校務分掌配置に係る工夫

優れたミドルリーダーを育成するためには、実際に経験して学ぶことも大切である。

ア 「学年副主任」の導入

「最小単位は学年」とし、日頃から学年職員が連携して取り組むにあたり、学年主任をサポートする学年副主任を指定している。そうすることで、学年主任ではない、発展ステージ・指導ステージの職員の自覚を促すことも意図している。

イ 状況によりサポートする教諭の指定

生徒指導主任や体育主任など、主要分掌の主任に、意図的にミドルリーダーとして期待する職員を配置することがある。その際には、必ずその職務の経験者等を「〇〇副主任」「〇〇サポート」等として配置または指定している。

そうすることで、体験しながら学び成功体験を得ることができる。成功体験は自信となり、独り立ちしたときに活かされると思われる。

糸満市立糸満南小学校（児童788名、県費教職員48名）

本校は、埋め立て事業による新興住宅地開発に伴う人口増加の受け皿として現在地に14年前に移転してきた。移転当初の在籍は450名程度であったが、地元出身者の子ども達だけでなく、県内の他地域や本土からの移住者の増加に伴い、近年は在籍児童800名程度で推移している。

教職員の育成ステージ別構成は、基礎ステージが最も多く43%。次いで指導ステージの30%。充実ステージ16%、発展ステージ10%と続いている。若干ミドルリーダーと呼ばれる充実・発展ステージが少ないように感じるが、指導ステージの教職員が若手の育成やミドルリーダーの育成に力を注いでいるので、現在のところ人材育成は比較的円滑に進んでいる。しかし、教職員の異動を考えると数年先を見通した計画的なミドルリーダーの育成も求められると考える。以上の現状を踏まえ、本校においては次のことに取り組んでいる。

① 評価システムを活用したリーダーの育成

4月当初や自己申告書作成の際に学校経営方針を丁寧に説明し、「沖縄県公立学校教員等育成指標」のキャリアステージに応じた自己目標や目標

達成の手立てについて考えるように促している。特に発展・指導ステージの教職員には、面談時に、学校全体を視野に入れた学校運営への参画を助言し、適宜、管理職との情報交換や助言を行うようにしている。また、最終面談の際に当該年度の成果と課題を丁寧に聞き取り、称賛や次年度へ向けての助言を行っている。

② 任せることによるリーダー育成

「為すことによって学ぶ」という言葉が示すように、人は自分事として行動し、試行錯誤を繰り返し成長していく。ミドルリーダー育成においても、事細かく指示するのではなく任せることが肝要であるとする。

本校では、学校の各種取組において、校長としての方針を示し、後は担当職員に任せるようにし、自分事として考えさせ、行動させることによりリーダーとしての資質・能力の育成を図っている。

また、進捗や課題の確認や相談を管理職で行うようにしたり、称賛やねぎらいの言葉をかけたりし教職員が「やりがい」や「達成感」も感じられるよう配慮している。

③ 学年主任を活用したリーダー育成

小学校においては、学年を単位として教育を行う機会が多い。よつて、その中心となり学年経営を行っている学年主任に、ミドルリーダー育成の視点で、同学年の若手、中堅教職員の育成を行ってもらっている。同学年ということもあり、常に同じ教科指導、生徒指導等に取り組んでいるため、タイムリーな指導・助言を行うことが出来ている。また、学年主任に対しても学年主任会等において学年主任の資質向上をねらいとした、管理職からの助言を積極的に行っている。

④ 各種研修への参加の奨励によるリーダー育成

各種研修会等の情報を全職員に周知し、研修会への積極的な参加を奨励している。研修への参加後は、全職員への資料の提供や伝達講習等を行い、ミドルリーダーのみならず、全教職員の資質向上を図るように取り組んでいる。また、発展ステージにある教職員に対しては教育センター等の長期研修への参加も推奨するようにしている。

南城市立百名小学校（児童202名、県費教職員18名）

校長の経営方針を実践するには、学級担任の役割が重要となる。特に本校のような小規模校では、学級を単位として学習指導や生徒指導を行い、保護者の相談にも対応することが多い。そのため、各担任の学級経営能力を中心とした資質や能力の育成が必要となる。校長は教育目標の共有や学校行事の直接指導を通じ、教職員との意思統一を図っている。また、学校運営の

核となるのは教務主任であり、教務主任の職能が成長することで、教職員全体の成長につながり、学校経営の安定につながる。以下、学級担任と教務主任に対しては、次の点に重点を置いて育成を進める。

① 学級担任の育成

ア 教職員評価システムの活用

管理職との評価面談では、目標指標を活用し、具体的な目標設定を促す。校長は進捗状況を確認しながら意見交換や指導助言を行い、責任感や意欲の向上を図る。教職員の良い点を積極的に伝えることで、「理解されている」「期待されている」という意識を醸成する。

イ 学級担任の生徒指導力の育成

生徒指導の問題への対応力を育成することは、学級経営において極めて重要となる。「いじめ」アンケートの分析は、担任、学年主任、管理職のトリプルチェック体制で行い、校長も積極的に助言を行うことで、適切な対応力を養う。また、各学級で発生した問題については、学級担任が主体となって解決する。その際、随時管理職に報告し、校長の助言を受けながら対応を進める。これにより、担任が自信を持って指導できる環境を整える。

ウ 「起案」制度を活用した職能の成長

校務分掌に関する提案は「起案」として提出し、校長が直接点検・指導を行う仕組みを導入している。起案段階で校長と話し合うことで、良い点や改善点を直接指導してもらい、職能の成長を促進する。この制度により、教職員が主体的に学校運営へ関わることができ、教育の質を高めることにつながる。校長は教職員の提案に対して積極的に助言や改善点を伝えることで、より良いアイデアが生まれるようサポートする。また、起案制度を活用することで、教職員のリーダーシップや問題解決能力の向上にもつなげ、学校全体の発展を促す。

② 教務主任の育成

ア 三役会議の実施

毎週月曜日に校長、教頭、教務主任の三役で会議を行う。ここでは、行事の計画、校内研修の準備、学力向上のための取り組み、生徒指導に関する課題など、学校運営に必要な様々なテーマについて話し合う。特に、教務主任は職員の意見を集め、校長や教頭と共有することで、学校全体の教育環境を向上させる役割を担う。さらに、学校運営を円滑に進めるため、年間を通じた計画を三役会議で検討し、校長の視点を反映した継続的な改善を行う。

イ 「起案」制度の活用

教職員が提案を出す際は「起案」として提出し、教務主任が確認・指導を行う。これにより、教務主任の学校運営全体を見通した助言能力の育成が図られるようにしている。

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 校内体制を整えたり、校務分掌配置を工夫したりすることで、日常的なOJTが推進され、リーダー育成に繋がった。
- ② 校長しての方針を示し任せることにより、教職員が様々なアイデアを出し主体的に学校運営に関わることでミドルリーダーの育成を図ることができた。
- ③ 教務主任が小規模校のリーダーとして果たす役割を自覚し、積極的に職員に関わろうとする姿勢が見られるようになった。

(2) 課題

- ① 学校改革の中核を担うべきミドルリーダー層の意識改革
- ② 年齢・キャリアともにミドルリーダーとしての立場にある教職員への自覚や意欲を促す手立ての工夫
- ③ 一人一人の能力や適性を把握して、無理なく適切に関わることでできる校長の力量

6 おわりに

社会が急激に変化し、これまでの常識が覆されることも多くなるVUCA時代。そのような時代を生き抜く人材を育てる学校は、常に社会の変化を見据え、柔軟に対応・変革していく必要がある。

VUCA時代に対応できる学校（VUCA時代を生き抜く人材を育成する学校）になるために、校長は、ビジョンを明確にし、常に情報を収集し、チャレンジし続け、多様な人材育成を行う必要がある。

中でも、学校で中核的役割を果たすミドルリーダーを育成することは重要である。

校長として、今後も、VUCA時代を見据え、確かな展望を持ち、自ら判断し、行動できるミドルリーダーの組織的・計画的な育成を図っていきたい。

第7分科会

研究主題

命を守る安全・防災教育の推進並びに様々な危機への対応

提 案 者：仲 村 保（豊崎小学校）
 司 会 者：赤 嶺 智 郎（とよみ小学校）
 記 録 者：山 城 真 雄（津嘉山小学校）
 ”：宮 里 安 英（真壁小学校）

1 はじめに

安全・安心な学校経営は学校の最重要課題である。本研究では、安全・安心な学校経営を実現するための具体的な教育実践や教職員研修等の取組を提案する。

2 主題設定の理由

昨今、日本各地では大きな地震の連動発生や自然災害がもたらす被害が一段と危惧されている。また、学校においては、不審者犯罪や交通事故等の子供が被害者となる事件・事故の発生など、児童を取り巻く危機的状況は深刻さを増している。こうした現状において、学校では、安全に関わる知識、危険予測・回避能力等を児童に育てていく安全教育の取組や、教職員の危機管理能力の向上など、様々な危機への対応が求められている。

そこで、本研究では、各学校の事例から、事件・事故及び災害時を想定した具体的な取組や、教職員の危機管理能力の向上などを共有し、児童及び教職員にとって安全・安心な学校づくりを目指した取組を提案する。

3 研究の視点

- (1) 安全教育・防災教育の実践
- (2) 保護者・関係機関との連携
- (3) 職員の「危機管理能力」育成

4 研究の実際

(1) 豊見城市立とよみ小の実践（児童数654名）

本校は、住宅地の中にあり、校庭に多くの樹木が繁り、校内に学童施設があることから、地域の方々が出入りしやすい雰囲気となっている。そのため、不審者訓練の必要性を感じ、毎年実施している。

① 取組前の課題

「隣のクラスや職員室にどう伝えるか」が訓練全体の課題となった。そこで、各教室の入口に緊急事態カードを設置した（図1）。そのカードを児童が持って

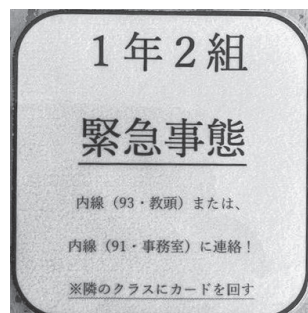


図1 緊急カード

隣のクラスや職員室へ伝える方法で訓練を実施した。

また、避難訓練実施後、犯人とやり取りの現場が見えず、全体としてふりかえりにくいことも課題となった。そこで、今年度は、ビデオ係を設け、犯人侵入から確保までを撮影し、全職員で動画にて避難訓練を振り返った。

② 訓練前の指導

- ア 事件発生時の避難の仕方について話し合う。
- ・「組から荷物が届きました」の放送が、不審者侵入の合図であることを知り、慌てずに落ち着いて担任の指示に従うことを確認する。※隣の教室に緊急事態カードを持っていくことを確認。
 - ・キーワード「おかしもち」の確認を行う。

③ 訓練の実際

ア 警察の指導助言

豊見城警察署より警察官をお願いし、訓練の様子を観察していただき指導助言をうけた。また、訓練終了後に児童へ不審者から身を守ることにについてお話を頂いた。

イ 職員体制

不審者に対し児童避難、不審者を動かさない、その他通報等それぞれの役割を明確にし、実際にやってみて分かる成果や課題をあげた。

④ 訓練後の振り返り

- ア 各学年より反省を取り、また、ビデオを使って犯人とのやりとりも振り返りを行った。

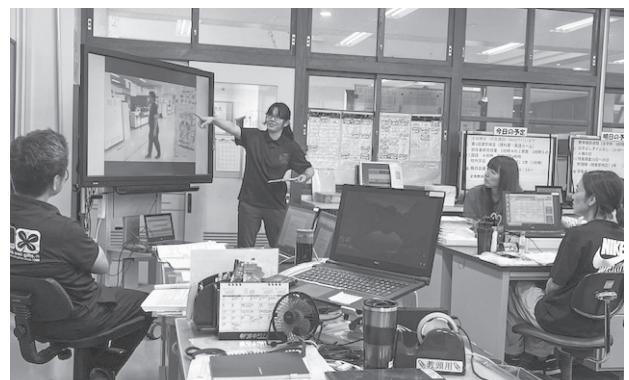


図2 避難年訓練後の動画を使つてのふりかえり

イ 具体的な反省

- ・犯人との距離が近い
- ・避難後の体育館の鍵をいつ、誰が閉めるかを決めたほうが良い
- ・犯人対応で、不在の担任がいるので学年の名簿を持つとよい。

(2) 南風原町立津嘉山小学校の实践（児童数991）

津嘉山小学校は年々児童数が増加し、今年度は991名に達している。喫緊の課題は登校時の交通安全指導である。本校は町内小中学校の共通実践事項として「てくてく登校」を推奨しているが、約半数の児童が途中降車を含め車を利用して登校している。送迎車両が学校周辺の狭い通学路にまで入り込み、それに伴って徒歩登校児童との接触事故の懸念が高まっている。「接触しそうになった」「あぶなかった」等の声が多く寄せられる。

そのため、児童への注意喚起と保護者への呼びかけを行っているが、送迎車両は減っていない。校内への車両乗り入れ禁止や徐行運転についても、随時呼びかけているが改善が難しい。また、現在、PTAや地域のボランティアに立哨を依頼しているがなかなか人が集まらないので、毎朝、町議1名と校長、職員1名が危険個所を担当している。それでも、人手が足りないので時差出勤制度を使って職員を割り当てようとしたが、働き方改革や本来の教職員の仕事ではないことを理由に認められなかった。

そこで、まずは児童へ通学路の危険個所の周知が必要だと考え校長講話を行った。さらに、徒歩登校やその他の事故防止・安全指導まで内容を広げ「危険回避能力」の育成を図ることにした。

また、学校だけでは通学路の安全確保の解決が難しいため、CSの学校運営協議会や南風原町交通安全推進協議会でも直接訴えたり、警察に巡回を要請したりしている。今後は、資料を作成して、具体策を講じるよう町道の管理部署へ直接訴えて解決に取り組んでいきたい。

① 安全についての校長講話

ア 通学路の危険性の周知

道幅が狭く、対向車があると、グリーンベルト内に車両が入り、人身事故につながる。



図3 校長講話の資料

「自分の身は自分で守る」というキーワードを何度も使って、特に通学時の交通安全について、危険個所や事故が発生した場所の周知をおこなった。本校児童の約3割が登校時に車と接触しそうになったと回答している。

イ 徒歩登校（てくてく登校）の推進

徒歩登校は、南風原町の共通実践事項の一つであることや「脳を目覚めさせる」「体力がつく」「気づく力が身につく」などの良さを伝えた。また、津嘉山校区は範囲が広く、地図を見せながら遠くから徒歩で登校している児童らを賞賛した。

ウ その他、学校でのケガの件数について

4・5月の学校内でのケガの発生場所や件数をグラフで示し、日常的なケガ防止・危険回避について考えさせた。児童の中から「なぜ教室でのケガが多いのか」などの質問があった。

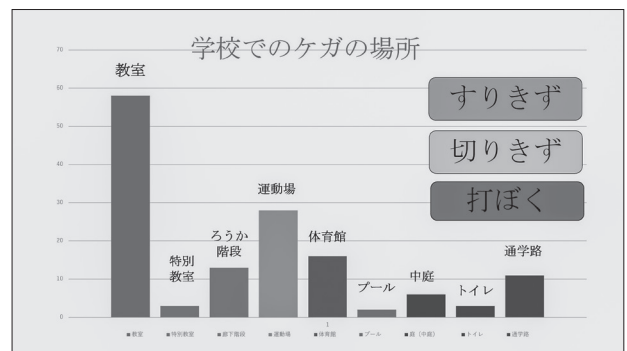


図4 学校でのけがの場所

また、地震や火災、津波や不審者、熱中症や食中毒、ゲームやスマホ依存まで、身の回りの安全に関することを幅広く取り上げた。特に、ゲームやスマホの使いすぎは「自分の身を守る反対のことをしている」と伝えた。

学校便りやメール等を積極的に使って学校安全についての協力を訴えていきたい。

(3) 糸満市立真壁小の実践（児童数149名）

本校は、糸満市中央部の豊かな農業地域にあり、比較的古い集落の中に位置している。校区内には、那覇市と本島南部を結ぶ幹線道路や抜け道が多く登下校時の安全確保には大きな課題がある。

このような環境の中で、学校では子供たちの危険回避能力の育成に加え、地域の力を活用した安全対策にも積極的に取り組んでいる。

① 地域と協働しての朝の見守り活動

本校では、地域のボランティアの協力を得て、毎朝、登校時の交通安全見守り活動を行っている。ボランティア活動はPTAのOBや老人会の方々によって支えられており、朝のあいさつ運動と併せて実施されている。この活動のおかげで、毎朝さわやかな雰囲気広がっている。

また、PTAによる保護者の輪番制によっても、登校時の交通安全を見守っている。さらに、米須交番駐在員の方もパトカーで巡回し、交通安全意識の向上に努めている。



図5 地域ボランティア

② PTAによる啓発活動

PTAでは、交通安全の標語の募集や看板づくりを通じて、児童・保護者、そして地域全体の交通安全意識を高める取組を行っている。



図6 PTA当番の様子

③ 交通安全点検

PTAや地域住民、学校評議員会と協力し、通学路の道路状況や交通の流れを点検し、安全確認を実施している。

④ 交通安全教室

毎年、新入生を対象に糸満警察署の協力で横断歩道の渡り方など基本的な交通ルールを学ぶ講話を実施している。

⑤ 今後の課題

これまで「自分の安全は自分で守る」ことを重視した指導においては、子供たちの危険回避能力のさらなる強化を目指してきた。しかし、人材不足によるボランティアの減少が課題となっており、今後も地域と協力しながら交通安全活動を引き継いでいく必要がある。

(4) 豊見城市立豊崎小の実践（児童数691名）

本校は、豊見城市南西部に位置した埋め立て地区にあり、学校の西側は東シナ海に面している。西側の人工ビーチから引き込まれた河川が学校のある豊崎地区をぐるっと巡るように流れており、津波が襲来した場合、河川を遡上して学校周辺が浸水する可能性もある。市の防災マップでは、豊崎地区は0.3～1.0M未満の津波想定地区に指定されているが想定外の事態も考えられる。

また、昨年4月3日に発令された津波警報に伴う避難では本校のみならず周辺地域の方々の対応も含め多くの課題が残った。そのため、地震・津波に伴う避難においては、本校の児童・職員だけでなく近接する豊崎中学校や保護者、地域の方々との連携を図った取り組みが求められている。

① 6年4月3日の課題

昨年4月3日に起きた台湾東部沖地震によって沖縄県内に発令された津波警報により、各所でその対応に混乱を呈したことは記憶にまだ新しいところである。本校でも近隣の園児や地域の方々が学校に避難し、飲み水やトイレの確保、日よけのカバー設置、児童の所在確認等で多くの課題が残り、避難指示や適切な対応をとるために日頃から行政や関係部署と連携を図る必要があることが分かった。



図7 屋上への避難訓練の様子

② 小中連携した防災の取組

隣接する豊崎中学校とも課題を共有し職員の地震・津波に対する知識と意識の涵養を目的に今年度4月始業式を前に小中合同で防災アドバイザー賀数淳氏を講師に校内研修を行った。

夏休みには、11月5日に行われる地震・津波避難訓練に向けて実施要項の策定を合同で行い、避難にあたっての小中での役割分担を行う予定である。



図8 豊崎中への避難の様子

③ コミュニティースクールとしての取組

外国人を含めた観光客が来場する商業施設が近隣にあることや小中学生がいない世帯、近くに親類・縁者がいない世帯など新興住宅地域である豊崎小校区ならではの課題がある。実際に津波が襲来した場合、上記の方々の避難の指示、誘導、対応等で混乱が想定される。そのため「地域の人は地域で守る」を意識して地域の防災組織づくりの必要性をコミュニティースクールの会議で共有した。現状は、その必要性を強く感じてはいるが、誰が、いつまでに、どのように取り組んでいくかなどの課題が多いのが実情であり行政とも連携して取り組む必要がある。

④ PTCAとしての取組

新興住宅地地域として保護者同士の繋がりの弱さや保護者が他の保護者の児童を知らない状況がある。以前は、豊崎地区にも子ども会があったようだが現在はなく、地域での保護者同士の繋がりに大きな課題がある。そのためPTCAとしては地域の繋がりを再構築する取組として前年度より夏休みのラジオ体操に取り組んでいる。ラジオ体操を通して形成した地域での保護者の繋がりを、地域の防災につなげるねらいがある。また、PTCA主催で親子を対象とした防災講話や防災食づくりに取り組む計画もある。

⑤ 学校の取組

夏休みのラジオ体操の取り組みのために、地区を8つのブロックに分け、それに合わせて子供たちも8つのグループに班編成するが、それは学校にて行っている。この班編成は、夏休みのラジオ体操班と防災グループの班を兼ねており、帰る方向や兄弟組等を考慮した編成となっている。

また、5年生の総合的学習では「防災」をキーワードに、地震・津波のメカニズムや防災食づく

くり、防災講話等を教科横断的に取り組む計画もある。

⑥ 豊崎小校長としての関わり

「防災」をキーワードに学校と地域、保護者を繋ぐことを意識している。新興住宅地域だけに、保護者間の繋がりや地域との結びつきが弱いいため、PTCAやコミュニティースクール、近接する豊崎中学校や保育園、自治会、行政等との連携を図ることが校長に求められている。また、場合においては豊崎地区の商業施設との連携も図る必要がある。校長には、命に係わる「防災」を核に保護者や地域との取り組みを連携して行うことで学校・保護者・地域の三者の機能的な結びつきを強化するコーディネーターの役割が求められている。

5 校長としての関わり（全体）

- ・職員一人一人が「自分事」として児童の命を守り、安全で安心した教育環境づくりを行うという意識を向上させるために、日々の講話や適切な研修を行うように取り組んでいる。
- ・担任や関係者等と情報交換を密にするため、また、各機関への報告や指導助言を的確に受けられるように「事前の関係づくり」「組織としての振り返り」「報告書作成」等に努力している。

6 成果と課題（全体）

(1) 成果

- ・訓練をしっかりと振り返ることや、職員研修、校長講話などを計画的・実践的に行うこと、PTAや関係機関との効果的な連携により、安全・防災に対する職員の危機管理意識を高めることができた。

(2) 課題

- ・今後は、教師、児童の危険回避の視点へも指導の幅を広げていくことが必要である。
- ・様々な事件や事故から児童を守るためには、保護者や地域、学校が更に連携・協力し取り組む必要がある。

第8分科会

研究主題

社会形成能力を育む教育の推進
～自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の
推進～

提 案 者：比 嘉 豊（瀬喜田小学校）

司 会 者：屋 良 篤（松田小学校）

記 録 者：玉 城 史 江（本部小学校）

1 はじめに

共同研究校3校それぞれの地域には、地域の行事や歴史・文化、地域人材等の「ヒト・モノ・コト」といわれる地域教育資源が豊かにある。各校は、それぞれの地域教育資源を活用した特色あるキャリア教育に取り組んでおり、「基礎的・汎用的能力」の育成をめざした教育活動が展開されている。

昨今、予測困難な時代といわれる中、子ども達に自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、より良い社会や人生を切り開いていく力が求められ、キャリア教育の充実が重要視されている。学校では「児童が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につけていくことができるよう特別活動を要しつつ各教科の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」とされ、子ども達がよりよい人生を送るために、社会形成能力や人間関係形成能力の育成が重要視されている。

そこで本研究では、社会形成能力を育むための教育活動やキャリア教育の推進について研究を進める。

2 主題設定の理由

グローバル化や少子高齢化、人工知能（AI）等の技術革新が進み、社会の多様化・急速な変化により将来の予測が困難な時代といわれている。第2期教育振興基本計画では、これからの持続可能な活力ある社会に向け「自立・協働・創造」の三つの理念が示された。そこでは「自立」した人間として、主体的に判断し多様な人々と「協働」しながら新たな価値を「創造」する人材の育成が求められている。

学校では、子ども達が学びをとおり、自ら学び、自ら考え、自ら判断・行動し、より良い社会や人生を切り拓いていく「生きる力」の育成が求められている。そのため、学習指導要領においてキャリア教育の一層の充実を図ることが明示された。

「沖縄県キャリア教育基本方針」では、すべての教育活動を通じて、児童・生徒に4つの「基礎的・汎用的能力」の育成を求めている。「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」の4つの力で、県ではそれを「かかわる力・振り返る力・やりぬく力・みとおす力」とし、「か・

ふ・や・み」としてわかりやすく示している。

主題に係る「人間関係形成・社会形成能力」（かかわる力）とは、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聞いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力である。社会とのかかわりの中で生活をしていく上で、基礎となる能力であり、価値の多様化が進む現代社会においては、様々な他者を認めつつ協働していく力が必要である。

そこで、本分科会では、これからの社会を創りあげていくために必要な知性と創造性とともに、豊かな人間性を身に付けさせるため、自立・協働・創造の心を育むキャリア教育を推進する必要があると考え、本主題を設定した。

3 研究の視点

- 地域教育資源及び学校の特色を活用したキャリア教育の推進
- 校長の果たす役割と指導性

4 研究の実際

【本部町立本部小学校】

(1) 本校の取組

本町では、令和5年度に行政・地域・学校の三者において話し合いを重ね、「キャリア教育で育てたい力」を設定。それを踏まえ各校において各学年の「キャリア教育年間指導計画」を作成した。本校では、「学校・地域社会での他者との豊かな関わりを通して、自らの生き方について主体的に考え、夢や目標に向かって努力し続けようとする児童の育成」をキャリア教育学校目標とし、「生活科」「総合的な学習の時間」をとおして地域資源を活用し、地域人材と連携した取り組みを行っている。

① 「もとぶ型キャリア教育」の推進

もとぶ型キャリア教育は、「沖縄県キャリア教育の基本方針」に掲げられた「4つの基礎的汎用能力（か・ふ・や・み）」を、各校の「生活科」「総合的な学習の時間」にキャリア教育の重点となる取り組みを設定し育成している。

各校にキャリア教育推進の担当「魅力化スタッフ」が配置されており、学校と地域をつなぐ役割を担い、コーディネーターとして学校の担当者と連携した取組を推進している。

② 地域資源・地域人材の活用

教育課程全般にわたり、地域資源、地域人材を活用した取組が進められている。一学期の総合的な学習の時間において、3年生は「地域の自然」をテーマに本部町の自然や土壌を活かしたアセロラ栽培の様子を見学し、事業所の方から話を聞く。4年生は、「地域の文化」をテーマに渡久地区長より渡久地区に伝わる大綱引きや豊年祭等の伝統行事について学んだ。5年生は、「地域の産業」をテーマに地場産業について学び商品開発のプレゼンテーションを地元企業に行うことを出口としている。6年生では、5年生で学んだ地場産業での学びをつなぎ、7月に町内の26の企業でジョブシャドウイングを実施した。また、初めて毛筆で学ぶ3年生の国語の学習では、本部町書写書道研究会の方々が、ゲストティーチャーとして習字の指導を行っている。その学びを町教育委員会が主体となっている「本書研」へ取組につなげ、書写教育の充実、推進を行っている。

前述のように、3年生からの系統性のある学習を展開することにより、これまでの学びや体験を活かし、自分の考えを正確に伝え、協力して社会に参画し、社会を形成していくという社会形成力の礎を育てることをねらいとしている。特に高学年の学習においては、児童個々の夢につなげ地場産業の学習やジョブシャドウイングでの学びを商品開発に向けたプレゼンテーションにより、自分の考えを伝え協力して社会に参画し、社会を形成していくという社会形成力の礎の育成をめざしている。



渡久地区の豊年祭を学ぶ様子（写真1）



R6の商品開発プレゼンテーションの様子（写真2）

(2) 校長の役割と指導性

校長が本町出身ということもあり、地域人材や地域について知っていることが何よりも強みである。その上、町雇用の魅力化スタッフによる支援が地域と学校をより良くつなぐ働きをしている。社会形成力を培うため、校長としてキャリア教育を形骸化させることなく、キャリア形成にとって重要な自らの力で生き方を選択していくことができるよう、教育課程において、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動などで関連付け、体系的に実施していくこと、キャリア教育の重要性を踏まえ、指導にあたる教職員への研修や意識改革、組織体制づくりに努めていきたい。また学校教育において育成すべき資質・能力の土台となる「か・ふ・や・み」を、学校生活全体を通して育成することをめざし学校や地域の特色を活かした地域資源の活用を図り、児童・職員・地域人材・行政と連携したキャリア教育の推進を図りたい。



名刺交換の様子（写真1）



マネー講座の様子（写真2）

【宜野座村立松田小学校】

(1) 本校の取組

本校は一地区一学校で、地域とは密接に連携し、地域人材を活用したキャリア教育やそれに繋がる校外学習を計画的に進めている。5月には「ようこそ先輩お話し会」と題して、卒業生に講話をしてもらった。学生の頃に学ぶ大事な事や就職して感じた学びの大切さなどをお話してもらい「なりたい自分」になるために今大切な事などを視聴させてもらった。また、高学年では、5月にマナー講座、7月にマナー講座を開いた。どちらも講師をお招きし、マナー講座では、人生のライフプランを収入と支出を比べながら具体的に試算を示して検証した。職種による収入の違いを知り、なりたい自分になるためには今何が必要か、何のために学習するのかなどを解いた。教科書では学べない内容であった。また、マナー講座では、職場体験学習に向けて、自作の名刺交換練習をしたり、マナーの5原則について学んだりした。

子ども達の将来を見据え、キャリア教育として発達段階に応じた知識や術を身につける事、あるいは体験させることは教育活動の中で大変重要と捉える。これからもキャリア教育を取り入れ、規範意識や職業的自立に必要な基礎的、汎用的な能力等の生きる力を育てていきたい。

(2) 校長の役割と指導性

沖縄県キャリア教育の基本方針の中で「基礎的・汎用的能力の育成」が示されている。その具現化を図るために日々の授業はもちろん、地域人材の活用や体験的教育活動等も計画的に取り入れ、学校全体で実践していく事が大切である。

校長としてPDCAサイクルを踏まえた教育計画を作成し、地域の「人・物・事」を積極的に活用した教育活動を推し進め、実践的・活動的な授業づくりをめざす。それらは、子ども達の社会性を高め、子ども達が将来の人生をよりよく生きるための術として大変重要である。

グローバル社会に生きるこれからの子ども達に、地域の魅力に気づかせ、地域を支える職業や地域の特性を理解させると共に、多種多様な職業があることに気づかせ、社会的、職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を身につけさせたい。

【名護市立瀬喜田小学校】

(1) 本校の取組

本校は児童37名の小規模校である。少人数のよさを生かした教育活動、地域資源を生かした体験活動、教育委員会や東江中学校区学校運営協議会（コミュニティスクール）との連携した教育活動等、「社会

形成能力」に係る本校での取組について紹介する。

① たてわり班活動と異学年とのかかわり

本校では年間を通し、たてわり班活動を実施している。5・6年リーダーを中心に週に1回、朝のたてわり班清掃や児童会行事等の諸行事で、たてわり班での取り組みを進めている。日頃の教科等の学習活動や学校生活でも学年間の交流が行われている。

児童の自主性、自治的活動を推進し、全校遠足や1年生を迎える会、水遊び、学校かくれんぼなど、児童会が自主的自発的にレクなどを企画している。

もっと色々なことを自分たちの力でやりたい、学校生活を自分たちでよくしていきたいという声がうまれ、児童が関わりながら自治の態度・自主性が育まれている。



1年生を迎える会（左）縦割り清掃（右）（写真2・3）

② 体験的な学習の充実と地域とのかかわり

総合的な学習、教科等で地域の方を招き、現地での体験学習等の地域資源を活用した教育活動を推進している。プセナ海中公園と連携したサンゴ海洋学習（3・4年）、農家と連携したキク栽培（2年）、田植えや稲刈り体験・稲栽培（5・6年）、近隣ゴルフ場での整備作業や大会スタッフ体験（5・6年）を行なっている。名護市教育委員会の企画推進するジョブシャドウイング（5・6年）では、職業人講話や職場体験、マナー講座を行っている。

校区保育園との交流（1・2年おもちゃランド）やスタートカリキュラムにより入学時の児童が小学校生活へのスムーズに適応する姿が見られた。また進学後、多人数の中学校生活へスムーズに適応することをめざし中学校見学や行事への参加、近隣小学校との交流（合同授業）を行っている。

学校運営協議会と連携し地域資源を生かした体験活動や地域課題へ向け取り組んでいる。「朝のあいさつ見守り運動」への運営委員・地域の方の参加、体験学習の支援など地域課題解決に向け連携して行っている。



稲刈りの様子（写真1）

（2）校長の役割と指導性

社会形成能力の育成は、すべての教育活動を通じて育成され、横断的な教育活動を充実させたカリキュラムマネジメントが重要である。教育課程の編成や計画・実施においてキャリア教育の教育的意義や位置づけについて全職員で共通理解を図った。

キャリア教育の校内体制を整え、キャリア教育担当を中心に、地域連携担当、総合的な学習担当、特別活動担当等が連携し、年間を通した体系的組織的な教育活動を行う。

また学校便りの発行や地域公民館（区長）との密な連携を通して、家庭や地域に取組を発信し、体験的な学習についての情報を収集し、協働体制を整える。今後、教育委員会などの行政やコミュニティスクール（東江中校区学校運営協議会）と連携し、地域学校協働活動推進員を活用したキャリア教育の充実を図ることが必要である。

5 成果と課題

（1）成果

- ① 地域連携コーディネーターと総合的な学習担当、特別活動主任、学級担任がキャリア教育の視点、地域社会とのつながりを意識した授業を計画・実践し、社会形成能力育成に向けたキャリア教育が充実してきた。
- ② 教育委員会や学校運営協議会等との連携・協働体制を構築することで、より広い地域資源・人材活用へつなげることができた。
- ③ 校長の理念を明確に示し、職員と共通理解を図ることで、社会形成能力を育む教育活動が、組織的・計画的に展開することができた。
- ④ 児童が身近な人々の職業を実際に体験したり話を聞いたりすることで、なりたい自分へのアプローチとなっている。また他者と関わる力の育成が日ごろの主体的・対話的な深い学びに向けた授業改善へとつながっている。

（2）課題

- ① 「ヒト・モノ・コト」地域教育資源を活用したキャリア教育が、単発的ではなく持続可能な取組となるよう、学校・家庭・地域・関係機関が連携・協働できる体制を整える必要がある。
- ② 外部人材との打ち合わせやスケジュール調整のための時間の確保が難しい。連絡・調整を教育委員会や学校運営協議会と連携・協働しながら取り組んでいく。また体制を構築していく。
- ③ 形骸化した教育活動にならないように「か・ふ・や・み」などの児童につけたい力や活動内容、地域との連携等について適宜ふり返り、PDCAサイクルを活用しながら時代に即した児童の社会形成能力の育成をめざしていく。
- ④ 接続期や年度の児童の発達段階を踏まえ、キャリアパスポートのさらなる効果的な活用を図る必要がある。

6 おわりに

社会形成能力を育む教育活動の一つとして、地域教育資源を活用したキャリア教育を推進してきた。

自立・協働・創造の心を育むために、様々な地域の魅力を探り、体験する活動を行っている。そのような教育活動を通して、かかわる力、振り返る力、やりぬく力、見通す力が育まれて、課題解決能力やキャリアプランニング能力が高まってきていると考える。

これからグローバル社会に生きる子ども達に、地域を支える職業や地域の特性を理解させると共に、多種多様な職業があることに気づかせ、社会的、職業的自立に向け必要な基盤となる能力や態度を身につけさせることは大変重要である。

今後も、自立・協働・創造の心を育むキャリア教育の推進をキーワードに、児童一人一人の生きる力を高めていきたい。

第9分科会

研究主題

自立と共生を図り実践的な態度を育む教育の
推進並びに家庭・地域等との連携

提 案 者：下 地 美和子（下地小学校）

司 会 者：村 吉 博 勝（東小学校）

記 録 者：名 城 歩（鏡原小学校）

1 はじめに

現代は、VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) の時代と呼ばれ、予測不能で変化の激しい社会である。学校現場では不登校や多様な背景を持つ子どもたちの増加など、さまざまな課題に直面している。そうした状況で特別支援教育を進めるにあたり、学校現場では子どもたちの個別のニーズを深く理解し、子ども一人ひとりの特性や学習スタイルに合わせた個別最適な学びの実現に向け取り組んでいく必要がある。また、すべての教員がチームとして連携し、情報を共有する体制を構築することも重要である。さらに、ICTを積極的に活用し、学びの機会を広げることで、すべての子どもが未来を切り開くための力を育むことが不可欠である。

2 主題設定理由

特別支援教育のねらいは、障害にある幼児児童生徒が自立し社会参加できるよう個々の教育的ニーズを踏まえて能力を高め、生活や学習上の困難を改善・克服するための指導と支援を行うことである。しかし、学校現場では個別のニーズに応じた指導や支援のあり方について課題を抱えている。子どもの自立を図る特別支援教育は、学校生活をスムーズに送るだけでなく、将来にわたって社会の中で自立した生活を送るための基礎を築くことも大切であり、学習能力の向上だけでなく、生活スキルやコミュニケーション能力、自己肯定感等の力も育み、生きる力を身につけさせなければならない。

そこで、本研究では校長のリーダーシップのもと、校内支援体制の充実を図るために身体的・情緒的な発達上の障害や学習障害を持つ児童に対して、その特性やニーズに合わせた教育・支援を提供するために個別支援計画を見直しや自校での自立活動の充実や他校との合同自立活動を通して特別支援教育の充実に向けた研究を進めていきたい。

3 研究の視点

学校では、子どもたちが共に学校生活をおくる中で互いの人格や個性を尊重する教育が行われている。特に支援を要する子どもは、その教育的ニーズに応え、将来の自立や社会参画を目指した特別支援教育の充実を図っていく必要があり、校長としては特別支援教育への理解を

深めリーダーシップを図るために以下の研究を進める。

- (1) 特別支援教育を推進する校内体制の充実
特別支援学級、通級学級及び支援員との連携を図るための校長の役割
- (2) 自立活動の充実
様々な特性を持ち困難を抱えている子どもたちへの充実した自立活動の推進

4 研究の実際

【宮古島市立東小学校】

- (1) 特別支援教育を推進する校内体制の充実
東小学校には特別支援学級5クラス、通級教室3クラス、校内自立支援教室が1クラスと特別支援に関わるクラスが9クラスある。そして、特別支援教育支援員が5名おり、特別支援教育に多くの職員が関わっている、その中でいくつかの課題が見えてきた。

① 支援学級と通級学級との連携

支援学級と通級学級では共に支援を要する子どもたちの指導・支援に携わっているが、一方は学級担任、もう一方は担任でない。同じ特別支援教育という枠の中にある学級ではあるが職員間での連携が十分でないという実態があった。校長として職員間の調和を保ち職員が気持ちよく職務に取り組んでもらうために職員とのコミュニケーションを積極的に取り、それぞれの職務における悩みや課題について意見交換をする機会を多くもち、それぞれの学級（支援学級と通級学級）の課題や取り組みを確認するとともに、両学級で共通理解する場合（校内特別支援委員会【週1回】）を設け互いに連携を深める取り組みを行っている。

② 特別教育支援員との連携

東小学校には、5名の支援員がおり特別支援コーディネーターの指示のもと担当する子どもたちに関わっている。支援員の先生方は、日々対応が難しい子どもにも関わっていかねばならないが、支援員の中には初めての学校現場の支援員もいて、支援員が抱える悩みや疑問について改善されないまま日々の業務に追われ一日が終わる場合もある。校長としては、支援員の

働きやすさを考慮していく必要がある。そこで、週1回「サポ会」という支援員との話し合いの場を設け、支援に関する事や困り感等について意見交換をする場を設けている。

(2) 自立活動の充実

① 個別の自立活動指導計画の作成

自立活動は、子どもが自立を目指し、障害による学習上または生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、心身の調和的発達の基礎を培うことをねらいとしている。東小では、自立活動の指導内容区分である6区分27項目を元に、子ども一人一人の障害や特性および心身の発達の段階等に応じた、自立活動指導計画書を作成し指導を行っている。

② 自立活動における普通学級との連携

自立活動は支援学級や通級学級で主に行われるが、通級学級に通う子どもは所属が普通学級で担任も別にいる。また、通う子どもは正式通級と校内裁量通級があり指導にける時間は異なってくる。そのため、自立活動を行う上で学級担任との連携を図り、自立活動の指導区分や内容について十分に理解と状況を共有することで保護者への説明を円滑に行うことができる。

③ 校内における合同自立活動

東小では、毎週月曜日の1校時に、全支援学級合同での自立活動を行っている。31名の子どもたちが一同に体育館や教室で、「リズム運動」や「サーキットトレーニング」、「七夕製作と発表」、「紙飛行機飛ばし」等の合同自立活動を行っている。それぞれの活動は、自立活動の6区分27項目で見ると、「リズム運動」や「サーキットトレーニング」は5-(1)、3-(4)、七夕製作・発表では5-(3)、6-(1)でねらい絞って活動に取り組ませている。



④ 他校との合同自立活動の取り組み

自立活動の取り組みは他に、下地小学校との合同の自立活動にも取り組みも行った。取り組みのねらいは、一緒に行動し楽しむことを通して、他者理解の対人スキルを向上させたいとの思いから始めました。活動は、クイズやけん玉遊び、風船バレーなど個人でできるもののグループとするもの両方を取り入れ、なるべく参加する子どもたちが楽しむことができる活動にしました。



⑤ 校長としての関わり

各学級で取り組む自立活動は、子ども一人一人の障害や学習状況の困難をみとり指導計画を作成し取り組んではいるが、計画書がバラバラであったので、自立活動シートを統一した。また、合同による自立活動の取り組みが支援学級外の先生方に、十分に伝わっていない状態であったので、校内研修や校長だより等で周知するとともに、特別支援に関わる教師間の連携に校長が積極的に関わり、風通しのよい環境に務めた。

(3) 成果と課題

特別支援学級と通級学級それぞれに校長が関わることで、連携がスムーズになり、それぞれの学級の課題がオープンになってきた。また、自立活動の取り組みが子ども一人一人に応じて取り組んでいることの共通理解が深まった。課題は、自立活動の評価が十分に行えていないこと、その評価が通常学級の担任と連携が十分でないことである。

【宮古島市立下地小学校】

(1) 特別支援教育の推進を推進する校内体制の充実

本校は「㊦～真剣に（聴き伝え）㊧～持ち味生かして（支え合い）㊨～自分から（主体的に行動する）」という学校スローガンを掲げ、組織的かつ継続的な特別支援教育の推進を図っている。全児童数193名、学級数は10学級、その内特別支援学級は、知的1、情緒1の2学級で、他に2つの通級教室を設置。特別支援コーディネーターは経験豊富で使命感のある教諭を当てている。支援員は2名。毎年年度当初に教職員全員で特別支援児の情報を共有しチームとして連携し、児童の実態や教師の困り感に焦点を当てた対応と、学校全体でインクルーシブ教育の推進を組織的・意欲的に取り組んでいる。

〔学校全体の取り組み〕

① 組織的な会議で職員間の連携を図る

ア 児童支援部会：月に1回特別支援と生徒指導の課題を複合的に捉え、情報共有と対応を検討。

イ 特別支援ミーティング：週に1回、コーディネーターを中心に、特別支援学級担任と支援員で「困り感」を共有し、具体的な

対応策を検討。

ウ ブリーフミーティング：今年度より教頭主導で実施。短時間での児童の対応策の検討を行う。

② 本校の課題に応じた取り組み

ア SST：本校の課題の4つのスキル「自己認知」「言葉表現」「気持ち認知」「コミュニケーション」を年間を通して取り組み、社会性を育む。

イ コグトレ：毎週1回朝の学習の15分、今年度は「聞く力」「見る力」「覚える力」に絞り、学習の基礎となる認知機能を高める。

ウ WEBQUテスト：年2回実施。児童の実態を正確に見取り、学級経営に活かすと共に、個々に応じた指導と対応を図る。校内研修で解釈の仕方や適切な指導、個に応じた対応方法を学ぶ。

③ 教職員の専門性の向上をめざして

ア 琉球大学の丹野清彦先生を継続して招聘し、児童の特性のみとり、対応方法について学ぶ。

イ 宮古地区の特別支援教育を担う「わいどーティチャーズ研究会」への参加。事務局が本校教員のため校内研として繋げやすい。発達障害の概念学習、コグトレを用いた支援方法、QUテストの見方、児童精神科医の講演等にて、知識や実践を学び、校内の取り組みに活かす。

ウ 小中合同研修会として、特別支援を必要とする児童の道徳科の授業づくりの研修会を開催。

④ 児童の「学びの場」と「居場所づくり」の連携コーディネーターが常に担任と連携を取り、特別支援学級、通常学級や通級教室との連携強化を図っている。通常学級で「困り感」を抱える児童に「おためし通級」で経過を見ながら、よりよい「学びの場」を探る。通級教室で「出来た！」という成功体験を重ね自信を付け自立へ繋げる。担任にフィードバックし、その後の児童の様子を継続してみとる。今年度は、特別支援学級の児童3名が通常学級への措置替えを行うことができた。また、スポーツクラブ活動が盛んな本校では、児童の情報を指導者と共有し、支援や指導に活かしている。好きなスポーツで得意を伸ばし活躍する場を得ている。さらに、学童の園長先生と情報交換を行い放課後の過ごし方などの連携を図っている。

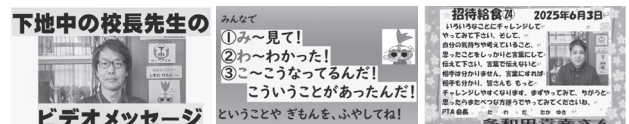
[校長の取り組み]

① 「風通しの良い職場・学校づくり」を心がけ教職員の日常的な情報交換や保護者・地域への積極的な声かけ、学校便りやブログ等で連携を密にする。直接相談等も受ける。

② 校長講話：「個性」「持ち味を活かす」等の内容を扱い意識を高める。プレゼンを作成し、文字の大きさや色など、どの児童にも分かりやすく配慮する。

③ 「招待給食」の実施：下地小に関わる人を給食に招き全児童に紹介。様々な人の存在や関係性などを知り、児童の人間関係の範囲を広げる。クイズやビデオレターを活用し興味を持たせる手立てを仕組みながら実施。

④ 「みわこ校長先生タイム」を実施：児童の身近なニュースを紹介し、周囲への事象に対して興味関心をもたせ、知識を増やし視野を広げる事を目的とする。オンラインで不定期に実施。「**み**～見て、**わ**～分かった！**こ**～こうなっているんだ！」という視点を示し、何のためにするのかを繰り返し提示、視覚に訴え楽しく、興味を持つ方法で紹介していく。評判は良く、児童の興味関心、意欲の向上にも繋がっている。最近では児童や教師から「この内容を紹介して」とリクエストが来る。



⑤ 「下地良くし隊」を児童館長、こども園長、小・中学校長で組織し「地域の子はみんなで育てる」を合言葉に園児・児童・生徒の環境作りに取り組んでいる。

(2) 自立活動の充実

[特別支援学級での取り組み]

① 「持ち味をいかした」～得意を活かす活動

児童の自己肯定感向上のため、「料理好き」な児童を中心に、料理を取り入れた自立支援を行う。保護者の協力も得て、遠足で自作の卵焼きを配ったり、クリスマス会でホットケーキを作ったり、十五夜で団子作りをしたりする活動は、児童の自立心と自己肯定感を育み、他の児童の意欲向上にも繋がった。



② 週2回の自立活動の充実

ア 粗大運動（月曜日1校時）：全身を使う粗大運動では、グループでのゲームやコグトレ棒などを使い、教師の動きを模倣することにより基本的な動作を習得する。継続的な活動を通じ、運動能力の向上が見られ、応用的な動きにも挑戦。

イ 微細運動（水曜日1校時）：微細運動では、季節の飾りやカレンダーを作成。ハサミやノリ、色鉛筆などを使い、力加減や集中力を養う。開始当初と比べ驚くほどの進歩が見られ、児童は楽しみながら意欲的に取り組んでいる。



③ 他校との合同自立活動

ア 「ダイナミック・リズム」の実践。4校から38名の児童と教員が集まり、集団のダイナミックな動きの中で、児童の心身の発達を促し、自立コントロール力を身につけることを目的とする。

当日は、合同活動を通じて他校の児童との交流も楽しみ、会場校として児童が司会等の役割を担い、仲間と協力する大切さを学んだ。役割をやりきった達成感は、その後の大きな自信に繋がった。



イ 東小学校との連携：本校より大人数の東小学校に出向き、自立活動を行った。本校児童は少人数ではあったが、東小の児童にも自然に溶け込み、自ら積極的に発表するなど、交流を通じて社交性や積極性を高めた。

④ こ小中連携との支援体制

ア こ小連携：就学前に特別支援コーディネーターと1年担任が園に出向き、事前の児童把握による早期発見・早期支援に努めている。

イ 小中連携：特別支援学級の高学年の児童と保護者が中学校を訪問し、普通学級や支援学級、通級学級を参観し、中学校の様子を理解してもらう。また中学の担当教諭を小学校に招き、参観を通して児童の実態を事前に把握してもらい、スムーズな中学校への移行支援に繋げている。日頃より中学校との連携は大変良好である。

5 成果と課題

成果として、全教職員が連携し、児童の自己肯定感を育む多様な支援とインクルーシブ教育を推進できた。課題としては、誰が担当しても質の高い支援が提供できる仕組みづくりと、通常学級での個別支援をさらに強化し、全ての児童が安心して学べる環境を整える事である。

6 おわりに

特別支援の推進には、学校全体が一丸となった組織的な取り組みが必要である。教職員の密な連携や、個々の児童に合った自立活動の充実が、全ての児童への自立と社会参加に向けた基盤となる。今後は、支援の持続性を高めるため、教職員の負担軽減と専門性の向上に取り組み、更なる連携強化と指導法の改善に努め、児童が未来を切り開く力を育むための教育を邁進していきたい。

第10分科会

研究主題

新しい時代をつくるために必要とされる資質・能力を育む、校長の理念と指導性

提 案 者：佐 伯 賢（宮里小学校）
 司 会 者：坂 本 哲 隆（美里小学校）
 記 録 者：石 川 真奈美（北美小学校）
 ブロック共同研究者：渡久地 裕 子（越来小学校）
 ”：浦 崎 景 子（美原小学校）

1 はじめに

子どもたちを取り巻く環境は、社会の急激な変化によって予測困難な時代となりつつある。また、学校現場においては、教員不足や多様化する児童・保護者への対応、メンタルヘルスの不調による休職者の増加などがあり、喫緊の課題となっている。このような状況の中、未来を担う子どもたちには、自ら課題を見つけ、情報を収集・分析し、解決策を考える力が求められている。その資質や能力を育成するためには、これまでのように受け身で知識を得るだけでなく、自ら学び続ける力を育成することが肝要である。

2 主題設定の理由

これからの学校教育には、価値観の変化や多様化する時代を生き抜く力となる、「自立した学習者」を育成することが求められている。本県では、学力向上の柱として主体的・対話的で深い学びの実現を掲げ授業改善や探究的な学びを推進している。これらを具現化するためには校長が、未来を見据えた理念を明確に示し、学校・家庭・地域と共有することや教職員及び地域との協働に指導性を発揮し組織を活性化させることが重要である。そして、有効な実践研究を各校で共有することが、未来を担う子どもたちの幸せや新しい時代をつくる学校教育の充実に寄与すると考えるため、本主題を設定し研究を進める。

3 研究の視点

- (1) 「自立した学習者」育成プロジェクトの推進
- (2) 学びの質の高い授業改善
- (3) 校長の理念と指導性を活かした関わり

4 研究の実際（※校長の関わりを具体的に示す）

(1) 宮里小学校（児童数1014名）

本校では、児童一人一人が自己存在感を実感し、自己実現を図ることができるよう、全教職員が共通理解し、授業改善に取り組んでいる。また、県の「自立した学習者」育成プロジェクトを受け、校内研修において児童の協働的な学びを充実させ、学び合う児童の育成を目指している。

① 「自立した学習者」育成の主な取り組み内容

ア 育成を目指す資質・能力について設定し、授業でのめやすにした。

- ・「みつける力」（気づき・感動・共感）
- ・「やさしくかわる力」（思いやり・協力）
- ・「ザ☆チャレンジ」（自立・やりぬく力）
- ・「といをもち考える力」（根拠）

イ 認め合う・学び合う学級の基盤づくりとしての「フリートーク」

- ・毎週月曜と金曜の8:20～8:35の15分間
- ・テーマに沿った発表・対話を行う。
- ・全体または少人数・ペアでの対話。
- ・傾聴力・対話力・考えの共有化・考えの比較等を養う。

ウ 日常授業を振り返る「リフレクション」の実施

- ・毎月2回、異学年グループでそれぞれの授業実践を持ち寄り、成果・課題・改善策を話し合う。
- ・授業改善に繋がることを目的としている。

エ 授業改善のための一人一授業の推進

- ・9月から2月の期間に授業研究を行う。
- ・一人1回以上行う。

オ 算数科における「自由進度学習」の推進

- ・算数科における「自由進度学習」を適宜取り入れる。※他教科も可能。
- ・ICT器機の活用推進。

カ 自学自習「自楽ノート」の推進

- ・自由進度学習で身に付けた「学び方」で、自分自身で課題を見つけ、主体的にタブレット等を活用しながら家庭学習を行う。

② 取組の成果と課題

○児童育成の指標を設定することで、授業改善に繋がったり、主体的に取り組む児童が増えたりした。

○「リフレクション」での話し合いで、指導法の交流ができ、授業の工夫改善に繋がった。

○自由進度学習を行うことで、「個別最適な学び」と「主体的な学び」につながっている。

●フリートークがただの発表になっている場合があるので、「対話」を意識することや「考えの

共有化」をする場面を意図的に作る必要がある。

③ 校長の理念と指導性を活かした関わり

○授業参観を適宜行い、「自由進度学習」「資質・能力の指標」「協働的な学び」等の工夫改善がなされているか確認し、指導・助言する。

○教職員が主体的・意欲的に働けるように、職場環境を整え、教職員間の関係性の改善を図る。

○教職員の意見を取り入れながら臨機応変に学校運営を行う。

(2) 美原小学校（児童数751名）

① 探求型学びのサイクルの実践(校内研修の充実)

本校の学校教育目標は「ゆたかな心もち、主体的に行動する子」である。それを踏まえ、学校経営グランドデザインの中心に、美原小の目指す児童像を、「**みつ**け（課題発見力）・**は**んだん（情報収集、活用能力）・**ら**いおう（学び合う力）」を位置づけ、全職員への周知を図った。具体的な取り組みとして、一つ目の柱を「自立した学習者」の育成のための授業改善とし、教師の「指導観」と児童の「学習観」の転換を目的とした校内研修の充実を図ることとした。また、教科を「国語科」に特化し、「個別最適化学び」と「協働的な学び」を往還する授業（沖縄市型授業スタイル「学びの道しるべ」）を基盤とするICTを積極的に活用した授業実践に臨んだ。6月20日には6学年の授業研究会を実施し、「デジタル機器と私たち」の単元において、デジタル機器の良さと課題について様々な資料を活用しながら情報収集し、「事実と意見の結びつきを明確にした文章」についてまとめ、発表しながら、よりよい表現の方法をお互いでアドバイスし合うという内容であった。指摘された箇所を各自がその場で端末入力し、学び合う楽しさを実感する様子であった。本校の課題とする「表現力」の育成に向けた一定の成果が得られた実践となった。



【意見交換の様子】

② 宮里中ブロック小中連携の実践

今年度の宮里中ブロックの目標は「じりつ（自立・自律）した学習者の育成」である。まず、「じりつした学習者」についての共通認識が必要であると捉え、本校児童の課題点について全体で協議した。第一に、語彙が少なく、文章表現に苦手意識を持つ子が多いことである。第二に与えられた課題に対しては意欲的に取り組むが、主体的に学習を広げること

が困難である点である。そこで、主体性を育むために必要なことを考えた。児童の自己肯定感や自己有用感を向上させることが必要であるとし、学級経営の基盤としてお互いを認め合い、高め合う「支持的風土」の醸成について、全学級で取り組むことを進言した。中学校への進学に向け、学校生活全体を通して、以下の3つの資質能力を身につけさせることを周知した。

a 未知の学習に対し、既習の知識を関連させようとする力（見通す力）

b 自他を認め、協力し合いながら課題を解決する力（関わる力）

c 自己の成長のために、目的意識を持って粘り強く学習に取り組む力（やり抜く力、ふり返る力）

【自他を認める取り組み】

年間2回の承認句間（いいところ探し）では、個々の「よさ」に気づくという点で大変意義深い取り組みとなり、支持的風土の醸成に大きく関わっている。

このように、校長として、職員と児童の実態について話し合い、課題を共通認識することで、学級・学年の連携や「チーム」で取り組む意義をしっかりと伝え、小中9年間を見据えた学びの構築を図った

(3) 北美小学校（児童数637名）

本校では、昨年度の取り組みとして、「自分の考えを工夫して表現すること」や「課題解決に向けて粘り強く取り組むこと」が課題として挙げられた。そこで、生涯にわたって能動的に学び続ける児童の姿を見据え、課題解決に向けて「自立した学習者」の育成に取り組んでいるところである。

① 目指す児童像の共有

ア 学校経営方針の共有

「ウェルビーイングの実現～安全で安心・よさと可能性の最大発揮～」を経営ビジョンとして掲げ、経営方針の一つに「自立した学習者の育成」を位置づけ、年度当初の職員会議・学校便り・校長講話・校長だより等で共通理解を図った。

イ 「スクールプラン」の活用

育みたい資質能力と具体的な取り組みについて共有し、全国学力学習状況調査の結果分析を行い、管理職を含め全職員で見直しを図った。

② 個別最適で協働的な学びに向けた授業改善

ア 組織的共通実践

- ・「北美っ子学習のきまり7か条」の日常的指導による学習規律の徹底
- ・「振り返り」の視点を統一し、次への学習につながる「基本授業スタイル」の確立

イ タブレット端末を活用した授業改善

- ・理論研（算数）で授業のイメージを共有
- ・研究授業の実施

研究教科：算数（1～4年）社会（5・6年）全体
研2回 隣学年研4回実施

ウ 「自学自習力ノート」の取り組み

- ・「けてぶれ学習」等で発達段階に応じて指導
 - ・参考となる学習例や児童のノートを掲示
 - ・ノートコンクールの実施
- （毎学期2回、全体朝会で表彰）



写真1 玄関ホールの自学自習コーナー

③ 教師の学びを支える体制づくり

- ア 週時程の見直しによる研修時間の確保
- イ 専門部会への参加による組織の機能化
- ウ 一人一授業・経年研等への管理職による指導助言（クラスルーム・チャットの活用）
- エ 校外の研修会参加と自主研修の奨励
 - ・GIGA研究校の公開授業へ全職員参加
 - ・ミニOJTの実施

④ 成果と課題

- 「自立した学習者」の育成に向けた校内研の充実により、組織的な授業改善に取り組むことができた。
- 学習基盤としてのICTの活用により、主体的に学習に取り組む児童の姿がみられた。
- 「学習のサイクル」の確立に向けた授業改善
- 「指導と評価の一体化」の実現に向けた体制づくり

(4) 越来小学校（児童数243名）

① 越来地域の良さ

本校は、かつて琉球王朝を築いた第一尚氏やその後の第二尚氏と深い関わりのある、歴史と伝統ある地域である。校長として、誇り高い地域の子どもたちを「越来の黄金童（クガニングウ）」と称してPTCAと協力体制を築き、教育目標である「自ら学ぶ子、心豊かな子、たくましい子」の具現化に努めている。

② 「確かな学力の向上」に向けた具体的取組

校長として、「地域とともに成長する学校」という理念を掲げ各種調査結果をもとに「子どもの姿に基づく授業改善」の具体的方策を学校経営計画に明

記した。

次に、その方策を、本市が注力している保幼小連携部会や小中連携部会、校内研修推進委員会など各部会で共通確認し、学校運営協議会の承認を経て、年間で共通実践できるようにした。

③ 実効性のある取組

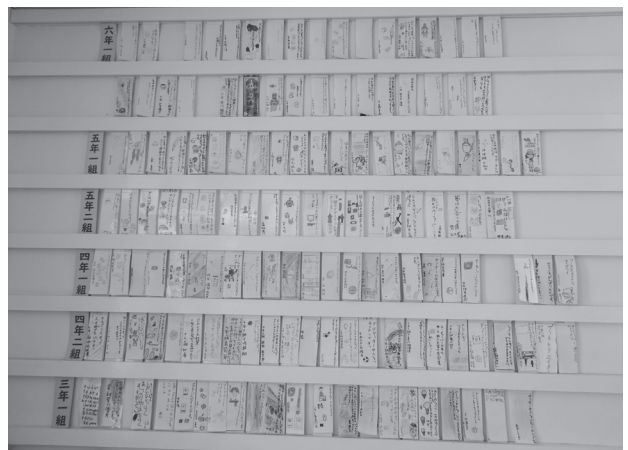
年度当初の職員会議や学校経営説明会で教育活動の方向性を保護者や地域と共通確認し、RPDCAのマネジメントサイクルを確立させ、「確かな学力の向上」を推進している。

ア 学校経営説明会の様子（令和7年5月）



授業参観者208名（教育に対する関心が高い）

イ 児童玄関のドリームウォールに「将来の夢」を掲示



子の内発的動機を喚起し、自ら学ぶ意欲を育む

ウ 学校便りや校長便り、週案コメントを活用



（学校や地域、各種ボランティア、PTCAの活動や、教育の動向を積極的に発信し理解を深める。）

エ 校内研修で外国語専科の授業を教職員が体験



3学年以上で積極的に教科担任制を推進し、授業改善や共感の人間関係づくりを推進する。

※ICTの効果的活用で実体験に近い場面を演出

④ 実践の成果と課題

- 全国学力学習状況調査結果における、国語と理科の調査結果は、県平均と同程度であった。
- 同調査の児童質問紙「自己有感等」の6項目において、4項目で県や全国の数値を上回った。
- 「働き方改革・3軸6視点」の教職員評価で、

肯定的回答が、全項目で目標値3.0を上回った。

- 全国学力学習状況調査結果において、算数は、県平均を0.8ポイント下回った。
- 同調査の児童質問紙「主体的な学習の調整」の2項目は、県や全国平均より5.4～24.8ポイント下回った。

課題の改善策として、各種調査の分析結果を活用し組織的な授業改善に取り組みたい。

(5) 美里小学校（児童数920名）

① 校内研修の充実

今年度は、課題の多かった国語科において、協働的な学びを通して「わかる・できる」授業づくりを行っている。導入の工夫（発問・教材・場の設定）により自分の考えを持たせ、全員が授業に意欲的に取り組ませることや、この課題から何を学ばせたいかを意識し、「問い」をもたせること、学び合いを通して、自分の考えを広げ、深めていく体験を積み重ねることなどを意識することで、基礎学力を身に付けさせるようにする。

② OJTの実施

本校は教職員の数も多く、それぞれ得意分野（教科指導・ICT・学級経営等）を持っているので、月に1・2回OJTの時間を設定し、それぞれの得意分野を紹介するようにしている。



【校内研修（理論研修）、OJTの様子】

③ 「自立した学習者の育成」に向けた取組の充実

ア 「問いが生まれる授業」の構築

- ・ 沖縄市型授業スタイル「学びの道しるべ」や美里小基本授業スタイルを意識した授業づくりの推進

イ 学習基盤としてのICTの活用

- ・ 「探究のサイクル」（課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現）を取り入れた授業など、ICTの日常的・効果的活用の推進

ウ 「自学自習力」を育む取組の充実

- ・ 「自学自習の手引き」を全児童に配布し、保護者には冊子版をスクリレで配布
- ・ 見本となる児童の自学自習の内容を各学年広場に掲示

④ 校長の理念と指導性を活かした関わり

ア 学校経営ビジョンの周知

- ・ 年度初めの職員会議で職員と確認し、また学校運営協議会や授業参観等を利用し、地域や保護者にも周知した。

イ OJTの推進

- ・ 今年度より自由参加のOJTを実施し、教職員が主体的に、また楽しみながら学べるような環境づくりを推進している。

ウ 日々の授業参観

- ・ 「自立した学習の育成」に向けた授業改善の視点をもとに、日常的に授業参観を行い、適宜、指導・助言を行っている。

⑤ 成果と課題

- 沖縄県児童質問紙より、「自分には、よいところがある。」「先生はあなたのよいところを認めてくれている。」「学校に行くのが楽しい。」「勉強で努力することは大切だと思う。」の項目が県平均を上回った。

- 全国学力・学習状況調査では国語・算数はほぼ県平均程度であったが、理科が県平均を下回った。また、理科と算数は得点分布の二極化が見られるので、各教科とも「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を一層推進していく必要がある。

5 成果と課題

- (1) 校長が、学校の現状と課題を的確に把握し、明確なビジョンを示して積極的に改善に取り組むことが教職員全体の意識向上に繋がる。
- (2) 管理職や多数の教職員が、日常的な授業観察や意見交換の場を設けることで、有益な情報が全体で共有され、より良い授業改善に繋がる。
- (3) 校長が、積極的に働き方改革を推進することで教職員が授業に専念できる環境が整備され、学校課題に主体的に取り組む雰囲気が醸成される。（「自立した学習者」育成プロジェクトの推進）

6 おわりに

本研究を通して、新しい時代をつくる学校教育においては、校長が、多様な専門性を持った教職員を有機的に繋ぎ、「共通の目標に向かって動かす力」や、「チーム学校の協働意識を高める力」を発揮することが重要であると感じた。今後とも、実効性のある各校の組組を共有し、人と人の繋がりを大切に、校長が率先して学ぶ姿を示し、教職員や地域、関係者と対話を重ね、新しい時代をつくる子どもたちの『学力向上推進』に向けて研究を進めたい。

分科会提案事項

中学校

第1分科会	カリキュラム・マネジメントの推進 ～新しい時代に求められる資質・能力を育成していくための 教科等横断的な教育課程の編成・実施・評価・改善～	87
第2分科会	主体的・対話的で深い学びの実現	91
第3分科会	よりよく生きようとする道德教育と、健康で豊かな生活を 実現するための教育の充実	95
第4分科会	一人一人のキャリア教育・進路指導と自己指導能力を育成する 生徒指導の充実 ～「基礎的・汎用的能力」を育成するキャリア教育～	99
第5分科会	「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成 ～生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教師の育成と 「新たな教師の学びの姿」を実現する研修の在り方～	103
第6分科会	学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現	107

第1分科会

研究主題

カリキュラム・マネジメントの推進
～新しい時代に求められる資質・能力を育成していくための
教科等横断的な教育課程の編成・実施・評価・改善～

提 案 者：岡 崎 心 一（竹 富 中 学 校）
司 会 者：仲 山 ゆかり（小 浜 中 学 校）
記 録 者：伊志嶺 安 威（西 表 中 学 校）
”：亀 川 善 朝（黒 島 中 学 校）

1 はじめに

学習指導要領の冒頭には、「よりよい学校教育を通じ、よりよい社会を創る」という理念が掲げられている。この理念を実現するためには、各学校が「社会に開かれた教育課程」を構築することが不可欠である。

子供たちが学ぶ意義や、育成すべき資質・能力を明確にした上で、地域社会との連携・協働を深めていくことが重要である。そうすることで、子供たちは将来、多様な人々と協力しながら様々な変化に対応し、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の担い手となることが期待される。

各学校においては、校長のリーダーシップのもと、それぞれの学校の特色を活かした教育課程を編成し、その基本的な方針を地域と共有しながら、「カリキュラム・マネジメント」を着実に推進していく必要がある。

2 主題設定の理由

竹富町には、小中併置校7校、小学校3校、中学校2校が設置されている。各島々では地域行事が盛んで、学校と地域との関わりが非常に密接である。

このような地域特性を踏まえ、竹富町では令和元年度から町内の全学校で海洋教育を推進している。この海洋教育は、地域社会との連携を基盤としており、各学校の特色を活かした教育課程の編成・実施において重要な柱となっている。

本研究では、この海洋教育をはじめとする各学校の取組を通して、地域と学校が密接に連携しながら、それぞれの学校の実態に応じた特色ある教育課程をどのように編成し、実践していくべきかをあきらかにしたいと考えている。そして、その成果を評価し、改善していくプロセスこそが、「カリキュラム・マネジメント」の本質であり、今後の教育の質の向上に不可欠であると考え、本主題を設定した。

3 研究の視点

(1) 実効性のあるカリキュラム・マネジメントの推進と教育活動の活性化

各学校が主体的にカリキュラム・マネジメントを実践し、それがどのように日々の教育活動の質の向上と活性化に繋がるのかを明確にする。

- (2) 地域と共にある「社会に開かれた教育課程」の実践
竹富町の豊かな地域資源や特性を最大限に活かし、地域社会と連携しながら進める「社会に開かれた教育課程」の具体的な実践方法と成果を追求する。
- (3) 教科等横断的な視点を取り入れた教育課程のPDCAサイクルの確立

各教科の枠を超えた横断的な学びをどのように教育課程に位置づけ、その計画（Plan）・実施（Do）・評価（Check）・改善（Action）のサイクルを確立していくかについて考察する。

4 研究の実際

■竹富町立竹富小中学校（児童25名、生徒8名）

(1) 教科等横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

本校の特色である海洋教育について、主に総合的な学習を軸として道徳、特活、各教科を関連づけた教育課程を編成する。各教科間の関連をおさえて指導できるよう各学年で教科等横断的なカリキュラムの年間指導計画を作成し、実践している。適宜、ふり返しを行うことで課題を明確にし、教育課程の改善を行っている。

(2) 実践例

① 主な海洋教育の取組

学年ごとの海洋教育目標を設定し、全体活動と個人テーマの探究学習を合わせた取組を行う。小学校低学年では、地域の自然や伝統文化との触れ合いを通して地域の良さに気づき、中学年ではその気づきをもとに課題解決に向けて学んだことをまとめる。

高学年では探究活動を通して、身につけた知識・技能を実生活に役立てる。中学校においては、学びを活用し、よりよい生活のために行動し、他者と情報を共有することを目指す。令和5年度はSDGsを意識し、エシカルツアーガイドを行った。

今年度は「Act for Future 今の私たちにできること。未来につなげよう大好きな竹富島」をテーマに探究活動に取り組んでいる。全学年で学習デザインを作成し、事前学習、探究活動、事後学習、未来のための力・行動へつなげ「持続可能な社会

の創り手」の育成を目指す。

- ア 海の子集会（もずく・アーサ採り）
- イ 春の遠足（西表島のゴミ焼却施設見学）
- ウ シュノーケリング体験
- エ ゴミ焼却場見学、ビーチクリーン活動
- オ 離島ターミナルで観光客に向けた発表

② 種子取祭の取組

- ア 「星のや」での島野菜の栽培活動
- イ 巻唄についての学習会
- ウ 芋・粟・ゴマ・大豆栽培とイーヤチ作り

③ 方言の継承

- ア てーどうんむに（竹富方言）による朝の放送
- イ てーどうんむに大会



【てーどうんむに大会】



【シュノーケリング体験】

(3) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① PDCAサイクルの確立と助言
- ② 学校経営方針や指導の重点との関連、活動のねらいや目指す児童生徒像の明確化
- ③ 学校だよりによる家庭・地域への情報発信と共有、協働意識の向上
- ④ 地域人材（素材）バンクの作成と海洋教育のサポーターの配置

■竹富町立小浜小中学校（児童39名、生徒18名）

(1) 教科等横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

本校では、学校教育目標の実現に向け、学校グランドデザインの共通理解を図りながら、『自立』と『共生』の視点を持って、社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善に向けたカリキュラム・マネジメントの推進に取り組んでいる。

① 連続した学びと教科等横断的な視点

- ア 探究課題の設定と資質能力の育成各学年の探究課題の設定と発達段階に応じた教育活動を設定し、キャリア教育とも関連付けながら取り組んでいる。

イ 「海洋教育一覧表」の活用

全学年で「海洋教育として取り組める単元一覧」を作成し、教科等を通して、「自分と海の

関わり方について問い続ける子」を目指し、教育活動を実践している。

② 評価・改善の在り方

授業実践や行事等の取組の際、その目的を教職員で共通理解を図り、実施後のふり返りを通して「自分と海の関わり方について問い続ける子」が育成されているかを検証していく。

また、学んだことを掲示することで学びの足跡を視覚化し、日頃から掲示物の効果的な活用方法を模索したりするなど、全校体制で海洋教育の取組の意識化を図っている。

(2) 実践例

① 地域連携・交流学习の取組

- ア 多角的な道徳授業（全教諭授業実践）（中）
- イ 社会科見学（島内外各事業所）（小）
- ウ 職場体験学習（島内各事業所）（中）
- エ 交流学习（石垣市内大規模校）（中）
- オ 豊年祭・結願祭等地域行事への参加（小中）
- カ 地域の先輩と語る会（昔遊び・生活の様子・学校生活・進路選択・職業選択について）（小中）
- キ シママニ交流会（老人会との連携）（小中）

② 「水の循環」で学ぶ海洋教育の取組

- ア さんご学習（小中）
- イ 海神祭（ハーリー体験）（小中）
- ウ もずく・アーサ採り体験（小中）
- エ 稲作体験（校内田んぼにて）（小）
- オ 島の環境・産業・祭祀・物づくり等（小中）



【稲作体験】



【焼き物づくり】

(3) 校長の関わりとリーダーシップ

① RPDCAサイクルを活かす学校評価、各種テスト・調査の結果、教育活動の推進

R（反省）を活かし、学校評価や各種諸調査の結果、日々の教育活動の中でPDCAを検証し、改善に向けた取組の推進をする。

② 学校教育目標の具現化に向けた教育活動の推進

- ア 学校教育目標の具現化に向けた学校経営方針やグランドデザインに基づいた目指す児童生徒像・「旅立ちマップ」との関連を意識し、実現に向けた教育活動の推進を行う。

イ 学校だよりやテトル・PTA総会等で、情報発信と協働体制の取組の充実を図る。

③ PTA・地域教育資源の活用

PTAや地域諸団体との連携を密にし、学校行事への参加を促し地域教育資源（ひと・もの・こと）を積極的に活用する。

■竹富町立西表小中学校（児童9名、生徒13名）

(1) 教科等横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

本校では、「総合的な学習の時間」を中核に据え、体験活動と関連づけながら教科等横断的なカリキュラムを構築している。各教科の枠を超えた学びを通して、児童生徒の資質・能力の育成を図り、実社会との接続を意識した教育活動の推進を目指している。

① 教科等横断的な視点

- ア 学習のマニュアル化とカリキュラム作成
- イ 育成を目指す資質・能力の明確化
- ウ 発達段階に応じた目標と学習内容の設定

② 編成・実施・評価・改善の在り方

- ア 持続可能な取組となっているか
- イ 活動のねらいが明確であるか
- ウ 子供の主体性が発揮されているか
- エ 学びが社会と結びついているか

(2) 実践例

① 海洋教育に関する取組

- ア 海の体験学習（刺し網漁体験、サバニ体験、ダイビング・シュノーケリング体験）
- イ ビーチクリーン活動
- ウ 海神祭への参加

「海の体験学習」は3年サイクルで実施しており、小中合同での活動を通じて教科等横断的な学びを展開している。前年度の成果と課題を踏まえて年間計画を見直し、各学部が設定したテーマに沿って探究活動を進めている。

② 地域連携（文化継承・歴史伝聞）に係る取組

- ア 稲作体験学習
- イ 和紙作り
- ウ 平和学習
- エ 節祭（シチ）への参加

稲作体験では、種籾から稲刈り、さらには餅つきや販売活動に至るまで、6カ月以上にわたる米作りの全工程を体験している。児童生徒の発達段階に応じたねらいを設定し、生活と地域産業への理解を深めている。

和紙作りでは、地域在住の講師の指導のもと、原木であるアオガンプの採取から和紙の完成までの工程を体験。小学6年生と中学3年生は卒業証書用の和紙、その他の学年はハガキ用の和紙を制

作している。

自作テキストを活用し、総合的な学習の時間と他教科を関連付けて実施している。



【和紙づくり】



【魚捌き】

(3) 校長の関わりとリーダーシップ

① 学校経営方針及び学校グランドデザインの周知と推進

PTA総会や学校だより等を通じて、学校のビジョンや目標を広く発信し、共有を図る。

② 教職員及び児童生徒との資質・能力の共有

校長講話や児童生徒集会等において、学校が目指す児童生徒像や学びの意義について発信し、教育活動全体の方向性を共有する。

③ 教育活動後のふり返し等を通したPDCAサイクルの推進と助言

教職員とともに学校評価や活動後のふり返しを行い、改善点を次年度以降の教育活動へとつなげる助言と支援を行う。

■竹富町立黒島小中学校（児童16名、生徒8名）

(1) 教科等横断的な視点を含めた教育課程のPDCAの在り方

本校では、学校教育目標の実現を目指し、学校グランドデザインの共通理解を図りながら、社会に開かれた教育課程の編成・実施・評価・改善サイクルを確立する取組を進めている。

① 教科等横断的な視点

- ア 育成したい資質・能力の明確化と各教科への位置づけ

子供たちに身につけさせたい力を具体的に定め、それが各教科の学習を通じてどのように育まれるかを明確にする。

- イ 他教科にわたる総合的な応用力の育成

各教科で得た知識や技能を、複数の教科を横断して総合的に活用できる力を養う教育課程を編成する。

- ウ 子供と地域の実態に基づいた編成

黒島の子供たちの実態や地域の特性を踏まえ、実践的で意味のある教育課程を編成する。

② 編成・実施・評価・改善の在り方

ア 教師と子供が一体となった「チーム」としての計画・実践

教師と子供が協力し、主体的に学びを創りあげていく「チーム」として機能するよう、教育活動を計画・実践する。

イ 子供の主体的な活動の評価

子供たちが受け身ではなく、自ら課題を見つけ、考え、行動する主体的な活動となっているかを評価する。

ウ 社会や地域とのつながりを意識した取組を評価する。

教育活動が地域社会とどのように連携し、子供たちの社会性を育んでいるかを評価する。

エ 短期間での検証と継続的な改善

充実した取組を短いサイクルで検証し、その結果を速やかに改善につなげていく。

(2) 実践例

① 地域連携・交流学习の取組

ア 社会科見学（气象台・発電所・役場）

イ 職場体験学習（黒島や石垣島事業所等）

ウ オンラインでの他校との英会話交流

エ 交流学习（石垣市内大規模校）

オ 豊年祭・牛まつり等地域行事への参加

カ 「奇跡の芋」みやななご（宮農7号）収穫

② 海洋教育の取組（総合的な学習の時間等含）

【R6年度テーマ：海「生き物」】

ア 「海岸生物」の観察（スタンプラリー）

イ 「海岸植物」の観察（黒島研究所講話）

ウ 「フォトフレーム」づくり（シーグラス活用）

エ シュノーケリング体験



【豊年祭参加】



【みやななご収穫】

(3) 校長の関わりとリーダーシップ

① 学校教育目標・グランドデザインに基づく教育活動の推進

学校教育目標とグランドデザインに基づいた目指す児童生徒像を常に意識し、その実現に向けた教育活動を行う。この取り組みは、学校だよりやホームページ等を通じて積極的に発信するとともに、

に、教頭・教務主任と密接に連携しながら推進する。

② PTAと連携した学校行事、人材活用の推進

PTAとの連携を強化し、学校行事の企画・実施や、地域の人材を積極的に活用する。

③ PDCAサイクルを意識した学校評価、各種テスト・調査、教育活動等の推進

学校評価や各種テスト・調査の結果、日々の教育活動をPDCAサイクルで検証し、常に改善に繋がるよう意識して取組を推進する。

5 成果と課題

竹富町内の各学校では、地域連携を基盤とした「社会に開かれた教育課程」の構築が進み、海洋教育を核に教科等横断的な学びを深化させました。

PDCAサイクルの着実な推進により、教育活動の質向上と、子供たちの資質・能力育成への意識が高まっています。

今後の課題は、取組の持続可能性を高め、資質・能力の評価精緻化と地域連携のさらなる強化です。

6 おわりに

本研究を通じ、地域と学校が一体となりカリキュラム・マネジメントを推進することの重要性を再確認しました。

今後もPDCAサイクルを回し、子供たちが持続可能な社会の担い手となるよう、教育の質の向上に努めていきます。

第2分科会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの実現

1 はじめに

現在の学習指導要領では、子供たちが未来を主体的に切り拓いていくために必要な「生きる力」の育成を目指し、3つの資質・能力——すなわち「学びに向かう力・人間性」、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」の育成の充実が強く求められている。これは、社会の変化が加速度的に進み、予測困難な時代を生き抜くために、子供たちが自ら課題を見つけ、他者と協働しながら解決していく力を身につけることが、これまで以上に重要になっていることを背景としている。

このような資質・能力の育成を図るためには、ICTの活用をはじめとする教育の質的転換が不可欠である。特に、すべての子供たちの学びを保障する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性や考えを尊重し合いながら共に学びを深める「協働的な学び」を一体的に充実させることが求められている。これらの学びの在り方を授業改善に結びつけることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながると考える。また、授業改善を進めるにあたっては、教員の授業観や指導力の向上が不可欠であり、校内研修や授業研究を通じて、教員が互いに学び合いながら実践力を高めていくことが重要である。校長はその中心となり、教職員の意識改革を促し、協働的な学びの場を支えるリーダーシップを発揮することが求められている。

本ブロックに所属する各学校の具体的な実践事例や、生徒質問紙の結果を丁寧に分析することで、現場の課題を明らかにし、今後の授業改善や学校経営に活かしていきたいと考える。

2 主題設定の理由

- (1) 予測困難な時代を生き抜く子どもたちの資質能力の育成のためには、主体的・対話的で深い学びの実現が必要である。
- (2) 自立した学習者の育成に向けた学習観・指導観の転換を目指し、教員一人一人の授業改善に対する意識の醸成と実践力の向上が重要である。
- (3) 各学校の生徒質問調査の結果より、自学自習力（主体的に学習を進める力）の充実が学校の課題となっている。

提 案 者：山 田 泰 之（仲井真中学校）
 司 会 者：宮 良 安 剛（石田中学校）
 記 録 者：前 川 和 昭（北 中 学 校）
 ブロック共同研究者：濱 川 太（寄 宮 中 学 校）
 ”：太 田 寛（古 蔵 中 学 校）

県生徒質問調査結果		R6年度質問調査 12月			R7年度質問調査 7月		
質問事項		1年	2年	3年	1年	2年	3年
1 自分にはよいところがあると思いますか。	A校	85.1%	83.4%	92.9%	89.3%	88.6%	96.6%
	B校	78.2%	82.5%	82.9%	90.0%	86.6%	83.4%
	C校	85.3%	89.0%	92.5%	90.5%	85.5%	92.0%
	D校	64.5%	82.7%	79.7%	86.7%	78.8%	91.9%
2 学校に行くのは楽しいと思いますか。	A校	77.2%	79.1%	88.4%	94.6%	72.0%	82.7%
	B校	82.3%	68.8%	76.0%	88.0%	79.9%	78.3%
	C校	93.0%	86.0%	90.0%	86.1%	85.5%	85.1%
	D校	69.4%	84.6%	82.1%	89.3%	78.0%	84.7%
3 家で自分で計画を立てて勉強していますか。	A校	56.2%	33.3%	61.6%	67.0%	48.2%	59.7%
	B校	55.7%	43.5%	41.9%	64.7%	57.2%	53.6%
	C校	51.8%	43.0%	51.3%	69.3%	52.4%	58.0%
	D校	52.1%	52.9%	64.2%	58.0%	46.6%	70.2%
4 友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができていると思いますか。	A校	81.6%	85.4%	93.8%	86.6%	83.3%	89.7%
	B校	87.1%	80.5%	80.6%	86.7%	89.9%	77.5%
	C校	84.7%	85.5%	89.4%	86.9%	84.7%	88.5%
	D校	72.7%	85.6%	86.2%	84.7%	80.5%	83.1%

3 研究の視点

- (1) 授業改善にかかる学校組織体制づくり
- (2) 各学校の特色ある取り組み
- (3) 校長の関わり・指導性

4 研究の実践

■石田中学校の実践（生徒数386名）

本校では、生徒の学力向上を重点課題とし、様々な取り組みを進めてきた。しかし令和6年度の調査で、「家で計画的に勉強をしている生徒の割合」が55.3%、「本校独自の成長管理ノートの活用率」が50.1%と、依然として家庭学習の習慣化に課題があることが明らかになり、「自学自習力」の育成が確かな学力の基盤であるとの認識に至った。令和7年度は、授業改善に加え、「自学自習力」の育成の柱とし、校長として、この課題を学校全体で取り組む体制を構築することが急務と考えた。そこで、校内研究テーマとして「学びをふり返り次の学びを進める自学自習力の育成」～ICTで繋ぐ学びと書いて話す言語活動を重視した授業実践を通して～を設定した。

- (1) 「自学自習力」を育むための具体的取組と校長の関わり

① 「フォーサイト手帳」の導入と活用徹底—学習サイクルの確立に向けて—

これまでの「成長管理ノート」を発展的に見直し、生徒がPDCAサイクルを回す習慣を身に付けることを目的に、新たに「フォーサイト手帳」を

導入した。生徒が日々の学習を計画・管理することで、目標達成の喜びを味わい、自己肯定感を高めることを狙っている。校長は職員会議で目的とビジョンを確認し、研究主任を通じて全校集会やZoom動画等を活用し、生徒にもわかりやすく伝えた。PTA総会では保護者にも直接説明し、「自己管理能力の育成」というメッセージを明確に発信。全校体制で取り組む意義を共有した。また、導入初期の混乱を避けるため、専門家によるZoom研修を教員向けに実施し、手帳活用の意義と指導方法を深く理解することで、生徒への指導体制を整えた。

② わかる授業の実践と「ISD授業プロジェクト」の推進

「自学自習力」は、日々の「わかる授業」によって育まれる。本校では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指す「ISD（石田中）授業プロジェクト」を推進し、全教員による一人一授業公開やICT活用を奨励している。授業改善の議論を深めるため、週1回の教科会を時間割で保障し、必要に応じて助言も行っている。また、全教員の公開授業を参観し、挑戦する姿勢を具体的に認めた上で、建設的なフィードバックを心がけている。

③ 成果と今後の展望

これらの取り組みを始めてまだ日は浅いが、生徒たちが毎日の朝の会・帰りの会に「フォーサイト手帳」を開き、計画を立てたり、宿題やテストの日程を記入したり確認する姿が少しずつ増えてきた。教員間でも、教科会を中心に「どうすれば生徒が自ら学び始めるか」といった、より本質的な議論が活発に行われるようになり、学校全体が同じ目標に向かって動き出している手応えを感じている。今後は、手帳活用の形骸化を防ぎ、定着率をさらに高めていくこと、そして「ISD授業プロジェクト」をさらに深化させ、授業の質そのものを高めていくことが課題である。校長として今後も教職員一人ひとりの力を最大限に引き出しながら、PDCAサイクルを回し続けることで、生徒たちの「自学自習力」を確実に育み、それが「確かな学力」へと繋がるよう、努力していきたい。

■寄宮中学校の実践（生徒数509名）

(1) 教科会と校内研の充実を図った授業改善の推進

- ① 「主体的に学ぶ生徒」「自立した学習者」を育て授業づくりについて共通理解を図る。
- ② 他者との交流を通し、「問い」が生まれ自分の考えを広げ深める授業づくりの確認。
- ③ 全教科で「個別最適な学び」「協働的な学び」

を実践し、自ら課題に対し自己調整しながら学習を進めることができる自学自習力を推進することの確認。

④ 指導と評価についての研修会の実施。

⑤ 学習規律「3構え」の徹底の確認。

「気構え」・・・注意力、根気強さ、常に疑問を持つ、必ず確かめる

「身構え」・・・ベルの合図、席で静かに、身なりを正しく

「物構え」・・・忘れ物をしない、学習の準備、机上の整理整頓

⑥ 各教科年1回以上指導主事等を要請した研究授業の実施。

⑦ 教科会へ主事招聘。

(2) 学びを社会とつなげる「寄未知タイム（総合的な学習の時間）」の充実（通年）

【1学年】

・職業人講話の実施、職場見学の実施。

【2学年】

・地域の自然・文化・産業・歴史等に関わる人々との交流や体験活動等の実施。

【3学年】

・自分の興味関心のある課題を探究し、発信する。

(3) ICTを活用した協働的・個別最適な学びの推進

① 研修会の実施。

タブレットを活用した授業実践や校務処理の推進。

・ロイロノート活用について

・生成AIの活用について

(4) 「YORIMIYA Diary（寄宮ダイアリー）」*を活用した自立した学びの促進

*生徒が日々の学習を計画・管理する手帳

① 「かふやみ」（かかわる力・ふり返る力・やりぬく力・みとおす力）を意識した授業づくり

② 毎週金曜日（8:20～8:35）に今週の振り返り及び次週以降の計画を記入。

(5) 地域や社会教育施設との協働による不登校等生徒の支援体制の充実

① 「寄宮中学校サポートチーム会議」の設置

民生委員・児童委員、青少年指導員、警察補導員等の構成メンバーで会議及び支援の実施。

② 那覇市教育委員会教育相談課（きら星学級、あけもどろ学級、学習支援室「ていんぼう」等）との連携。

③ 市福祉部委託の無料塾との連携。

④ 地域にある「児童デイサービス」「公民館」等との連携。

⑤ 地域にある大学（沖縄大学、県立看護大学）学生による学習支援ボランティアの実施。

※「校内自立支援室『あすなろ』」との連携。

(6) その他

- ① 授業と連動した家庭学習の充実。
- ② 各種検定（漢検・数研・英検）の奨励。

■古蔵中学校の実践（生徒数570名）

(1) 「主体的・対話的で深い学びの実現」と校内研究とのかかわり

本校では校内研究の柱として「個別最適な学び」「協働的な学び」「ICT活用」を位置づけ、授業改善に取り組んでいる。「協働的な学び」はペア・グループ学習やICT活用に注目されがちだが、目的は生徒の資質・能力の育成にあり、授業改善は「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すものである。授業改善では、生徒の理解や特性に応じた「個別最適な学び」を保障しつつ、多様な他者との協働を通じて学びを深めることが重要である。那覇教育事務所の「『自立した学習者』のESCORT RUNNERを目指して」の考えを踏まえ、校長講話を通じて教職員間で共通理解を図り、全教科で学習観の転換を進めている。授業ではアウトプットの場を設け、生徒主体の学びへと転換している。

(2) スクールプランの実践化

スクールプラン作成時に校内研究の軸を盛り込み、教育目標から目指す資質・能力を明確化し、具体的な柱を設定した。教職員は教科ごと協議を行い、特質に応じた視点で共通実践事項を確認し、共通理解を深めた。夏季休業中には、各教員の取組の進捗を確認し、改善を図った。さらに、これらの取組を教職員評価システムの「目標達成のための手立て」と関連付け、年間を通じて意識を高く持ち、授業改善に取り組む体制を構築している。

(3) 「夢実現ノート」を通してメタ認知強化

「主体的・対話的で深い学び」を進めるには、メタ認知を含む「自分で考える力」が重要である。本校では、独自に作成した「夢実現ノート」を全生徒に配布し、日々の学習を振り返り記録させている。これにより、生徒は自分の学習状況や課題を可視化し、主体的に学びをコントロールする力の育成を目指している。学推担当と校長講話、学習委員会が活用の意義や具体例を繰り返し伝え、定着を図っている。この取組を通じて、生徒が学び方を改善しながら、主体的に学び続ける力の育成を目指している。

(4) リフレクションタイムの導入

金曜日に特別時程として、放課後教職員同士の学びの時間を40分設定している。一人一授業や授業計画、成果・課題・改善策などについて、教科や学年を超えた振り返りを行い、授業改善に努めている。振り返りはメモシートに記録・提出し、管理職がコメ

ントを返すことで情報共有を図っている。

(5) 週案コメント・校長だよりの活用

日々の授業参観、一人一授業等を通じて、管理職は先生方の授業を振り返り、その内容を週案のコメントや校長だよりで発出している。特に、「個別最適な学び」「協働的な学び」「学習基盤としてのICT活用」の実践を取り上げ、意識の向上を図っている。また、保護者向けの校長だよりでは、家庭学習の在り方について再考を促す内容も発出している。

(6) 育成を支える4つのポイント

「主体的・対話的で深い学び」の授業改善には、教室内的での支持的風土の醸成が不可欠である。特に、共感的な人間関係の育成を目指し、「相手を大切に聴く力」の育成と、授業内での「自己決定の場を提供」を重視して授業を構築している。この取組は授業に限らず、学校行事や日常生活を通して生徒が身につけられる。今年度はその一環としてリーダー研修で校長講話を実施し、リーダーに求められる資質・能力を伝えた。学級活動や日常生活を通じて行動の変容を促し、全校への波及を図っている。

■仲井真中学校の実践（生徒数476名）

(1) 確かな学力の向上に向けた取り組み

① 「仲井真授業づくり」の共通実践

- ア 「問い」を引き出し、授業をファシリテートする役割へと転換し、学習者中心の授業を推進。
- イ めあてに正対したまとめや振り返りを確実に実施し、家庭学習までの学びの連続性を意識した授業設計（めあての焦点化）を行う。
- ウ 年1回の公開授業を全教員が実施し、教科会で授業の振り返りを行うことで、指導方法の改善を図っている。

② ICTの活用による「個別最適な学び」と「協働的な学び」の推進

- ア タブレット端末の活用により個別最適な学びと協働的な学びの両立を目指している。
- イ tomoLinks（7月導入）等のソフトを活用し、主体的な学びや個別最適な学びを支援することで、基礎・基本の定着から応用問題等の幅広い難易度の問題に取り組み、学力の向上を図る。

③ キャリア教育の視点を踏まえた授業づくり

- ア 授業の学習過程において、キャリア教育で育成したい力と関連する場面では、「か・ふ・や・み」カードを活用し、視覚化を図っている。

④ 自らの学びを調整するメタ認知の発達

- ア 将来の夢や目標達成に向けて、自学自習計画表（Brush-upシート）を効果的に活用し、目標管理の資質能力を育んでいく。
- イ 生徒会学芸委員会が中心となり、Brush-up

シートの活用を呼びかけ、日々のチェックや優れたシートの紹介を行うことで、自学自習の学習サイクルの定着を図っている。

⑤ 校長の関わり・指導性

学校経営構想を明確に示し、目標達成に向けた課題の把握と必要な取り組み等を、教職員と共通理解を図っている。また、毎週発行する「校長だより」や週案コメントにより、教育活動の方向性と意義を継続的に発信している。

(2) 学力向上マネジメントの推進

① 授業改善PDCAサイクルの活用

ア 各教科でPDCAシートを作成し、生徒の実態に基づいて共通実践事項を決定。成果目標や育成したい力を共有し、年に2回に分けて成果と課題を明確化し、対応策を教科内で協議・実践。

② 校長の関わり・指導性

PDCAサイクルの形骸化を防ぐため、評価指標の見方や改善策について助言を行っている。また、教科会やOJTの推進等を行っている。

(3) 「自立した学習者」育成に向けた組織体制の整備

① 目指す学校像・生徒像の実現に向けた学校課題改善に資する校内研修の実施

ア 「自立した学習者のESCORT RUNNERを目指して」を活用し、県学力向上推進施策等を全職員で確認し、「学習者目線」に立った授業づくりの推進を図る。

イ 授業においてICTを活用した協働学習の実践事例を教職員間で共有し、授業づくりの質的向上を目指した校内研修を実施する。

② 校長の関わり・指導性

年度当初の研修で、研究主任・学力向上推進担当による説明の後、経営ビジョンとの関連を助言し、教職員に目的意識を持たせている。

5 成果と課題

(1) 成果

- ① 生徒がPDCAサイクルを回して自学自習に取り組むようになり、学習習慣の定着に改善が見られた。
- ② 授業改善が進み、各校で特色ある授業スタイルが形成され、学びの質が向上した。
- ③ 校長の明確な指導と助言が教職員の意識改革を促し、授業改善に繋がった。
- ④ 支持的風土の醸成により、生徒の挑戦意欲や自己肯定感が高まり、学習意欲が向上した。
- ⑤ 地域や関係機関との連携により、不登校や多様な生徒への支援体制が強化された。

(2) 課題

- ① 教職員間で授業改善への意識や実践力に差があ

り、共通理解の深化が求められる。

- ② 自己肯定感の高揚が学力向上や登校改善に十分に結びついておらず、施策の精緻化が必要。
- ③ ICT活用に教員間のスキル差があり、授業の質にばらつきが生じている。
- ④ 多様な生徒への個別支援に必要な人材（支援員等）の確保が十分でない。
- ⑤ 生徒の挑戦意欲に個人差があり、個に応じた支援や声かけの工夫が求められる。

6 おわりに

本研究主題「主体的・対話的で深い学びの実現」に基づく各校の授業改善や「自学自習力」の育成は、生徒の学びの質を高め、教職員の授業力向上にも寄与した。特に、PDCAサイクルの定着やICT活用、校長のリーダーシップによる組織的支援体制の構築は、教育の質的転換を促す成果である。一方で、教職員の意識の差や、自己肯定感の高まりが学力などに十分結びついていない点、多様な生徒への支援体制整備など、共通課題も明らかとなった。今後は、これまでの成果を踏まえ、校長としてカリキュラム・マネジメントをさらに充実させ、教職員と協働しながら、授業改善を継続的に推進していく必要がある。

第3分科会

研究主題

よりよく生きようとする道德教育と、健康で豊かな生活を実現するための教育の充実

提 案 者	：仲 程 正	（嘉数中学校）
司 会 者	：松 田 庄一郎	（西原中学校）
記 録 者	：宮 里 里加子	（宜野湾中学校）
”	：松 尾 望	（西原東中学校）
ブロック共同研究者	：由 博 文	（普天間中学校）
”	：佐 伯 進	（真志喜中学校）

1 はじめに

近年、社会環境の急激な変化は子供たちの生活に大きな影響を与えており、特に体力や運動習慣の低下が深刻な課題となっている。こうした中、学校は「豊かなスポーツライフの実現」を目指し、生涯にわたって健康で積極的にスポーツに親しむ児童生徒を育てる責務を担っている。そのためには、学校内外の教育活動を通して運動を楽しむ態度や健康づくりに主体的に取り組む力を育むとともに、家庭・地域・関係機関との連携による計画的な教育の推進が求められる。子供たちが心身ともに健康に成長し、豊かな人生を歩むためには、「心」と「体」の両面から支える教育の充実が不可欠である。

2 主題設定の理由

これまで、部活動は生徒の自主的・自発的な学びの場であると同時に、異学年交流や教員との信頼関係を築く場として、学校教育に大きく寄与してきた。しかしながら、少子化の進行や教員の働き方改革といった課題に直面し、従来型の運営では対応が困難となっている。このような状況のもと、持続可能な形での部活動運営の必要性が高まっており、現在は地域への移行や合同チームの結成、拠点校方式など、多様な形での改革が進んでいる。

本研究では、持続可能な部活動の在り方を踏まえつつ、学校と地域が連携・協働して、健康で豊かなスポーツライフを実現する教育のあり方とその具体策を探ることを目的とする。

3 研究の視点

- (1) 持続可能な部活動体制の工夫
- (2) 部活動における地域人材の活用
- (3) 部活動の地域展開への展望

4 研究の実際

- (1) 普天間中学校（生徒数570名）

① 具体的な取組

ア 部活動加入率向上の推進

- 4月上旬の生徒会入会式にて、新1年生を対象に部活動紹介を実施し、加入率の向上を図っている。また、各部の体験入部期間を3週間設け、部活動参加への促進を行っている。

- 全職員による協力体制のもと、全員の顧問制を導入し、15の部活動に複数名の顧問を配置。顧問は校長の委嘱により、教職員全員で分担している。

イ 部顧問会・キャプテン会の実施

- 月1回、職員会議後に部顧問会を実施し、活動の共通理解と課題の共有を図っている。
- キャプテン会も月1回実施し、生徒の自主性やリーダーシップを育む機会としている。また、必要に応じて随時開催し、課題対応も行っている。

ウ 地域展開への展望

- 空手道部には現在、部活動指導員を配置しており、地域展開に向けた取り組みの第一歩として位置付けている。
- 今後、他の部活動においても外部指導者の活用が進んでおり、段階的に地域展開につなげたいと考えている。

② 成果と課題

【成果】

- ◎全職員が部活動の意義を理解し、協力体制が整っていることにより、持続可能な部活動運営が実現できている。
- ◎保護者の理解と協力も得られており、学校全体で部活動を支える風土がある。
- ◎毎週火曜日の朝（7:20～7:45）に、部活動生と部顧問が協力して校内外の清掃活動を行っており、部員同士の連帯感や責任感の育成にもつながっている。

【課題】

- ▲部活動生の「心得」に関して、あいさつや時間のけじめなど、基本的な生活習慣への意識の弱さが一部に見られる。今後、全体への徹底と意識づけが課題である。

- (2) 嘉数中学校（生徒数832名）

① 具体的な取組

ア 短期的な取組（教員の負担軽減策）

- 野球部に部活動指導員を配置し、本市の部活動ガイドラインに基づいて効果的に活用して

いる。

- 部活動規定を改定し、外部指導者のみでの活動を認める体制を整備。ただし、スポーツ安全保険等への加入を必須条件としている。

イ 中長期的な取組（地域展開の推進）

- 「宜野湾市地域活動実証事業」に関連し、沖縄国際大学と連携して硬式テニス部が参加。
- アスリート人材や大学の教育施設との連携により、活動拠点づくりの可能性を探る実証的取組を1月に2回実施した。

② 成果と課題

【成果】

- ◎部活動指導員の配置および部活動規定の改定により、教員（顧問）の心理的・時間的負担の軽減が図られている。
- ◎沖縄国際大学との連携により、近接する大学施設の活用や、大学生からの技術指導を通して、生徒のモチベーション向上と満足度の高い活動が実現されている。

【課題】

- ▲部活動指導員の増員について、現状では市内4中学校×1名の予算のみであり、教員の希望数に対応できていない。文化系部活動が対象外である点も今後の課題である。
- ▲改定した部活動規定の全体周知が不十分であるため、周知方法の工夫が求められる。また、外部指導者がいない部活動においては、父母会代表者を支援役として配置するなど、弾力的な運用の導入が必要である。
- ▲大学との連携によるクリニック型の活動は、生徒・保護者双方に好評であったが、年間を通して継続的に実施するためには、人的・財源的体制整備が課題となる。
- ▲大学との連携・調整を学校側が主導する現状では、教員の負担増につながるため、調整役となる第三者機関の設置が望まれる。

(3) 真志喜中学校（生徒数944名）

① 具体的な取組

ア 持続可能な部活動体制の工夫

- 全職員による協力体制のもと、全員顧問制を採用し、部活動運営を分担している。
- 毎週水曜日をノー部活動デーと定め、教員と生徒の心身のリフレッシュを図っている。
- 部活動の終了時刻を通年で18時に統一し、教員の働き方改革と生徒の生活リズム安定を目指している。
- 「拠点校方式」を導入し、在籍校に希望する部活動がない生徒には、他校の部活動に参加

できるよう配慮している。現在、男子バレーボール部で他校の生徒を受け入れ、活動している。

イ 部活動における地域人材の活用

- 女子テニス部に部活動指導員を配置し、教員の負担軽減と専門的指導の実現を図っている。指導員による平日・休日の単独指導も行われている。

- 部活動規定を改定し、外部指導者による単独指導が可能となるよう調整。各部で技術指導が可能な地域人材を積極的に発掘し、コーチ登録を進めている。

ウ 部活動の地域展開への展望

- 今年度（令和7年度）から「柔道クラブ」を対象とした「宜野湾市地域活動実証事業」に取り組む予定である。地域クラブの設立を通じて、学校と地域の連携による新たな部活動の形を模索している。

② 成果と課題

【成果】

- ◎全職員の理解と協力により、持続可能な部活動運営が実現している。
- ◎拠点校方式の導入により、生徒が希望する競技を継続できる環境を提供できた。
- ◎部活動指導員や外部指導者の教育的配慮により、生徒の健全育成が図られている。
- ◎宜野湾市や地域展開に精通した企業との連携により、モデル事業を円滑に実施できている。

【課題】

- ▲現在の部活動運営は、教職員のボランティア精神に大きく依存しており、持続可能な体制整備が求められる。
- ▲部活動に熱意を持つ教員が円滑に地域展開へ移行できるよう、「兼職兼業制度」等の制度整備を早急に進める必要がある。
- ▲宜野湾市内の小中学生が地域クラブに参加しやすくなるよう、移動手段（交通アクセス）の確保が課題である。
- ▲今後、施設・設備の管理や財政的支援を含む、持続可能な運営体制の構築が必要である。

(4) 宜野湾中学校（生徒数687名）

① 具体的な取組

ア 教職員の負担軽減（持続可能な指導体制）

- 地域人材を活用した外部コーチ（11名）の配置をすることで休日の部活動指導や大会引率等の負担軽減が図られた。
- 専門外指導を行う教師の精神的支援となっている。

イ 部活動の地域展開

- 部活動指導員の配置（女子バスケットボール部）により朝練・休日の指導等で切れ目ない専門的技術指導が可能になり、生徒・保護者のニーズに対応が可能となっている。
- 地域クラブ活動実証事業の展開によりダンス部一定期間専門講師を配置し、地域クラブの活動のモデル実証を行った。

② 成果と課題

【成果】

- 教師の働き方改革を踏まえ、持続可能な部活動の在り方を保護者や地域の理解を得ながら推進することができた。
- 子供・保護者の望む専門的な知識、技術指導と量的ニーズを満たすことで子供の成長を実感し保護者の満足度も得ることができた。
- 指導教諭の転勤に左右されず、安定的な指導環境の維持につながっている。

【課題】

- ▲顧問教師と外部指導者との指導方針、情報共有の時間の確保が必要である。
- ▲今後地域展開が進んだ際の外部指導料や保険料の負担等の保護者への理解が求められる。



(5) 西原中学校（生徒数587名）

① 具体的な取組

ア 外部コーチの配置

- 外部コーチは、本町の方針に基づき委嘱された地域ボランティアである。役割としては以下の3点が示されている。
 - ・部活動における技術指導または生徒の安全管理
 - ・学校教育活動の理解者として、部活動顧問や保護者会と協力した指導
 - ・町の方針に基づき、生徒の健全な成長を支援すること
- 外部コーチはあくまで技術指導・安全管理を担う立場であり、部活動の運営や生徒の管理については、これまで通り顧問教員が中心となっていて行っている。しかし、競技経験のない教員が顧問となる場合などにおいては、専門性を補う有効な支援となっており、生徒にとっても学びの質の向上に寄与している。

イ 部活動指導員の配置

- 部活動指導員は、教育委員会が中学校の推薦等を受けて委嘱する会計年度任用職員であり、部活動顧問の一部権限を有する者とされている。本校では3つの部活動に配置されており、練習、練習試合、公式大会等において、顧問と調整しながら活動を支えている。
- 外部コーチと異なり、部活動指導員はより自立した立場での判断・行動が求められる職務であるため、責任を伴った運営が期待されている。学校としては、部活動指導員の配置を増やすことが、教職員の負担軽減につながるかと捉えている。

② 成果と課題

【成果】

- 外部コーチの配置によって、専門的な技術指導の機会が確保された。
- 部活動指導員の配置により、部活動顧問の負担軽減が図られた。

【課題】

- ▲より多くの部活動に対応できるよう、部活動指導員のさらなる増員が必要である。
- ▲地域展開に向けた体制整備と地域との連携強化が今後の課題である。

(6) 西原東中学校（生徒数561名）

① 具体的な取組

ア 適切な活動時間・休養日の設定

- 管理職および部活動担当教諭を中心に職員会議・部顧問会を通じて協議し、「部活動規則」を策定。活動時間は、平日放課後は最大2時間、休日は3時間程度とした。
- 原則として水曜日・日曜日を休養日とし、週末2日間活動する場合は休養日の振替を行うよう定めた。
- 学校閉庁日・年末年始・定期考査（5教科は1週間前、技能教科は3日前）も活動休養日とした。
- 部活動結成式で配布する資料に「週の活動例」を掲載し、保護者とも休養日設定を共有した。
- 熱中症対策として、警戒アラートや暑さ指数（WBGT）に応じた活動制限を実施。

イ 部活動指導員・外部コーチの適正配置

- 合計15名の外部コーチ、2名の部活動指導員が各部活動で指導・支援を担当。
- 年度当初に「西原



東中外部コーチ連絡協議会」を開催し、活動規定の確認と委嘱状の交付を校長室にて実施。

ウ 選手激励会や掲示物による活動の紹介

○地区大会・県大会・コンクール等の前に選手激励会を実施し、選手紹介や決意表明、活動の様子を共有することで、自己肯定感の高揚を図った。

○中体連夏季総体前には「部活めぐり」を実施し、教職員と部員との交流を通じて激励を行った。

○1階廊下に部活動の掲示スペースを設け、大会結果や活動の様子を紹介。さらに図書館教育と連携し、各部キャプテンによる「おすすめの本」を写真付きで展示した。



② 成果と課題

【成果】

◎部活動に取り組む中で、自己肯定感の向上が見られた。

◎地域指導者や支援者の関わりにより、教職員の負担軽減が実現した。

【課題】

▲部活動と学習の両立をより効果的に支援する方策の検討が必要である。

▲活動日や活動時間のさらなる適正化に向けた見直しも今後の課題である。

5 成果と課題

(1) 成果

① 教職員の協力による体制整備

多くの学校で「全職員の協力体制」が構築され、部活動が学校全体で支えるものという意識が定着している。

② 外部人材の活用

外部コーチ・部活動指導員の配置により専門性の高い指導と教員の負担軽減を実現している。

③ 生徒の成長と意欲の向上

生徒の技術向上や達成感により、自己肯定感やモチベーションが高まっている。

④ 保護者の理解と連携

保護者が活動を理解・支援する体制が育っており、地域展開に向けた基盤が形成されつつある。

⑤ 働き方改革の一助

休養日や活動時間の見直しによる教員の負担軽

減、規定整備による勤務の明確化などが進展している。

(2) 課題

① 教職員依存からの脱却

善意や熱意に依存する運営は持続可能性に課題を残している。制度的な整備や外部支援体制の構築が不可欠である。

② 外部人材の配置とマネジメント

人材不足や情報共有不足により、指導の質や安全管理に差が生じる。また、連携調整が教員の負担となる事例もあり、第三者的な調整機関が望まれる。

③ 地域展開への備え

指導料や保険料等に関する保護者の理解の促進、アクセス手段の確保や施設管理の在り方など、地域展開に向けては、これらの課題の解消が不可欠である。

④ 学習との両立

多くの学校で部活動と学習のバランスを取るための支援方法が未確立である。

⑤ 規定・制度の整備と柔軟な運用

規定が整備されていても、周知や運用が不十分な場合があり、これが活動の持続可能性に影響を及ぼしている。

(3) 総括

① 地域展開を円滑に進めるには、「外部指導者の人材バンク整備」「第三者調整機関の設置」「財政支援の拡充」が急務である。

② 教職員が安心して任せられる仕組みを制度として確立し、部活動を学校単独ではなく「地域・家庭と共同で育てる営み」へと転換していく必要がある。

③ 地域や学校の実情に応じた柔軟なモデル構築（拠点校方式・部活動連携等）も検討の余地がある。

6 おわりに

子供たちが心身ともに健やかに育ち、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現していくためには、学校教育の在り方を見直し、地域と連携した教育活動の構築が欠かせない。

スポーツを通じて育まれる自己肯定感や協調性、挑戦する意欲は、子供たちが社会を生き抜く力につながる。今後も学校はその中核としての役割を果たしながら、持続可能で多様性のある教育環境を整えていくことが求められる。

第4分科会

研究主題

一人一人のキャリア教育・進路指導と自己指導能力を育成する生徒指導の充実
～「基礎的・汎用的能力」を育成するキャリア教育～

1 はじめに

キャリア教育は、子どもたちがキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的働きかけである。キャリア形成にとって重要なのは、自らの力で生き方を選択していくことができるよう必要な能力や態度を身に付けることにある。自分が自分として生きるために「学び続けたい」「働き続けたい」と願い、それを実現させていく姿がキャリア教育の目指す子どもの姿といえる。

2 主題設定の理由

本分科会は協議題を『好ましい人間関係を築き、他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導力を育成する学校教育の在り方』とした。「好ましい人間関係」「他者と協働」「自己指導力の育成」のためにはキャリア教育を通して『人間関係形成・社会形成能力』『自己理解・自己管理能力』『課題対応能力』『キャリアプランニング能力』の育成を図る必要があり、これらは相互に関連・依存関係にあることから満遍なく身に付ける必要があり、学校の重要課題といえる。また義務教育が終了する中学校では「生き方や進路に関する現実的模索」も重要な目標になり、キャリア教育を全校的に推進していく必要がある。そこで本研究では協議題に沿って各学校の実践事例をまとめるとともに校長の関わりについても考察し、共有することとした。

3 研究の視点

以下の視点で共同研究者の各学校における取り組み等を紹介し、今後の指導の参考に資する。

- (1) 他者との協働を通じた自己指導力の育成
- (2) 「基礎的・汎用的能力」を育成するためのキャリア教育の充実

4 研究の実際

(1) 【八重瀬町立具志頭中学校】

本校では、共に助け合って生きることの喜びを体験させる（人間関係形成・社会形成能力）、安全な行動・規律ある集団行動の体験や責任感や連帯感の涵養（自己理解・自己管理能力）、学校生活に関する課題解決のための立案（課題対応能力）、職業や進路に係る啓

提 案 者	：稲 福 政 彦（具志頭中学校）
司 会 者	：吉 田 順 太（知 念 中 学 校）
記 録 者	：平 仲 健（東風平中学校）
”	：仲 程 俊 浩（三 和 中 学 校）
”	：足 立 克 枝（大 里 中 学 校）

発的な体験（キャリアプランニング能力）の4つ能力の育成を図るため、主に次の取組を行っている。

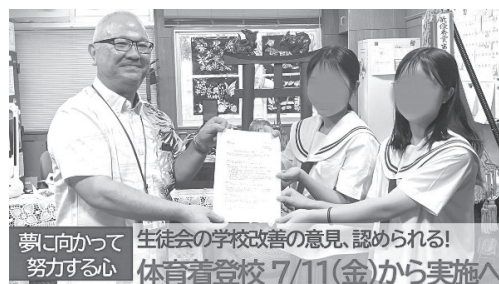
① 生徒会活動の活性化

ア 生徒会執行部と定期的な意見交換の実施

生徒たちの思い聞き、校長の思いを伝え、ビジョンを共有化し、学校課題の解決を図る。

→熱中症対策のため、5月から10月の「体育着登校」を実現

→室内スリッパから上履きへの変更については生徒・保護者・職員の意見を集約して年内に結論



イ 「活躍の場づくり」「居場所づくり」「絆づくり」「規範意識づくり」「学びに向かう集団づくり」「異年齢交流」を柱とした行事や日常的な取組の企画・運営を行う。

- 朝の活動（あいさつ・清掃）
→各委員会当番制からボランティア制へ移行
- 新入生歓迎スポレク大会（半日）
→異年齢交流を重視したグループ編成
- 選手激励会
→各部活動決意表明に加え、放送委員の事前取材を元にしたインタビューを行う
- ぐしちゃんフェスタ（終日）
→生徒会で企画・運営等を行いながら合意形成の場を経験させ、自己指導力を高める
- 一問一答大会
→学習委員会を中心に「受験は団体戦」を全校生徒に意識づけ、学ぶ意欲の向上を図る

② 体験活動等の実践

ア 職場体験（主に町内事業所等）

イ 特別支援学校との交流会（島尻特別支援学校）

ウ 企業・団体による出前授業（金融機関・NPO等）

エ 「夢・希望」をテーマとした第一線で活躍する方の講演会（国連職員・スポーツ競技指導者・県出身東大生（向陽高・糸満高との中高連携））

オ 研究機関（OIST）等への見学派遣

カ 中学校入学前の中学校生活体験（小中連携）

キ 小学校の音楽朝会への参加（小中連携）

ク 地域行事・ボランティア活動への参加を推奨

③ キャリアノート『未来ノート』の活用

PDCAサイクルを回す力を身に付けさせ、生徒の「自己調整力」を高めるツールとして各教科・領域で活用を図る。

④ 校長の関わり

ア 「生徒による自主的・主体的活動の活性化」を学校経営の重点目標のひとつに設定し、生徒会担当・特活担当等と連携し「しかけづくり」を行う。

イ 講話等を通して、人間としての生き方の自覚と自己の能力を活かす能力の育成について、生徒・職員と随時共有を図る。

ウ 学校だよりの発行や地域懇談等を通して、目指す学校像・生徒像を保護者・地域と共有を図る。

(2) 【糸満市立三和中学校】

地域社会と連携した組織的「キャリア発達の支援」

～企業ミッション型PBL（課題解決型学習）～

① 本研究の視点

PBL型学習を通し、生徒が企業や行政と連携しながら、探求のプロセス「目的を立てる→計画する→遂行する→評価する」等の取組で、どのように新しい課題に向き合い、どう解決していくのかについて整理していく。

② 役割分担

○ 市教育委員会→コーディネーター（全体の推進）

○ 企業・団体→講師（生徒へのミッション提示、指導・助言など）

○ 教師→ファシリテーター（生徒の伴走者）

③ 実際活動

ア R7実施スケジュール

【1学期】

参加企業（団体）の決定。

企業がPBL授業に参加可能な日程を調整。

【夏休み中】

市教委生涯学習課→教職員向け指導者研修会。

【8月】

各クラスの担当企業の決定。

企業からのミッション決定、企業講師の紹介。

※R6のミッション

「“海人文化”を活かした商品を開発せよ」

（NPO法人ハマスーキ）

「ニーズのある学習アプリを開発せよ」

（株式会社タンクル）

【9～11月】

PBL型授業（計26時間）と学年発表会。

【12月】

振り返り、自己評価、事後アンケート。

イ キャリア教育の視点を踏まえた取組み

『沖縄県キャリア教育の基本方針』（2020）における「か・ふ・や・み」を意識した活動。

（例）

○ ミッション提示＜企業参加1回目＞

みとおすすめ力（自分の目標を設定する力、将来を想像する力）

○ 企画会議、調査、中間発表に向けた準備

かかわる力（他者と協力する力）

やりぬく力（計画を立案・実行する力）

○ 中間発表＜企業参加2回目＞

ふり返る力（助言を理解し自分を見つめる力）

○ ブラッシュアップ、最終発表に向けた準備

やりぬく力（最後まで粘り強くやり通す力）

ふり返る力（行動を振り返り改善に繋げる力）

○ 最終発表＜企業参加3回目＞

かかわる力（社会に参画し社会を形成する力）

みとおすすめ力（目標設定・将来を想像する力）

④ 校長の関わり

ア キャリア教育を学校経営の柱に設定。

イ キャリア教育の視点に基づいた校長講話

ウ 教師、生徒への助言や声掛け、激励など

(3) 【南城市立大里中学校】

本校は「自主勇往」（自分で「やる」と決めたことを、粘り強くひるまずに頑張り続けること）を校訓とし、「生涯に渡って自ら学びを進めていくことができる生徒」を目指す生徒像の一つとしている。

また、職員は「チーム大里」として一丸となり、「変化の激しい時代に対応できる『生きる力』の育成」を目指して全ての教育活動を組織的に取り組むことを共通理解している。

① 多様な体験活動の実践

約30年続く学校行事「ふるさと伝統芸能まつり」の取組課題（価値観の多様化、地域の伝統芸能の指導者不足、練習時間確保の難しさなど）に対応し、今年度は持続可能な新たな内容と方法による「第1回文化芸能フェスタ」を開催し地域と生徒が主体的に協働・参加できるよう工夫・改善を図る。

全ての生徒はア～エのどれか1つに参加する。

ア 「地域の部」

地域の支部（字）を活動単位として、地域の青年会などの協力を得て伝統芸能を披露する。

イ 「舞台の部」

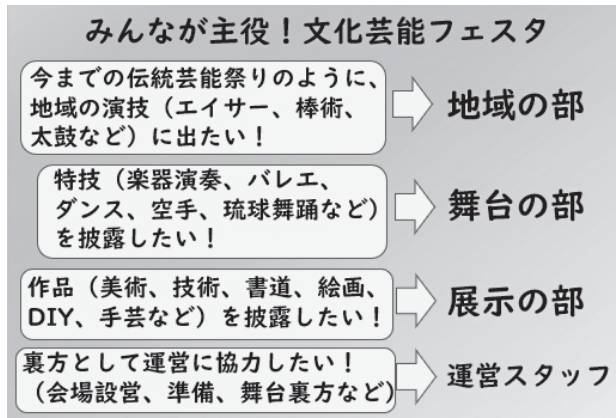
生徒の特技（ダンス、バレエ、楽器演奏、空手など）を個人や小グループで披露する。

ウ 「展示の部」

書道、絵画、DIY作品などの展示

エ 「運営スタッフ」

会場設営、環境整備、案内、準備・片付け



② 「自立ノート」の活用

本校では「自立した学習者」の育成を目指して、オリジナル「自立ノート」を作成した。

前年度は電子媒体を活用していたが、通信環境や状況によっては全生徒が一斉にPC入力できない状況があったため、今年度は紙媒体での取り組みを行っている。

朝、生徒は登校したら「自立ノート」に1日の予定や目標を記入し、下校前は1日の振り返りや翌日の予定などを記録している。年間を見通して各種テストや検定試験、部活動の大会などの予定を書き込み、時間を視覚化して計画を立てる指導を行っている。この活動を通して「ふりかえる力」「やりぬく力」「見通す力」の育成を図っている。

③ 校長の関わり

校長の「Mission使命」（全ての生徒を育てる）「Vision未来像」（行きたくなる魅力有る学校）「Passion情熱」（人は成長するからすばらしい）を職員や生徒と共有し目指す方向を確認している。

また、校長発行の学校だよりを通して学校が目指す教育について保護者や職員と共通理解を図り、生徒には校長講話を通してSociety5.0及びVUCAな時代を生きるために必要な力について考える機会を作っている。

(4) 【南城市立知念中学校】

学校教育目標を踏まえ目指す生徒像を、自分で考え、判断、行動し自分の行動に責任を持つ生徒「自律」、多様性を受け入れて、他者を思いやり尊重する生徒「尊重」、自分たちの生活を自分たちの手でより良くしよ

うと創意工夫する生徒「創造」とし、未来の社会の形成者として考え行動できる生徒の育成を目指し以下の取り組みを行っている。

① 学びを社会とつなげる探究学習（総合）

探究学習では「社会や生活の中から問題を見つけ、自分なりの考えを持ち、粘り強く自分の力で最適な答えを導き出すことができる力」が身につくことを目的として学習を進めていく。

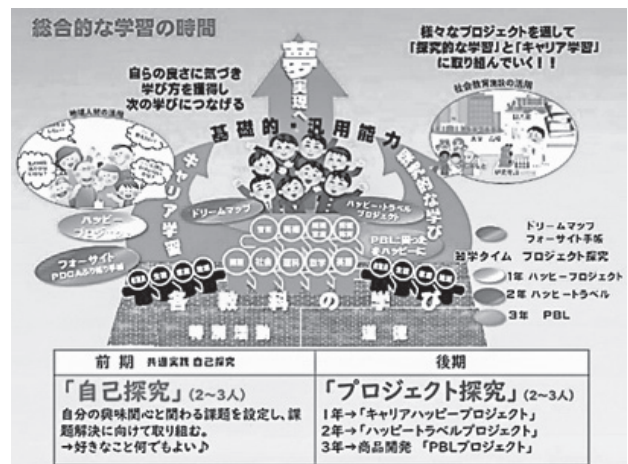
ア 前期は自分の興味関心と関わる課題を設定し、課題解決に向けて取り組む「自己探究」を行う。

イ 後期は、各学年のテーマに応じて、「プロジェクト探究」を行う。

□ 1年生「キャリアハッピープロジェクト」

□ 2年生「中学生ガイド養成プロジェクト」

□ 3年生「商品開発《PBLプロジェクト》」



② 自学自習の取り組み

ア 自学自習会（通称：JJ）

平日の部活動休養日の放課後を活用し、図書室にて希望生徒が自学自習を行っている。必ず教師を配置し学習支援体制を確保、また、端末を活用したスタディサプリ等自分で選んだ学習等を行っている。

イ 朝の自主活動

学校方針で共通の学習を実施していた内容を改め、生徒の主体的・自主的学習の時間として自分の選んだ学習を行っている。

③ 自己管理手帳（フォーサイト）の活用

自己管理手帳の活用を習慣化させ、勉強や部活動等において目標を設定し、習慣的に振り返りを行う（PDCAサイクル Plan⇒Do⇒Cheku⇒Action）ことで、努力が成果に結びつきやすくなり、自己学習力を身につけることを目的に実践している。

④ 校長の関わり

ア キャリア教育の基盤となる、「自立した学習者」育成に向け、自学自習力を高める学校運営の実践。

イ 縦割り学習（異学年交流）を多く取り入れ、自己有用感の向上を図る取り組みの実践。

(5) 【八重瀬町立東風平中学校】

本校は生徒数が916名、33学級（うち特別支援学級6学級）の大規模校である。本校が位置する八重瀬町は歴史上の偉人である謝花昇氏を輩出した地としても知られ、決めたことに粘り強く取り組み、挑戦し続けたその大先輩の背中を追いかけながら学校職員一同、学校教育目標である「お互いの『よさ』を認め合い、主体的に考え、行動する生徒」を念頭に、様々な場面において、ありとあらゆる「つながり」を大切に、「工夫」を繰り返し、今日よりいい明日へ向かって「前進」し、充実した教育活動に取り組んでいる。

① 実践内容

キャリア教育の目標として「将来に夢や希望をもち、その目標に向かって努力する生徒」「将来の生き方を考え、主体的に進路を選択決定することができる生徒」を掲げ、その目標を達成するために、職場体験学習（1学年）、修学旅行（2学年）、上級学校体験（3学年）を軸とし、各教科・領域と関連づけながらキャリア教育の取組を行っている。また八重瀬町社会教育課コーディネーターや関連機関と連携し、各学年のキャリア発達の段階に応じて、地域人材や外部講師を招聘することで、生徒や教職員にとって学びのある充実した講習会になっている。

ア 八重瀬町農家の方々との交流

農家の方々が来校し、地元で育てた食材（ピーマン）を食卓に届けてくださり、給食と一緒に食べる。

イ 沖縄県国際交流会の実施

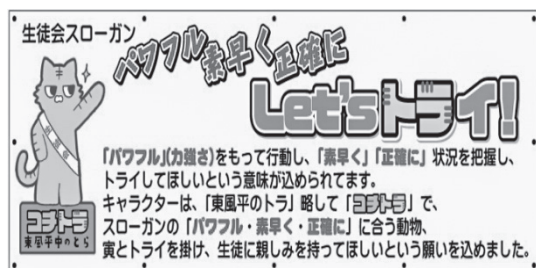
韓国・中国・ペルー・オーストラリアの4名の派遣員との交流会で、その国の文化を学ぶ。

ウ キャリア教育講演会の実施

昨年度は、沖縄県元教育長、そして国連開発計画イラク事務所国連勤務の鶴淵鉄平さんによる講話を行った。

② 生徒会活動等の活性化

生徒会によるスローガン「パワフル・素早く・正確に・Letsトライ」を掲げ、生徒会重点目標の取組



ア 生徒会が関わる各種行事の推進

生徒会執行部や各種委員会が中心となり、企画や役割分担、運営等、生徒が自主的に活動できるようにする。

青少年赤十字（JRC）の精神に基づき、「気づき、考え、実行する」活動を行う。

イ 各種委員会活動の充実

各種委員会の活動計画を具体的に作成し、常時・継続的な活動ができるようにする。

生徒会組織と学級組織とを連動させた〈生徒による学校づくり〉の取り組みを通して、全校生徒が生徒会活動、学級活動に関わり一人一人が生徒会や学級集団の一員であることを意識させる。

生徒会や生徒会掲示板・校内放送等を積極的に活用し、生徒会活動や委員会活動の報告を行い、生徒会への関心を高める。

③ 校長のリーダーシップや関わり

ア 学校経営方針を通して、学校の現状・課題、目標、取り組み内容等を全職員へ明示

イ 教頭、教務、担当職員との取り組み事項についての充実した報連相・調整及び適切な助言

ウ 全職員への温かな声かけと支援

エ 学校便り（校長日記）で、生徒や職員の頑張りを掲載

5 成果と課題

(1) 成果

子どもたちのキャリア形成を通して「生きる力」を育成すべく、校長としての関わり（地域人材の活用、外部機関との連携、教職員との協働、家庭や地域との連携など）と各学校の特色ある取り組みについて共有し、学ぶことができた。

(2) 課題

これからの生涯学習社会の中で、生徒が自らの生き方を考え、主体的に進路選択ができるように、要となる特別活動の推進・充実と教育活動全体を通して組織的かつ計画的な進路指導を行えるように、全職員での共通理解・実践を一層深める必要がある。

6 おわりに

様々な特性や課題を抱える生徒や家庭が増える中、学校教育には、子どもの発達や教育的ニーズを踏まえつつ、一人一人の可能性を最大限に伸ばしていく教育が求められている。

多様な学びの場において、だれ一人とり残さないよう関係機関や専門スタッフ等と連携、協働し、校長のリーダーシップの下、全職員がチームとなって組織的に取り組むことで、子どもたちの「生きる力」を育みたい。

第5分科会

研究主題

「令和の日本型学校教育」を担う教師の育成
～生徒や保護者、地域の信頼に応えられる教師の育成と
「新たな教師の学びの姿」を実現する研修の在り方～

提 案 者：伊 波 勉（伊豆味中学校）

司 会 者：佐 藤 繁（大宮中学校）

記 録 者：具志堅 勝 司（国頭中学校）

1 はじめに

現代は予測困難で変化の激しい社会といわれ、学校教育には柔軟な対応力と確かな実践力が求められている。中央教育審議会の答申では、すべての子供の可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実、さらに質の高い教師の確保や「働きやすさ」と「働きがい」の両立をめざした環境整備が提言されている。こうした時代の要請に応えるためには、教師が主体的に学び、互いに支え合いながら成長できる校内研修のあり方が鍵となる。本研究では、教師の学びを支える仕組みを現場実践の中から問い直し、今後の校内研修がどうあるべきかを検討・考察することを目的とする。

2 主題設定の理由

令和の時代において、教師には子供の多様な実態に対応し、個別最適な学びと協働的な学びを両立させる高度な指導力が求められている。そのためには、教師自身が学び続け、実践を省察しながら資質・能力を高めていく姿勢が不可欠である。令和6年の中央教育審議会答申でも、教師の専門性の継続的な向上と、それを支える働きやすい職場環境や校内研修の充実が重要な課題として示された。しかし現実には、多忙化や形式化により、校内研修が「業務の一部」として扱われ、教師の内発的な学びを支えるものになっていないという課題も見られる。

本研究では、実態の異なる国頭地区内の3校（漁村・農村・市街地）による共同研究を通し、それぞれの校内研修の工夫を共有・検討しながら、教師が自立的・自律的に学び続けられる研修文化の在り方を探った。本主題は、質の高い教育活動の実現をめざし、信頼に応える教師の育成をと児童生徒に還元される研修の姿を考察することを目的に設定した。

3 研究の視点

研究は、各学校の実践を以下の3つの視点で取り上げ、比較検討し成果と課題にまとめ提示する。

- (1) 学校経営に積極的に参画する教職員の育成における教育課題
- (2) 課題解決を図る学校経営上の工夫及び取組
- (3) めざす人材育成に資する校内研修の在り方

4 研究の実際（3校の取組）

【本部町立伊豆味小中学校（児童生徒数59名）】

本校は伊豆味区の一文字を校区に擁する、一区一校の小中併置校（併設幼稚園有り）である。保護者・地域の学校教育に対する関心は高く、期待も大きい。児童生徒数は減少傾向だが、「湧き出でよ人材」の校訓のもと、児童生徒の素直で勤勉な態度が校風として息づいている。

(1) 教職員の育成における教育課題

小規模校である本校の教員数は本務が6名、臨時的任用教員2名の計8名である。一教科1人未満の配置で、複数の教科を免許外で対応している。そのため、教科会は開催できない。また、校内研修は併設する小学校と組織が同じであるため、小・中の教育課程を見越した内容、テーマでの設定が求められる。

(2) 課題解決を図る学校経営上の工夫及び取組

小規模・小中併置を「強み」に変える学校経営を行う。教職員間の交流、乗り入れ授業、合同研修などで小中一貫教育を推進し、9年間を通じた児童生徒の継続的な成長支援を図る。

(3) めざす人材育成に資する校内研修の在り方

本校では、小中併置校の特性を生かし、小学校・中学校が一つの組織として連携しながら校内研修を進めている。研修テーマは学校課題に直結し、児童生徒の実態に基づくものであり、さらに今、または今後の社会から求められる教育内容を反映させることを基本方針としている。職員が「やらされ感」ではなく、自ら学びたいと思えるテーマ設定と、互いの強みを生かし合える運営を行い、楽しさや達成感を伴う内発的動機による研修づくりを心がけている。

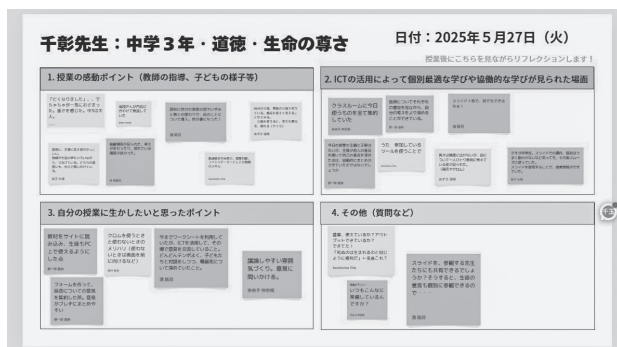


今年のキャッチフレーズ！
には活用を促して、教師同士、子ども同士、そして教師と子どもたちが
が、学びが広がり、より深まっていくことを願っています。

伊豆味校内研のポータル“Googleサイト”。グループ・ウェア(ミライム)にリンクが貼られ、職員がいつでも閲覧ができ、情報共有のツールとなっている。

また、小規模・小中併置の強みを生かし、全職員が9年間を通じた教育課程の一貫性を意識しながら研修に参加することで、児童生徒の継続的な成長支援に資する共通理解を深めている。

研修内容は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を二本柱とし、ICTの効果的活用、地域教育資源の発掘・活用（例：地域めぐりによる学習活動）、児童生徒に主体性を委ねる授業づくりなど、多様なテーマを扱う。特にICT活用では、授業支援ツールやデータ分析を通じた個別指導の充実を図るとともに、協働的な学びを促すオンライン・オフライン連動型活動の事例を共有する。



互見授業の観察メモは、参観しながらcanvaのスライドで付箋機能を使い、リアルタイムで行う。

地域教育資源の活用では、地域の人材や文化、自然環境を教材化し、児童生徒が地域に誇りと愛着を持てる学びをデザインする。



左：校内研修の一環で職員が区のアプシバレーに参加している様子。

右：そこで繋がった地域の方に「村墓(始祖：豆あじ)」の案内をしてもらっている様子。

さらに、子どもに委ねる授業では、探究的な課題設定や学習の進行を児童生徒が主体的に行う実践を研究し、育成すべき資質・能力との関連を明確にする。こうした研修を通じて、職員一人一人が教職の専門性を高めるとともに、学校全体として教育の質を向上させ、児童生徒に還元される研修文化の確立をめざす。

◆本校の成果と課題

① 成果

ア ICT活用はアプリも機器も「まずやってみて、使ってみて、その後はどうだったか評価する」という方針を校長が出して率先してやって見せた。結果、ICTに苦手意識を持つベテラン職員にも安心感を持たせ、研修を楽しみ挑戦する雰囲気へとつながった。

雰囲気へとつながった。

イ 教員自らが地域を理解することで、伊豆味地域への親しみが増し、人材や文化の発掘と教材化を楽しみながら進めていた。

② 課題

ア 小サイクルのPDCAで研修全体の進捗や方向性を管理する必要があるが、研修の形態が多様なことや、内容が多岐に渡っていて把握しきれしていない。

【国頭村立国頭中学校（生徒数105名）】

本校は、沖縄本島最北端の中学校で村唯一の中学校である。村全体で「学びの共同体」ヴィジョンと哲学による学校改革を推進しており、全ての子どもの「学び」の保障を目指している。保護者、地域の方々には卒業生も多く、学校への関心も高い。

(1) 教職員の育成における教育課題

本校教職員は、本務教諭8名、臨時的任用教諭2名である。年々過疎化に伴い、生徒数の減少・職員数の減少があり、国語・数学・英語の教科のみが2名で、あとは1名のみである。そのため、校内にて教科会を開催することがなかなかできず、研修の機会をどう増やし授業力をつけていくかが大きな課題のひとつである。

(2) 課題解決を図る学校経営上の工夫及び取組

- ① 校務分掌や職員の履歴等考慮し、積極的な研修会への参加と任意の教育研究会への参加を促す。
- ② 生徒指導や校内支援委員会での困り感など、若手と中堅以上の教諭を組み、指導技術等学ばせる機会を与える。
- ③ 全教師が研究授業を年1回以上実施する。その際、管理職が授業者の授業観察を2週間前より行い、研究授業へ向けて指導・助言・相談等行う。
- ④ 教頭を中心に話しやすい雰囲気職員室の醸成を常に図り、必要な情報は校長へも共有し、指導・助言を行っている。

(3) めざす人材育成に資する校内研修の在り方

本校校内研修は、上記にあるように村全体で『すべての児童生徒の「学び」の保障を目指して』を掲げ、「学びの共同体」の理念に基づく学校教育を推進している。

- ① 本校校内研修はすべての教諭が1回以上研究授業を行うが、その際授業参観の視点としてア、「教室の雰囲気や子どもの様子」、イ、「子どもの学びの成立（参加意欲、つまづき）」、ウ、「教師と子どもの関係、子どもと子どもの関係」、エ「教師の指導技術（きく、つなぐ、もどす）等行い、授業力を高めている。



参観者は「どこで学びがあったか。つまづきがあったか」等の視点で観察する。

- ② 日常の授業を公開する意識を持たせる。
- ③ 参観者は必ず、リフレクションで生徒の発言や変容を述べる。



全体協議の前にグループで固有名詞を出して、学び場面や、発言、生徒同士の関係性など述べる。

- ④ 参観者同士、生徒の発言やつぶやき、生徒同士の関わりなど観察し学んだことを語り合う。
- ⑤ 授業後に校長より校内研便りを発行し、授業者への激励と共通認識を図る。

◆本校の成果と課題

① 成果

ア 本校3年目、4年目の教諭が先に研究授業を行うことで、1年目の教諭も積極的に校内研修に参加する意識が高い。また全員、参観後に発表・発言を行うことで、授業改善の高まりと自身の授業実践につながる事ができた。

イ 話しやすい職場環境と若手と中堅以上の組み合わせで、教諭個々の課題解決につながった。

② 課題

ア 若手を中心にICT等を活用した授業も行っているが、生徒個々に適した授業研究についてはまだ研究途中である。（教育DX、個別最適な学び等）

イ 各教師が学校課題を意識した学校運営参画へのさらなる意識の高揚を図る。（校長の浸透させる力）

【名護市立大宮中学校（生徒数410名）】

本校は、本島北部にある名護市に位置し、商業施設が並ぶ58号線沿いにあり、開校36年を迎える。生徒会活動が活発であり、教師の手をできるだけ少なくし、生徒が主体となって様々な活動が行われている。

(1) 教職員の育成における教育課題

中規模校である本校は教職員32名であり、年齢層は、20代8名、30代6名、40代6名、50代以上12名と年齢のバランスが比較的良好。OJTも機能している。

しかし、学校運営上での多忙感は否めない。昨年度1学期においては月45時間以上の超過勤務者は20名を超えていた。そのため、自律的・継続的に主体的な姿勢で研修・修養に望むことは極めて難しく、じっくりと腰を落ち着けて、互いに学び合う機会を持てる職員は少なかった。丁寧に生徒と触れ合うことを意識している職員が多く見られ、従来の研修をさらに発展させ、「新たな教師の学び」が必要だと痛感している。

(2) 課題解決を図る学校経営上の工夫及び取組

① 学校課題を職員全員で考える

生徒指導上の問題や学校課題について、学年の枠を超えて、小グループを作り、全職員で話し合いをもった。初めは生徒の様子から始まり、教師がどのような対応をしているか、そして、解決するために様々な方策が提案された。その方策は他人事ではなく、「私はどうするか」という視点が多くあり、みんなで課題を乗り越えようとしていた。それぞれの持っている経験を生かし、新たな学びへとつながる取り組みであった。学校参画意識も醸成された。

② 職員のきょうどう（共同・協同・共働・協働）体制の確立

職員がチームで動くことの重要性や仕事を一人で抱え込まないことなどを伝え、平日頃の会話の中で、報告・連絡・相談ができるよう管理職も含め話しやすい雰囲気や醸成するよう努めた。

③ 週時程の見直し

週時程を見直し、部活動の下校時間を早くした。そのため、超過勤務者は15名未満に減少し、平均超過勤務時間も大きく減少した。

(3) めざす人材育成に資する校内研修の在り方

本校の校内研修のテーマは「自立した学習者の育成」である。そのため自分で考えて学習計画を立て、自分の学びを実現させることを推進してきた。そのため、宿題をなくし、単元テストに向けた家庭学習を推奨してきた。しかし、諸調査の結果から、家庭学習をしなくなる生徒が増加したため、次のようなステップを踏み、課題の改善に向

けて推進した。

① 原点回帰

ア なぜ「自立した学習者の育成」にしたのか、どのような趣旨があったのか、なぜ宿題がなくなったのかを確認し、やり方を変えたとしても、その趣旨から外れないよう助言した。

イ 全職員で自立した学習者とはどのような姿なのかを話し合った。「自分で学習の計画が立てられる」「自分の力だけでなく他者の力を借りながら学習を進められる」「学習のやり方を知っている」「他者とのコミュニケーションがとれる」などがあげられた。

② 原点回帰からの新しい方策

ア 各教科で「自立した学習者」を育成するために共通実践事項を作成した。

教科	各教科の共通実践事項
英語	○学び方・勉強の仕方を学年の初めだけでなく学期のはじめにも伝える。 ○パフォーマンステストと単元テストの効果的な実施。 ○ALTと連携して、週に1回はspeakingだけの日を設定する。
数学	○振り返りの方法と効果的な活用
国語	○学習進行表を配布し学習の見通しをもたせる。
理科	○授業の振り返りの際に疑問に思ったことを書き出し、その疑問について自ら探求する意欲を持たせる。 →疑問に思ったことを調べる時間をとり、発表する場を設ける。
社会	○フラッシュ ○単語帳 ○まどめの充実
音楽	○合唱のパート練習、全体合わせを録音し自分たちの演奏の完成度を確認 その後のような練習が必要か話し合う。 ○歌唱、器楽、創作の活動で、自分の演奏を録画し、表現が伝わるか確認
技・家	○「まずさせる」体験学習をさせ、自立した学習者を育成する。 ○個性に適したスポーツの関わり方を一人一人にみにつけさせる。 ○ICT機器を活用して自分の動きを見て、見本となる動きと比較できるような教材を提供する。
体育	“○「まずさせる」体験学習をさせ、自立した学習者を育成する。 ○個性に適したスポーツの関わり方を一人一人にみにつけさせる。 ○ICT機器を活用して自分の動きを見て、見本となる動きと比較できるような教材を提供する。”
美術	○省察・振り返りの充実（見通しを持つ力・計画性・調整力） ○鑑賞と制作を連動させた授業の実施（学びの活用・応用力） ○選択の幅がある教材研究（自己決定・主体的な選択）

イ 振り返りノート「あしあと」の作成

生徒が一日を振り返り、家庭学習の時間を記入する「あしあと」ノートを配布し、帰りの会までに書かせている。

① 新しい方策の振り返り

ア 共通実践事項の振り返り

校内研修にて、各教科で1学期の振り返りを行い、全体場で発表を行った。

イ 「あしあと」ノートの評価・反省

（例 英語科で話し合われた評価反省と手立て）

教科	教科の共通実践事項	1学期の成果・課題	課題に対する具体的な手立て
英語	○学び方・勉強の仕方を学年の初めだけでなく学期のはじめにも伝える。 ○パフォーマンステストと単元テストの効果的な実施 ○ALTと連携して、週に1回はspeakingだけの日を設定する	○単元テストとPTの効果的な実施はできた。中間評価もできたらいい。帯活動でやっていることを現段階の力で他者評価ができる機会を設けたい。 ○自由進度学習 自分で選んでできたらいい。同じ難易度の問題を貼り付ける。自分で選んでから、やりやすいものをする。後半はジャンプ問題など。10分程度。文法の問題のところで。 ○振り返り 1年生はできた。（わむこ） わかったこと・むずかしかったこと・これからのこと	○PTのゴール達成に向けて、認める過程を設定し、ゴール達成に向けた意欲向上。認められたら、家でやろうという気持ちになって、自学自習につながってほしい。今の現段階の自分の位置がわかる。認める、家める機会を増やしたい（あしあとのアンケートから自分が頑張ったことを書いている人がダントツ多かった） ○振り返り 1枚のシートでクイズレットなど、持ち帰ってもできるようにする。

◆本校の成果と課題

① 成果

ア 教師一人一人が校内研修を自分ごととして考え、実践を踏まえ、研修することができた。

イ PDCAサイクルに基づき教科会でじっくりと話し合うことができた。

② 課題

諸調査の結果をみると、生徒が見通しを持った学習の仕方など課題が見られる。反省評価を踏まえ進化・充実させていきたい。

5 成果と課題

(1) 成果

三校は、それぞれの特性を生かし、ICT活用や地域資源の教材化、研究授業の公開と協議を通じ、教師が主体的に学ぶ研修文化を形成できた。特に「やらされ感」から「自ら学びたい研修」へと意識を転換し、教職員による協働的な学びと教育の質向上に寄与した。

(2) 課題

研修内容が多様化する中で、小サイクルのPDCAによる進捗管理が不十分であり、学校課題と個別研修を結び付ける仕組みの工夫、また個別最適な学びを保障する実践の深化が今後の課題となる。

6 おわりに

異なる実態の3校による共同研究で、教師が自立的・自律的に学び続けられる研修文化の在り方を探った。教育実践において教員が指導観の転換、学習観の転換が求められる中、管理職は人事育成で研修観の転換させることが重要である。

自律した校内研修体制のもと、教職員が内発的動機に基づいて研修に取り組む姿勢を育むことで、「令和の日本型学校教育」に対応できる人材育成が可能となる。今後も継続して取り組みたい。

第6分科会

研究主題

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」の実現

1 はじめに

今日の社会は、予測不能な変化と多様な課題に直面しており、子どもたちが未来を生き抜くために必要な資質・能力を育むためには、学校だけでなく地域社会全体で教育を支える「社会に開かれた教育課程」の実現が不可欠となっている。

学校にはICT支援員等、教員以外の多様な専門スタッフも導入され、教育の質の向上を目指す取り組みが進められているが、その力を最大限に引き出すためには学校が抱え込む自己完結型の学校運営から脱却し、これらの専門性と地域資源を活かした「チーム学校」の構築が必要である。多様な人材を効率的にマネジメントし、学校全体としての社会のニーズに対応できる教育力を持つ組織へと変革するために、学校長のエージェンシーを発揮した学校経営が求められている。

2 主題設定の理由

宮古地区では、令和8年度までに全中学校区での学校運営協議会制度（CS）の実施が予定されている。このことを踏まえ、前年度までは「チーム学校」の実現に向けた研究に取り組んできた。

令和7年度は、これまでの成果を踏まえ、さらに一歩進んで「チーム学校としての学校と地域の連携・協働体制の在り方」に焦点を当てた研究を推進する。また、「チーム学校」の実現が、どのように教員の「働き方改革」に繋がるのか、その具体的なあり方も考察していく。

校長は、多様な人材の専門性を引き出し、組織全体の教育力を向上させるマネジメント能力が求められている。コミュニティ・スクールの活用や、地域との連携体制の整備を通じて、地域社会全体で子どもたちの教育を支える仕組みを構築し、結果として教員の業務負担を軽減し、専門性に基づく業務に集中できる環境を整えることが、質の高い教育実践に繋がると考えている。

これらの理由から、宮古地区の特色と課題を踏まえ、上記の研究主題を設定する。

3 研究の視点

「チーム学校」の機能強化と、教員の「働き方改革」への具体的な効果について考察していくため、次の2点を研究の視点とする。

提 案 者：佐久本 聡（伊良部島中学校）

司 会 者：新 崎 慶（城 東 中 学 校）

記 録 者：又 吉 史 晃（球 美 中 学 校）

(1) 児童生徒の豊かな学びの実現に向けた地域と連携した「チーム学校」の在り方。

(2) 「チーム学校」と「働き方改革」を推進する学校長のリーダーシップとマネジメント

4 研究の実際（伊良部島中・城東中の取り組み）

○その1：宮古島市立伊良部島中学校（結の橋学園）

【中学：生徒数102名、学級数7、職員数19名】

本校は、平成31年4月に4つの小中学校が統合し、施設一体型小中一貫校として開校している。

現在、小中学校あわせた児童生徒数は298名、教職員は46名で「チーム結の橋」として、教育目標「ふるさとに誇りを持ち 世界へはばたく いらぶの子」の実現に向け、4つの資質・能力「かかわる力」「ふり返る力」「やりぬく力」「みとおす力」を設定し、教育活動全般を通して取り組んでいる。

(1) 児童生徒の豊かな学びの実現に向けた地域連携した「チーム学校」の在り方

① 「結の橋プロジェクト」の取り組み

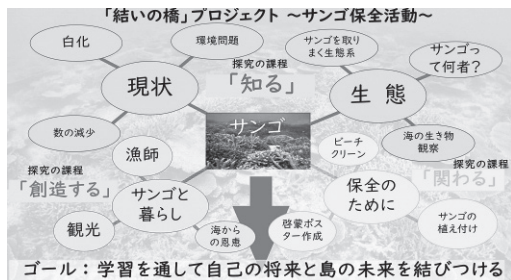
主体的な学習を促す「ふるさと学習」として、総合的な学習の時間に「結の橋プロジェクト」を設け、教科横断的な探究活動を通じ地域課題（環境保全活動）の改善に向けた取り組みを推進している。

ア サンゴ礁保全活動

地域の環境保護団体（伊良部島・下地島サンゴ礁保全再生地域協議会）と連携した取組であり、サンゴ礁保全の専門家チームと共同した地域課題解決学習に取り組んでいる。



「サンゴの植え付け体験」



「サンゴ礁保全活動システム図」

イ サシバ保護活動

伊良部地区では、継続的に国際保護鳥サシバの観察と保護に力を入れている。この渡り鳥を守る活動を通じて、地域住民や関係機関と連携し伊良部島全体の環境保全と自然保護に取り組んでいる。



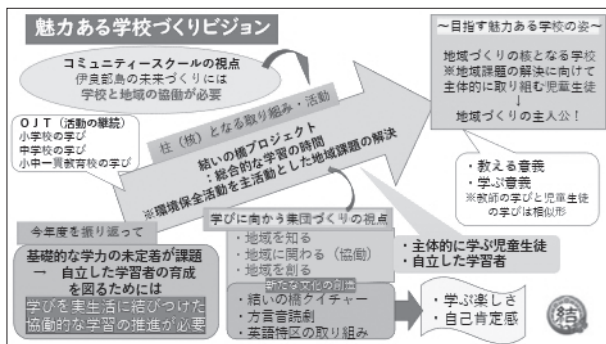
「サシバ保護集会」



「サシバ飛来数調査」

② 地域文化の継承と新たな文化の創造

本校の校区は伊良部島全体（伊良部地区・佐良浜地区）であり、家庭との連携はもちろん、地域コミュニティの活性化（学校を核とした地域づくり）を図るために、地域とのつながりを重視した魅力ある教育活動の展開が求められている。



「結の橋学園魅力ある学校づくりビジョン」

ア 「地域行事」と「地域言語（方言）」の継承

伊良部島は、かつて漁師町として栄え、現在も「海神祭」などの地域行事が海を中心に行われている。しかし近年は、少子高齢化の影響もあり、伝統行事の存続や、方言等に代表される地域文化の継承も課題となっている。そこで、地域の人材活用により、「創作方言劇」に取り組んだり、「海神祭」に参加するなどふるさとの歴史と伝統を肌で感じ理解を深めている。

イ 「結いの橋クイチャー」の創造

児童生徒の発案で、伊良部島の伝統と未来を繋ぐ新たな文化として「結いの橋クイチャー」を創作、運動会で地域と一体となり披露した。

地域のクイチャー保存協会の協力で、古くからの民謡を継承しつつ、島民（伊良部地区・佐良浜地区）の絆を深め、未来に向けた地域づくりの取組である。



「創作方言劇」



「結いの橋クイチャー」

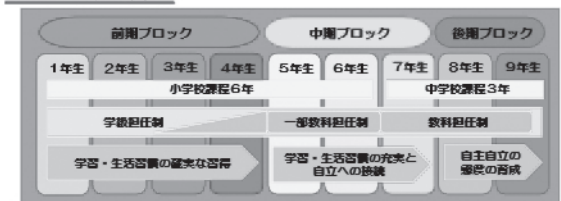
(2) 「チーム学校」と「働き方改革」を推進する校長のリーダーシップとマネジメント

※小中一貫教育校としての特色ある活動

① ブロック部会（校内連携と協働意識の強化）

小中一貫教育校として9年間を3ブロックで構成。前期（1～4年）、中期（5～7年）、後期（8～9年）とし各ブロック所属職員で部会を構成。ブロック運営に必要な事項の検討や共通実践事項の協議、ブロック朝会の計画・運営を行うことで、教職員の働き方改革につなげている。具体的には、密な連携による情報共有の強化で重複業務を削減し、業務の分担化により個々の負担を軽減している。また、共通実践事項の検討を通じて教員の専門性向上と相互の学びを促進、学校全体の教育力向上につなげている。

4-3-2制の実施



義務教育9年間の教育課程に一貫性を持たせ、小学部と中学部の円滑な接続を図るため、前期（小1～小4）中期（小5～中1）後期（中2～中3）の4-3-2制を実施している。

② 「学校運営協議会（CS）」の設置

本校では、昨年度より「結の橋学園学校運営協議会」を設置し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」に向けて活動している。

協議会の設置は、宮古島市派遣の地域コーディネーターと学校管理職が協議を重ね、地域住民、学識経験者等15名の運営委員を委嘱し、会の運営

を行っている。4月に第1回運営協議会を開催、学校運営の基本方針を説明した。地域の特色を活かした学校運営の改善および児童生徒の健全育成に向けた協議等、年3回の開催を予定している。運営協議会の取り組みで、これまで教員が担っていた地域連携に関する業務や、総合的な学習の時間（結の橋プロジェクト）、学校行事の運営などの一部の業務を分担・協力して進めることができ、結果として教職員の負担軽減（働き方改革）にも繋がっている。



「学校運営協議会①」



「学校運営協議会②」

○その2：宮古島市立城東中学校

【中学：生徒数118名、学級数7、職員数19名】

本校は、宮古島本島の中央から東部に位置し、旧城辺地区にある。これまでの中学校区である砂川中学校区、西城中学校区、城辺中学校区、福嶺中学校区の4つの中学校が73年の歴史に幕を閉じ、統合され、令和3年4月1日に「城東中学校」として誕生した新設校である。

中学校区内には、4つの小学校（砂川・西城・城辺・福嶺）が設置されており、幼稚園・小学校との連携は、宮古島市内最大規模である。（下図は宮古島全図）



学校の敷地は、旧西城中学校で、校舍施設を増築しスタートした。校区の範囲も広大になり、宮古本島の約3分の1を占めることとなった。そのため、遠距離通学を要する生徒には、宮古島市教育委員会が購入したスクールバス2台を運行している。

校区内には、観光名所が数多くあり、また各地区とも独自の獅子舞、クイチャー、ヨンシー、棒踊り等の伝統芸能も残されている。

（1）児童生徒の豊かな学びの実現に向けた地域と連携した「チーム学校」の在り方

① 自他を認め尊重し合う支持的風土を育む取組

ア 道徳の授業の充実を図る取組

本校では、自他の良さを認め、自ら判断し、

より良く生きようとする生徒の育成を目指して、4つの重点指導内容項目を示し、各学年教師による道徳ローテーション授業により教師相互の指導力向上を図っている。

イ 宮古南静園療養所見学

差別と隔離政策の実態をハンセン病患者療養施設見学と体験で学ぶ。



「南静園施設内での説明」



「施設患者独房体験」

② 心と身体の安心・安全を図る取組

外部講師を活用し、講話や体験を通して命の大切さ、自分や他者を認め尊重することの大切さについて学習する取り組みを行った。

ア 性教育講話

講師：助産師・保健師・誕生学アドバイザー

- ・性について正しい理解を深め、相手の人を尊重し、思いやりのある人間関係を育てる。
- ・命のワーク（妊婦体験、抱っこ体験、産道体験、離乳食体験）を通して、自分の生まれてくる力を伝え、再認識することで自尊感情を育む。

イ パステルアートワークショップ

講師：メンタルカラーコンサルタント

- ・生徒が自分自身どのような心の状態にあるかを知り、どのようにストレスへ対応していくか考えるきっかけとする。
- ・色彩心理学の観点から生徒の状態を把握し、生徒理解へつなげる。

ウ 人権講話

講師：レインボーハートOkinawa代表

- ・講話を通しLGBT・性の多様性について理解を深め、自分らしく生きることの大切さに気づく。



「パステルアート完成」



「パステルアート発表」

③ 人間関係形成力を育む交流体験学習の取組

ア 横浜サイエンスフロンティア高校附属中学校（YSF）との交流学習（2学年）

毎年4月に学習旅行で宮古島を訪れるYSF

の中学2年生との学年交流学习で、コミュニケーション能力と互いの良さを認め合う相互理解の態度を育んでいる。前年度3学期に相互の生徒による実行委員会を立ち上げ、GoogleMeetを用いた遠隔会議により交流会の目的や実施方法の打ち合わせを重ね、交流会当日の準備やプログラム進行も実行委員を中心に生徒が主体となって行った。



「(YSF)中学校とのお互いの良さを伝える野外交流の後で」

イ 職業講話（マンゴー農家、MMC）と地域に根ざした職場体験活動

地元の若いマンゴー農家の方に依頼し、なぜ、マンゴー農家を職業に選んだのかという夢と希望を中心に語っていただいた。また、CS会議と係し、地域で活動している企業や会社の一覧を作成し、生徒の職場体験学習の受け入れをお願いしている。

(2) 「チーム学校」と「働き方改革」を推進する校長のリーダーシップとマネジメント

① 城東中学校区合同学校保健委員会の開催

小学校と本中学校からの管理職、教務、生徒指導主任、養護教諭、学校三帥、PTA代表の参加。諸問題について検討、協議し、子どもたちの心身ともに健康で安全な学校生活に寄与する。

② 学校と地域の連携・協働体制の推進する取組

ア 小中連携

年間4回推進会議を開催予定（総会含む）。その他、授業研究（道徳、特活、教科等を）年度内に計画している。

イ 「学校運営協議会（CS）」の設置

年間4回程度開催。メンバーは、1中学校区4小学校区からまんべんなく委嘱し、下記について話し合いを行っている。

- ・CS運営協議会の意義と方向性。
- ・地域の企業・会社の人材バンクの作成
- ・伝統文化の継承について学校のみでは厳しいので、地域係が必要。青年会中心の公民館活動として模索。披露の場は学習発表会等を利用。
- ・総合的な学習を見直す。地域に根ざした学習とし、他教科と係させるため年間計画を検討。

5 成果と課題

(1) 成果

① 地域と連携した「チーム学校」の構築

○教育目標の具現化を図るための取り組みを行っているが、外部との交流や外部講師の招聘、体験活動を取り入れることにより、生徒の主体性やコミュニケーション能力が高まった。

○地域課題の解決に向けて地域関係団体や専門家との連携でより実践的な学びとなっている。生徒（教師も）自身も興味・関心を高く持ち、教科横断的な学びが進んでいる。

② 「働き方改革」への具体的な効果

○チーム学校として教員間の情報共有を強化することにより、業務の重複を削減することができた。また、学校運営協議会（CS）は、地域連携や学校行事運営業務の一部を分担することで教員の負担を軽減している。

○学校運営協議会（CS）の設置により、地域連携や総合的な学習、伝統文化継承に関する業務の一部を地域と分担することが期待でき、教員が本来の専門的な業務に集中できる環境が整いつつある。

(2) 課題

●離島の特性として人事異動のスパンが短く、現在取り組んでいる活動を、管理職等が人事異動後も継続できる仕組みづくりや地域との安定的な関係構築を図る必要がある。

●地域の連携・協働体制についてはCS構想が始まったばかりなので、まだ軌道に乗っておらず道半ばであり、今後、課題解決をしていく必要がある。

6 おわりに

本研究のテーマに沿った実践についてまとめたが、両校とも地域の複数校を一つに統合し新設された学校であり「社会に開かれた教育課程」を実現するためにも、学校長のリーダーシップのもとで「チーム学校」を構築し、学校と地域が共に未来の教育を創り出す必要を感じる。それが教員の「働き方改革」にもつながり、より質の高い教育実践につながるはずである。今後も地域に根ざした学校の強みを生かせるよう取り組んでいきたい。

第66回沖縄県小・中学校長研究大会 那覇大会

大会宣言文

沖縄県小・中学校長会は、沖縄県小中学校教育の振興を期するために学校経営の諸問題について、その解決を図ることを目的として活動し、多くの成果をあげてきた。

今年は戦後80年の節目を迎え、紛争が頻発する国際情勢の中、改めて平和の継承や平和教育がより一層重要になっている。また、社会情勢は急激に変化しており、価値観の多様化、DXや生成AI技術の進展など、あらゆる課題への対応が期待されている。そのため学校教育において子供たちが多様性を認め合い、たくましく生き抜いていけるような資質、能力を育むことや、未来を築く教育を力強く推進していくことが求められる。その解決に向け、課題を見出し自ら考え模索し実践する力、コミュニケーションにより他の人と協働して苦境を乗り越える力、先を見通し予測して危険や困難を回避する力など、知識・技能と結びつけ、生き抜くための術を小・中学校で身につけさせたい。また、学習指導要領の理念の具現化、社会に開かれた学校の創造などに加えて、学校の機能を根底から高める必要がある。そのためには教職員の資質向上や学校をチームとして機能させながら能力を発揮できる組織作りが不可欠であり、それと平行して処遇改善等教師を取り巻くより一層の「働き方改革の推進」が求められている。

このような現状を踏まえて、沖縄県小・中学校長会は、全国連合小学校長会が示す「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会をつくる日本人の育成を目指す小学校教育の推進」、全日本中学校長会が示す「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の作り手を育てる中学校教育」を主題に掲げ、課題解決に迫るべく研究協議を進めた。

本研究大会までに培った研究、および実践を経て、私たち校長は小・中学校教育の充実を図るべく、校長のリーダーシップの下に学校職員や関係者との連携、協働で時代のニーズに応える決意である。

ここに、次の事項を決議し、その実現を期する。

決 議

- 一、人間尊重の精神を根底におき、「時代を切り拓く力」を養成する教育の推進
- 一、先見性のあるビジョンに基づく、創意ある学校経営の推進
- 一、学習指導要領の趣旨を踏まえた学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営、並びに学校教育の充実を図るカリキュラム・マネジメントの推進
- 一、家庭・地域社会・関係機関及び関係団体との連携を深め、信頼される開かれた学校づくりの充実
- 一、教職員研修の充実を図り、教職員としての使命感の高揚と資質・能力の向上の充実
- 一、ICTをデジタル学習基盤として効果的に活用するためのGIGAスクール構想の推進・充実
- 一、個のニーズに応じた特別支援教育の充実と、児童一人一人の自己実現を目指す教育の推進
- 一、教職員が心身ともに健康でその意欲と能力を最大限に発揮できるよう、「働き方改革の総合的・計画的」な推進
- 一、命を守る安全教育、防災教育の推進及び様々な危機への対応と未然防止の体制づくりの推進

令和7年11月7日
沖縄県小・中学校長会

あ と が き

本研究大会の目的は、「校長の職務並びに教育活動について研究を深め、資質の向上を図るとともに、教育課程の取組を通して沖縄の現状を直視し、小・中学校教育の本質に立って、より充実した教育活動の展開を図る」ことにあります。

この目的を達成するために、第66回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会の開催に向け、県校長会において運営等の基本的事項を確認し、各部との連絡調整や開催地区である那覇地区との連携を図りながら、諸準備を進めてまいりました。

本研究大会は、県教育長講話、分科会、記念講演会により構成されております。分科会では、小学校10分科会、中学校6分科会を設置し、本県の教育課題について各地区会員が実践事例に基づき研究協議を行います。小学校においては、全国連合小学校長会の研究主題を受け、大会主題を「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とし、副主題を「多様な価値をもつ他者と主体的・協働的に学び合い、豊かな未来社会を創造する子どもを育む学校経営」と設定いたしました。中学校においては、全日本中学校長会の研究主題を受け、大会主題を「豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」と設定いたしました。

各分科会においては、大会主題を基盤とした協議題に沿って活発な協議が行われ、学校教育のさらなる充実が図られるものと確信しております。これらの成果は、県内各地の教育実践に生かされ、子どもたちが新しい時代を切り拓くために必要な資質・能力を育むものとなることでしょう。

また、開催地区の会員各位には、会場準備をはじめ運営全般にわたり多大なるご尽力を賜りました。ここに改めて深甚なる謝意を表します。今後とも、本会が県内教育の充実と発展に寄与できますよう、なお一層努力を重ねてまいる所存であります。

最後になりましたが、本大会の成果が県内教育のさらなる発展に結びつくことを願い、大会要録の作成にあたりご尽力をいただきました関係各位に心から御礼申し上げ、あとがきといたします。

令和7年11月

沖縄県小・中学校長会研究部

○小学校

美 差 淳 司（小研究部長：小禄小）

塩 川 真 弓（中頭地区：北中城小）

高 木 眞 治（島尻地区：東風平小）

磯 部 大 輔（八重山地区：真喜良小）

赤 松 啓 介（国頭地区：羽地小）

玉 村 かおり（那覇地区：泊小）

亀 川 はるみ（宮古地区：西城小）

○中学校

濱 川 太（中研究部長：寄宮中）

照 屋 武（中頭地区：伊波中）

与那覇 周 作（宮古地区：西辺中）

千 葉 康 成（国頭地区：金武中）

稲 福 政 彦（島尻地区：具志頭中）

岡 崎 心 一（八重山地区：竹富小中）

第 66 回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会振り返り

11 月 6 日(木)・7 日(金)開催の第 66 回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会
大変お疲れ様でした。

下記の QR コードより「振り返り」をお願いします。

なお、今年度は、この振り返りの提出をもって【出欠の確認】とさせていただきます。

小中併置校及び小中一貫校におきましては、中学校にて記載願います。



第66回沖縄県小・中学校長研究大会

－ 那 覇 大 会 要 録 －

令和 7 年11月 6 日(木)・ 7 日(金)

発行者 沖 縄 県 小 ・ 中 学 校 長 会

電 話 (098) 943－9747

FAX (098) 943－9748

E-mail:

oki-koutyukai2@kca.biglobe.ne.jp (事務局長)

oki-koutyukai1@kpe.biglobe.ne.jp (事務局員)

印 刷 株 式 会 社 国 際 印 刷

那覇市宮城 1 丁目13番 9 号

電 話 (098) 857－3385 (代)

F A X (098) 857－3892

E-mail:kokusai@herb.ocn.ne.jp